

はじめに

独立行政法人国際協力機構（JICA）では、国際協力に関する知識の普及と理解の推進、海外と国内の課題を繋げて考えられる人材と社会課題の解決を目指す人材の育成を目指し、開発教育・国際理解教育を推進することを使命の一つとしております。

教育委員会や教師、あるいは自治体、NGO 等のみなさまと連携しながら、① JICA の海外での協力現場における「知見の還元」、②地球規模課題への取組を紹介し「考える機会の提供」、③地域の課題と地球規模の課題を結び付け、その解決のために行動する児童・生徒を育てていただくための「橋渡し役」となる、の3点に重点を置き、「持続可能な社会づくりの担い手を育てる」国際理解教育・開発教育の支援に取り組んでいます。

学校教育の現場で次代を担う児童生徒の教育に携わり、国際理解教育・開発教育に関心を持つ教師のみなさまを対象として、教師海外研修を実施しています。教師の方々に実際に開発途上国を訪問いただき、開発途上国が置かれている現状や国際協力の現場、開発途上国と日本との関係に対する理解を深めていただき、その成果を、学校現場での授業実践等を通じて、教育活動に役立ててもらうことを目的とし、この研修を約 60 年にわたり継続して実施しています。

今年は初めて JICA 東京・JICA 北陸での合同開催となり、1 都 7 県からの 21 名の先生がパラグアイ・バングラデシュの 2 コースに分かれての参加により実施しました。パラグアイは「教育」「日系社会」「保健」など、さまざまな切り口で海外協力隊の活動現場、現地で活動する団体などを訪問しました。バングラデシュは渡航直前に危険レベルの引き上げ（外務省）に伴い現地への渡航を見送り、国内にてバングラデシュや持続可能な世界について学ぶプログラムを実施しました。どちらのコースも、研修の中で色々な人と出会い、交流することで、「国際協力とは何か」「幸せとは何か」「物事を自分の尺度で測ってしまっていないか」など、改めて考えるきっかけとなりました。

9 月～12 月には、教師のみなさまが研修の成果を活用した授業を実践しています。本報告書は、今年度の研修の概要及び参加者の勤務校における授業実践の実例をまとめたものです。教育現場の第一線で日々生徒たちと向き合っている教員の方々が、それぞれの教育現場で実践を行っていたことは我々の大きな励みとするところです。これらを通じて、持続可能な社会実現への児童・生徒たちの理解が深まり、周りの方々にも波及していくような好循環が生まれることを期待しています。

結びに、本研修の実施にあたりご支援をいただいた各教育委員会並びに関係諸団体みなさまに感謝を申し上げるとともに、今後とも JICA が取り組む市民参加協力事業にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2025 年 3 月

独立行政法人国際協力機構（JICA）

東京センター

北陸センター

所 長 紺屋 健一

所 長 富田 洋行

目 次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
1. 参加者一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
2. 教師海外研修とは・・・・・・・・・・・・・・	4
3. 派遣前研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
4. 海外研修（パラグアイ）・・・・・・・・・・・・	7
5. 海外研修 ※国内代替研修（バングラデシュ）・・・・・	14
6. 派遣後研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
7. 授業実践・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	23
8. 授業実践報告会・・・・・・・・・・・・・・・・・・	169
9. 総括研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	170
10. 合同報告会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	173
11. 研修参加者より・・・・・・・・・・・・・・・・・・	174
12. アドバイザーの先生達から・・・・・・・・・・・・	180
13. JICA 開発教育教材案内・・・・・・・・・・・・	181
おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	183

1

参加者一覧

パラグアイコース参加者

氏名	都県	学校名	担当教科
岩田 徳子	富山	県立上市高等学校	英語
河上 智子	埼玉	川越市立川越第一小学校	全教科
城島 愛	千葉	市川市立行徳小学校	複数教科
中村 陽美	埼玉	県立特別支援学校塙保己一学園	家庭科・自立活動・総合的な学習の時間
夏堀 隼也	千葉	千葉市立宮崎小学校	全科
根岸 彩夏	群馬	県立大間々高等学校	外国語（英語）
蓮尾 志津加	東京	大田区立矢口東小学校	全教科
早川 千恵子	長野	長野市立浅川小学校	全教科
渡邊 千尋	東京	都立新島高等学校	英語
渡邊 恋子	新潟	長岡市立大河津小学校	体育
吉田 彩子	東京	板橋区立板橋第八小学校	日本語指導

バングラデシュコース参加者

氏名	都県	学校名	担当教科
井土 恵美里	埼玉	県立所沢西高等学校	国語
加藤 瑞穂	福井	美浜町立美浜東小学校	音楽
鬼山 彩緒利	千葉	松戸市立横須賀小学校	全教科（教科担任制：外国語）
太田 祥子	東京	駒場東邦中学・高等学校	地理、公民、政治経済
澤田 将智	埼玉	県立不動岡高等学校	地理
執行 稜	千葉	市川市立宮田小学校	全教科
清水 紀恵	群馬	県立尾瀬高等学校	英語
高橋 絵理	東京	白百合学園小学校	英語科
田中 慧	東京	東洋英和女学院小学部	国語・算数
田中 利奈	群馬	伊勢崎市立赤堀南小学校	国語・算数・社会・図工・道徳・学活・総合

アドバイザー

氏名	所属
佐藤 真久	東京都市大学 教授（JICA 東京 教師海外研修アドバイザー）
白水 始	国立教育政策研究所 初等中等教育研究部 副部長・総括研究官
畑 文子	教育環境デザイン研究所 研究員

JICA 運営

氏名	所属
古賀 聡子	JICA 東京センター 市民参加協力第一課
三井 久美子	JICA 東京センター 市民参加協力第一課
小倉 健	JICA 東京センター 学校教育アドバイザー（埼玉県教育委員会より派遣）
竹田 美理	JICA 北陸センター 業務課（～2024年9月）
高橋 理恵	JICA 北陸センター 業務課（2024年8月～）
中村 史	新潟県国際協力推進員
高橋 雪子	埼玉県国際協力推進員
佐々塚 麻里菜	群馬県国際協力推進員
ムーア 美紀	長野県国際協力推進員
岩沢 久美子	千葉県国際協力推進員（～2024年9月）
笹瀬 正樹	千葉県国際協力推進員（2024年10月～）
鈴木 歩美	埼玉県国際協力推進員（総合教育センター配属）（～2024年12月）
橋本 流詩亜	埼玉県国際協力推進員（総合教育センター配属）（2025年1月～）

2

教師海外研修とは

教師海外研修の歴史

1965 年、日系移住地に高校教員を送ることから始まり、現在は小学校・中学校・高校・特別支援学校の先生を対象に実施しています。一般教員コース・行政主幹コース（教育委員会指導主事以上、教頭、校長等）あわせて、これまでに全国から約 3,500 名の教員を開発途上国の現場に派遣しています（2024 年現在）



目 的

1. 開発途上国の現状・課題、日本との関係、国際協力の意義、また SDGs（持続可能な社会）について理解を深め、継続的に国際理解教育 / 開発教育の実践を行う。
2. 研修参加者が本研修の成果を活用し、各地域で学校教育関係者等への国際理解教育 / 開発教育の理解促進を図り、情報を共有する。



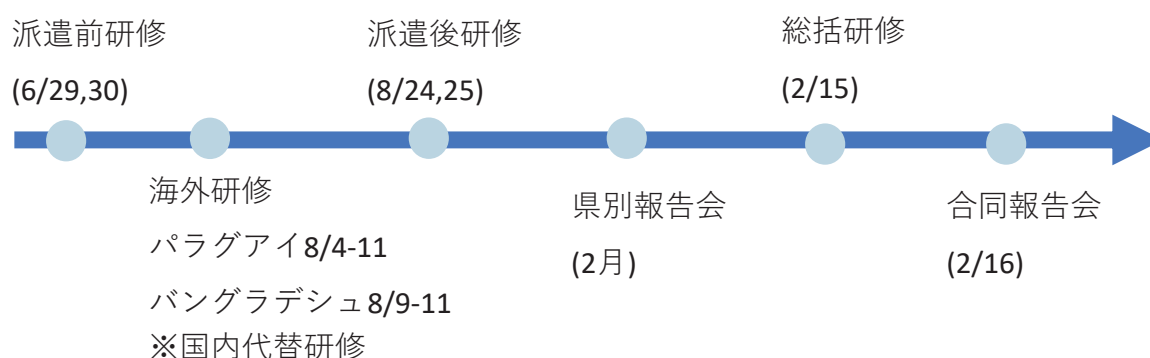
主 催

独立行政法人 国際協力機構 東京センター（JICA 東京） / 北陸センター（JICA 北陸）

後 援

外務省、文部科学省 東京都教育委員会、一般財団法人東京私立中学高等学校協会、埼玉県教育委員会、さいたま市教育委員会、一般社団法人埼玉県私立中学高等学校協会、千葉県教育委員会、千葉市教育委員会、一般社団法人千葉県私立中学高等学校協会、群馬県教育委員会、群馬県私立小・中・高等学校協会、新潟県教育委員会、新潟市教育委員会、新潟県私立中学高等学校協会、長野県教育委員会、公益社団法人長野県私学教育協会

スケジュール（2024 年度）



自分の変容・児童生徒の変容をみとる1歩目

6/29 (土)

時刻

プログラム

● 10:00

開会、自己紹介

1年間の研修を共に学び合う仲間との出会い

この研修の最大の特徴は、地域・校種・教科のバラバラな先生達が集まり、1年間を通して一緒に学び合うことです！ほとんどが初めましての先生達、まだまだ緊張感のなか、ついに研修スタートです。



● 10:45

【講義・演習】自身の経験と関連づけた学びほぐし

東京都市大学教授 佐藤 真久先生

持続可能な社会の担い手づくりへ

本研修のアドバイザーである、東京都市大学の佐藤先生による講義です。グローバルなものの方、4つのレンズとは？

事前にオンデマンド学習として動画(※)を見てきた先生達が、それぞれの考えや疑問などを共有しました。



● 11:35

事務連絡

● 11:45

昼休憩

● 12:35

国別説明会

● パラグアイ：JICA 小山 泰広

● バングラデシュ：JICA 松村 直樹

● 13:35

コース説明 / 役割分担決め

● 14:35

休憩

● 14:45

過年度参加者の実践例

2023 ザンビア

梅村 唯斗 [群馬県高崎市立矢中中学校]

2023 パラグアイ

五百川 真実 [新潟県佐渡市立河崎小学校]

先輩の授業実践

去年の教師海外研修に参加した梅村先生（群馬県高崎市立矢中中学校、ザンビアコース参加）と、五百川先生（新潟県佐渡市立河崎小学校、パラグアイコース参加）が、去年実践した授業や1年を通じた取り組みについて発表してくれました！



● 15:55

休憩

● 16:05 チームでの授業作りについて（説明＋チームビルディング）

いよいよチーム作り！

1日目最後にして最も頭を悩ませた、授業チーム作り。お互いにアドバイスし合いながら授業案を磨けるように、関心のあるテーマごとにチームを作っていきます。それぞれが興味のあるテーマを付箋に書き出し、壁に貼りながら「この辺は一緒にできるんじゃない？」「ここも同じ感じかな？」と話し合いながら、なんとなくチームの形になってきました。



● 17:05 休憩・準備

● 17:10 東京ジャーミー見学

6/30（日）

時 刻

プログラム

● 9:30 事務連絡（体調確認、今日のゴール）

● 9:35 【模擬授業風】バンパラを知り、日本を見つめ直す

● ジグソー『バンパラポン』 ● フォトランゲージ（＋他の手法についてサイト紹介）

国立教育政策研究所 白水 始先生

教育環境デザイン研究所 畑 文子先生

児童生徒になって授業体験！

2日目の午前中は児童生徒になって授業体験！

国立教育政策研究所の白水先生、教育環境デザイン研究所の畑先生にご協力いただき、「知識構成型ジグソー法」を体験しました。更に、海外研修が「びっくり体験記」にならないための様々な実践例や手法も体験し、授業作りにおけるポイントを掴んでもらいました。



● 11:50 休憩

● 12:00 「子どもが自ら考えるための授業づくり」（講義＋ワーク）

子どもが自ら考えるための授業作り

国立教育政策研究所 白水先生による講義です。

「こういう問いだったら子どもからはどんな発言が出てくると思う？」子どもの反応を予想しながら、問いの立て方について考えました。

この「子どもの学び予想」は、今後チームで授業案をブラッシュアップしていくときに、色々な視点で話し合ってもらいたい大事なポイントです。



● 13:10 チームごとに授業骨子案作成

● 15:00 チーム授業 共有

● 15:30 派遣前研修振り返り

● 16:00 写真撮影・事務連絡・中締め

● 16:15 国ごとの打合せ（適宜解散）

※オンデマンド学習の動画（①②）は、こちらから視聴できます！

オンデマンド学習①

持続可能な社会の担い手づくりへ
～学びの作戦変更、持続可能な
開発のための教育（ESD）の経験



オンデマンド学習②

持続可能な社会の担い手づくりへ
～グローバルなものの見方を活かす



4

海外研修（パラグアイ）

パラグアイ共和国 (Republic of Paraguay)



〔首都〕 アスンシオン

〔面積〕 40 万 6,752 平方キロメートル（日本の約 1.1 倍）

〔人口〕 約 684 万人（2023 年、世銀）

〔民族〕 混血（白人と先住民）95%、先住民 2%、欧州系 2%、その他 1%

〔言語〕 スペイン語、グアラニー語（ともに公用語）

〔宗教〕 主にカトリック（信教の自由は憲法で保障）

〔主要産業〕 農業、製造業（自動車部品など）、電力

〔GDP〕 429.6 億ドル（2023 年 世銀）

〔一人当たりの GNI〕 6,260 ドル（2023 年 世銀）

〔経済成長率〕 4.7%（2023 年 世銀）

〔パラグアイの対日貿易〕

（ア）貿易額（2024 年：財務省貿易統計）

輸出：70.8 億円 / 輸入：168.4 億円

（イ）主要品目 輸出：トウモロコシ（飼料用）、ごま（採油用）、銅くず等

輸入：輸送用機器類、電気機器類、香料等

〔通貨〕 グアラニー

〔日本の援助実績〕 有償資金協力：1,732.13 億円 / 無償資金協力：413.73 億円 /

技術協力実績：913.30 億円

（2022 年度までの累積）

〔主要援助国〕 (1) 日本（44.93 百万ドル） (2) 韓国（30.83 百万ドル）

(3) フランス（30.64 百万ドル）

1976 年以降、2004 年、2011 年、2014 年、2020 年を除き、日本が最大の援助国。

〔在留邦人〕 3,778 名（2024 年 10 月、外務省海外在留邦人数調査統計）

〔在日パラグアイ人数〕 2,292 名（2024 年 6 月末、法務省在留外国人統計）

〔外務省ホームページより〕

パラグアイ日程

日			内容
1	7/26	金	羽田空港出発→シカゴ→サンパウロ
2	7/27	土	アスンシオン着
3	7/28	日	スーパー訪問/打合せ
4	7/29	月	・事務所ブリーフィング ・MIDORI 工房
5	7/30	火	・現地小学校 (Escuela Básica N° 296) 【協力隊：小学校教育】 ・イグアス日本人会 ・イグアス農業協同組合
6	7/31	水	・イグアス市役所 【協力隊：環境教育】 ・聖霊幼稚園 【協力隊：幼児教育】 ・イグアス日本語学校 【交流プログラム・協力隊：日本語教育】
7	8/1	木	・萩原工業 (パラグアイに進出している日本企業) ・イタイプダム (水力発電量世界第2位) ・Guarani 空港 【有償資金協力：エステ市国際空港建設事業】
8	8/2	金	・イグアスダム 【技プロ：イグアス湖流域総合管理体制強化プロジェクト】 ・Mundo Guarani (先住民族の歴史・文化を学ぶ施設) ・小規模農家 ・ホームステイ
9	8/3	土	・チーズ工房 【日系研修：次世代農業を担い革新を起こす人づくり 2023】 ・前半振り返り
10	8/4	日	・大規模農場 ・カアクベ大聖堂
11	8/5	月	・国家障害者人権庁 SENADIS 【技プロ：障害者の社会参加促進プロジェクト】 ・ニャンドゥティ製作見学 【JICA 基金：パラグアイ伝統工芸品ニャンドゥティ・ブランディング事業】
12	8/6	火	・女性の街 ciudad mujer (女性に対する支援機関) ・パラグアイ宇宙機構 AEP 【技プロ：社会経済開発に向けた宇宙計画管理プロジェクト】
13	8/7	水	・国立植物・種子品質・検疫機構 SENAVE ラボ 【技プロ：小規模農家の輸出農作物安全性向上プロジェクト】 ・教材等購入
14	8/8	木	・事務所報告会
15	8/9		・アスンシオン出発→サンパウロ→シカゴ
16	8/10	土	羽田空港到着

パラグアイ日程詳細

7月28日(日)

努力の結晶

富山県立上市高等学校
岩田 徳子



JICA パラグアイの事業班長である平井さんに案内をしていただきながら、滞在先のホテルである「FIVE」近くのスーパーマーケットに立ち寄らせていただきました。そこには、asado と呼ばれる南米で食される大きな肉の塊を焼いた焼肉料理や chipa というお菓子、また Terere という健康に良いとされるお茶などパラグアイならではの食べ物やお菓子、飲み物を目にすることができました。バラエティーに富んだ食材の中でも、ひときわ鮮やかで私たちの目に留まったのが、色とりどりに陳列されたフルーツ売り場でした。その中でも、赤く美しく目を引いた「いちご」について平井さんから話を聞かせていただきました。パラグアイにいちごが普及することができたのは、まさに JICA が甚大な貢献を行ってきた成果であり、人々から感謝されることで、努力が実を結びとても嬉しかったと仰られました。

また平井さんのお話から、もともとパラグアイは肉中心の食生活で、野菜を食べる習慣がなかったが、今日このように野菜やこれまでにパラグアイで見られなかった果物が食卓を豊かにしたのは、日系人や JICA が長年にわたって、並々ならぬ苦労と努力を重ねてこられた成果だと実感し、パラグアイと日本の繋がりをさらに認識することができました。

7月29日(月)

廃材は宝物

川越市立川越第一小学校
河上 智子



JICA 事務所でのブリーフィングを終えて最初の訪問先である MIDORI 工房に伺いました。中に入ると、パロサントという香木のいい香りと共に主宰の立川さんが笑顔で私達を迎えてくれました。MIDORI 工房は森林伐採が問題視されている中で、パロサントの端材が破棄されていることに注目して、箸や食器、アクセサリ、おもちゃなどを制作して販売しています。

工房では、様々な国の人々が一つ一つの物を丁寧に製作していました。特に印象に残ったのは、制作過程で出た木材を廃材ではなく宝物といい最後の最後まで活用をしていました。また、立川さんは自身の工房の発展だけでなく、パラグアイの地位向上のために自分たちの持っている知識や技術を教える講習会を行っているそうです。

パラグアイの森林環境を大切にし、国全体を巻き込み国の発展の未来を願う姿に出会うことができました。

7月30日(火)

友情の日

市川市立行徳小学校
城島 愛



朝早くにアスンシオンを出発し、イグアスへ移動しました。午前中にパラグアイの現地校へ伺い、午後はイグアス日本人会と農協へお邪魔しました。

現地校は午前午後の二部制で、教科書も印刷機もない環境の中で、先生方が教材を作り工夫して授業をしているとのことでした。

私たちは協力隊の古澤さんの授業に参加させていただき、子ども達と折り紙をしました。スペイン語とグアラニー語しかわからない子ども達でしたが、伝えたい私達の思いとわかろうとする子ども達の思いが繋がったようにも感じました。

今日は「友情の日」ということで、この友情の日は、パラグアイが国連に提案して2011年より“国際友情デー”と定められました。身近な人との友情から国や文化を超えて世界平和を促進することが目的だそうです。今日この日に、私たちがパラグアイの子ども達と折り紙を通じてアミーゴになれたことはとても感慨深いものがありました。

7月31日(水)

楽しかったー！

埼玉県立特別支援学校
埴保己一学園
中村 陽美



午前中には、イグアス市役所で環境教育の取り組みについて伺い、イグアス聖霊幼稚園を見学しました。お昼にはラーメンを食べて、懐かしい味にほっこり。日本パワーを蓄え、いよいよイグアス日本語学校へ。

校舎の雰囲気は異なるものの、校歌や学校目標などの掲示物、図書は日本の学校と変わりません。昼礼では「まえならえ」の号令のもと整列し、「きをつけ、礼」できれいなお辞儀、先生の話をしっかり聞く姿に、日本の反対側に日本の学校があることを再確認。ここでは、ルーツや日本語の習得度関係なく学び笑い合っています。

1時間目は国語コース、ラパーチョコースに分かれて学び、2時間目は私たちが授業をさせていただきました。練習を重ねてきた校歌のプレゼントはしっかり届き、3時のおやつ、じゃんけん列車、フォークダンス、昔遊びのどれも大盛り上がり！終礼で聞いた子どもたちの「楽しかったー！」という元気いっぱいの声にほっとしました。忘れられない一日となりました。

8月1日(木)

Amigo

千葉県立宮崎小学校

夏堀 隼也



いるのだろう、と感じました。パラグアイの「Amigo」精神を大切にしているからこそ、愛されながら会社が成長してきたのかもしれない。パラグアイ人、グアラニー先住民、日系人、ルーツ多様な人々も、「Amigo」の感覚で尊重し合っている様子も多く見られました。自分もパートナーシップを築く上で、「Amigo」の感覚を大事にしていきたいと思います。

午前中は、日本からパラグアイに進出した萩原工業の萩原さんにお話を伺った。バルチップという商品のすごさや、環境への配慮、人種やルーツへの捉え方など、興味深いお話の中で私が最も印象的だった言葉が、「Amigo」でした。パラグアイでビジネスパートナーになるには、まず「Amigo」になることが大切、とのこと。萩原さんのお話の端々に、人を大切にする姿勢が見られました。パラグアイ人の従業員に仕事を教え、スペイン語の部分では助けてもらう相互補完関係。マルコスくんというバイリンガルの青年への敬意の念。従業員との笑顔でのやりとり。萩原さんは、仕事相手のことも「Amigo」として接して

8月2日(金)

未来に繋がる芽

群馬県立大間々高等学校

根岸 彩夏



環境保全に対する意識は確実に変わってきていると感じた。

今後このイグアスを守っていくのは、次の世代。教育を受けた子供たちが大人になったとき、どんなイグアスが広がっているのか、そして彼らはどんなイグアスを作り上げていくのか、心から楽しみだと思った。

午前に訪問したイグアスダムでは、JICA 協力のもと実施された「イグアス湖流域総合管理体制強化プロジェクト」と ANDE（国家電力公社）の取り組みについてお話を伺った。イグアス湖流域は、アカラウ湖の夏場の水位調節用湖として活用されており、安定した電力供給のために重要な流域になっている。ANDE は、先住民のグアラニー族と共に環境教育や植林、苗づくりなどに根気強く、そして日本への親愛なる気持ちを持って取り組んでおり感銘を受けた。ANDE は特に『環境保全のノウハウを移転すること』に力を入れており、学校での環境教育・子どもたちとの植林・プラットフォームでの油を利用した石鹸づくり・講演会の実施など様々な活動に心を込めて取り組んでいる。子どもたちやその家族、地域住民の

8月3日(土)

チーズのお世話で地域の成長

大田区立矢口東小学校

蓮尾 志津加



JICA の日系社会研修に参加したスイス系パラグアイ人が営むチーズ工房を訪問した。

工房の二階には生乳のタンク。一階は製造と加工のエリアがあった。また、隣の建物に、チーズの直売所がある。温度や湿度の管理に加え、塩水につけたり、根気よく熟成させたりと多くの過程を経て市場に出ている。

昨晚のホームステイ先でも振る舞われた家庭があったり、「MICHINO EKI」にも出荷していたりする様子から市民にも浸透していると感じた。

今後は研修で学んだ「製造過程が一目でわかるような施設」の建設や「ゆるキャラ」の導入で地域ブランディングを活性化させたいとのこと。

その土地のものを使って、その土地に合ったものを作り出すということは、苦労もあったが、お客さんの「おいしい」と言われたときに報われると工房長が教えてくれた。

将来、日本で学んだことが活用され、カタチになるのが楽しみだと感じた。

8月4日(日)

それぞれの願い

長野市立浅川小学校

早川 千恵子



日系2世の大西ホルヘさんは、大豆などの大規模農場の経営者で、イグアス農協の理事長でもある。パラグアイの大豆生産では遺伝子組換え大豆の栽培が大多数で、収穫された大豆は主にブラジルなどへの輸出や肥育している家畜への飼料としている。その中で、日本へ輸出するために、少量だが非遺伝子組換え大豆も栽培している。遺伝子組み換えの大豆よりも手入れが必要で、日本への輸送費や、さらには日本での厳しい検査があるのになぜ作っているのだろうという疑問を大西さんに投げかけてみた。すると、1世から受け継いだ日本とのつながりを継承したいという思いと将来日本の食糧危機が来た時に食糧を送ることができればという言葉が返ってきた。また、大西さんは従業員であるパラグアイ人の子どもたちが学校に通いにくい環境であることから、農場にスベ

イン語学校を設立し、子どもたちの学びの場も保障している。教師である私たちにできることは何だろうか、祈りとともに私たちの問いは続く。

8月5日(月)

一針一針に愛をこめて

東京都立新島高等学校
渡邊 千尋



午前中は障がいのある方々の自立に向けた活動を行う国家障害者人権庁に訪問した。国内では障がいのある方々への法整備が進んでいるが、課題も多々ある。例えば、「インクルーシブな学校」ではあるが、施設がバリアフリーではなく、障がいのある生徒への教員、他の生徒の知識・理解が追いついていないという現状がある。

他方で、モバイルクリニックという移動型診療所を使い、地方への支援も届いていると知った。

午後はニャンドゥティブランディング事業の団体を訪問した。その後、ニャンドゥティの作り手ヴィクトリーナさんを訪ねた。パラグアイの伝統工芸品であるニャンドゥティの後継者不足問題に注目した。地域のワー

クショップ等で後継者を育成するだけでなく、作り手が正当な対価を得られる仕組みづくりが必要であると実感した。

「ニャンドゥティが私の全て。ニャンドゥティを愛している。糸を紡ぐごとに家族の絆、人や村との繋がりをを感じる」というヴィクトリーナさんの思いを私たちも紡いでいきたい。

8月6日(火)

共感と話し合い

長岡市立大河津小学校
渡邊 恋子



午前は、女性向けの包括的支援を行う施設シウダ・ムヘール（女性の街）を訪問した。

ここでは、女性の社会的課題を一度に解決できるような施設を目指している。路上で物売る女性の子供を預かったり、履歴書の書き方・値段の付け方・写真の撮り方・アイデンティティの魅せ方を教えたり、性暴力によるトラウマの治療をしたり、6つのモジュールを組み合わせながらこれら全てを無償で行う。

清掃員を雇う際にも、質はどうか？守秘義務は守れるか？とお互いの価値観が合致するまで徹底的に話し合う。女性がたらい回しにされないよう、さまざまな機関との連携を大切にしている。

温かく、細やかなケアが全ての女性の居場所となっている。時には悲しみや怒りなどの感情をぶつけられることもある。しかし、活動を続け、「女性のためになるなら」「女性が変わると社会が変わる」という言葉からも熱いパッションを感じた。

対象は違えども、私たちもパッションを持って、教育に携わっていきたい。

8月7日(水)

学び合う楽しさ

板橋区立板橋第八小学校
吉田 彩子



今日はいよいよ現地での視察訪問の最終日だった。パラグアイに到着してから今日までの約2週間、その日の活動を振り返る時間を毎日設けてきたが、今日は最終のまとめとして、それぞれ帰国後の授業について、グループで情報交換や相談を行った。「自分1人で考えているとよく分からなかったことが、話しているうちに大分整理されてきた」という声も聞かれ、それぞれが帰国後の授業実践についてワクワク感と意欲を高めた1時間だった。

思い返せば、この振り返りの時間が今回の研修の中で何よりの学びの場であったと思う。視察、見学で見聞きたことを、仲間と共有することで、自分の考えを新しい視点から捉え直すことができた。

そしてそれは大人の私たちにとっても楽しく刺激的で、新しいことを学ぶ楽しさや学び合う仲間の大切さを実感する経験だった。これからも、自分自身が学び続けると共に、学ぶことの喜びを子供達にも伝えていきたい。

5

海外研修 ※国内代替研修
(バングラデシュ)バングラデシュ人民共和国
(People's Republic of Bangladesh)

- 〔首都〕 ダッカ
- 〔面積〕 14 万 7 千平方キロメートル（日本の約 4 割、バングラデシュ政府）
- 〔人口〕 1 億 7,119 万人（2022 年、世界銀行）
- 〔民族〕 ベンガル人が大部分を占める。ミャンマーとの国境沿いのチッタゴン丘陵地帯には、チャクマ族等を中心とした仏教徒系少数民族が居住。
- 〔言語〕 ベンガル語（国語）、成人（15 歳以上）識字率：77.7%
(2022 年、バングラデシュ統計局)
- 〔宗教〕 イスラム教徒 91%、その他（ヒンズー教徒、仏教徒、キリスト教徒）9%
(2022 年、バングラデシュ統計局)
- 〔主要産業〕 衣料品・縫製品産業、農業
- 〔GDP〕 3,055 億ドル（2022 年、世界銀行）
- 〔一人当たりの GDP〕 2,688 ドル（2022 年、世界銀行）
- 〔経済成長率〕 7.10%（2022 年度（バングラデシュ会計年度）、バングラデシュ統計局）
- 〔バングラデシュの対日貿易〕
対日貿易（輸出：輸出振興庁、輸入：バングラデシュ銀行）
（ア）貿易額（2022～23 年）※単位：百万ドル
輸出：1,901 輸入：2,030
（イ）主要品目（2022 年度）
輸出：縫製品、ニット製品、革・革製品、靴・帽子等
輸入：鉄鋼、船舶、車両、鉱物性燃料、原子炉、ボイラー、機械・電気製品
- 〔通貨〕 タカ
- 〔日本の援助実績（2021 年度）〕
有償資金協力：3,105.64 億円（累計総額 27,063.93（E/N ベース））/
無償資金協力：39.63 億円（累計総額 5,055.63（E/N ベース））/
技術協力実績：41.43 億円（累計総額 999.45（JICA 経費ベース））
- 〔在留邦人〕 1,122 人（2023 年 10 月 1 日現在）
- 〔在日バングラデシュ人数〕 24,940 人（2023 年 6 月、入国管理局）

[外務省ホームページより]

バングラデシュ日程

本来、8月4日～8月14日の予定で渡航する予定でしたが、危険レベルの引き上げ（外務省）に伴い現地への渡航を見送り、8月9日～9月11日の3日間、国内にてバングラデシュや持続可能な世界について学ぶプログラムを実施しました。

日			内容
1	8/9	金	・ JICA バングラデシュ・所長市口の講義 ・ JICA 北陸・所長富田の講義 ・ 映画上映「アリ地獄のような街」 - 製作元現地 NGO エクマットラ・渡辺さんトーク + バングラデシュの子どもたちとオンライン交流
2	8/10	土	・ シャプラニール=市民による海外協力の会 - 講義／ノクシカタ刺繍体験 - バングラデシュカレー作り・手で食べる体験 - 児童労働ワーク体験 ・ 日本在住バングラデシュの方へのインタビュー ・ 東十条（リトルダッカ）＆新太久保フィールドワーク - 東十条に作られた礼拝所見学 - 地元のバングラデシュの方へのインタビュー - バングラデシュ料理実食！
3	8/11	日	・ YOU&ME ファミリーによる活動紹介 ・ JICA バングラデシュ現地スタッフとの交流 ・ フォーラム 2050 代表・戸田隆夫氏講義 ・ 振り返り

バングラデシュ日程詳細

8月9日(金)

ピンチをチャンスに変える

美浜町立美浜東小学校
加藤 瑞穂



JICA 市口所長より、現地とオンラインで繋ぎながら講義を受けることができた。今回渡航中止の原因になったデモについて詳しく聞くことができた。

バングラは人口増加の一方で若者の雇用機会が非常に少なく若者の半数以上がニートである。職を求めて公務員の狭い採用枠に人々は集中していた。しかしクォーター制度の廃止決定を高裁が違憲としたことで、学生らはデモを行った。そんな中「フリーダムファイターに権利を与えないなら、Razaker（独立戦争時の裏切り者）に与えるのか」というハシナ首相の一言で学生運動に火がつき、学生のみならず政府に反感をもつすべての人々が大規模なデモを行った。そうして、ハシナ首相は辞任に追い込まれた。現在の暫定政権のトップはムハマド・ユヌス。政権が変わったことで、国がどのように変わっていくか注目していきたい。

また現在、警察は機能していないが国民の調和により犯罪が少なく抑えられている。バングラは、人は多いが、喧嘩や戦争があっても調和できる温かい国民性が魅力的である。

今の日本で、このようなデモが起きるとは考えにくい。私個人の考えだが、豊かな国なので現状に満足しており、自分以外の事にあまり関心を持たないからではないかと考える。（自分自身がそうである）バングラのデモについては、国が発展途上であるからこそ、人々の「このままではいけない」という熱い思いが感じられたし、それが国を動かすきっかけになったと思う。我々日本人も、もう一度日本を自分事として見つめ、課題を発見し、「変えたい・変わりたい」と思うことが大切なのではないだろうか。

8月9日(金)

「国際社会」から「社会」へ

埼玉県立所沢西高等学校
井土 恵美里



バングラデシュの歴史的、政治的背景について学習した。特に印象に残ったエピソードは、「ラナ・プラザ崩壊事故」についてである。ラナ・プラザ崩壊事故では、バングラデシュの社会的弱者と捉えられる罪のない多くの女性の労働者が犠牲となった。また、その際の支援においても、経済的利益を希求したいバングラデシュや先進諸国と、安全な労働環境を提供すべきと考える日本との間で意見が対立し、支援が入るのに時間がかかった。また、そのような環境で作られる低価格の衣服は日本にも多く輸入されている。

対岸の火事のように「遠い発展途上国で起きている出来事」「支援してあげた方が良い事案」と捉えるのではなく、「一緒に解決すべき社会課題」と捉え直す必要があるのではないかと。

8月9日(金)

いっしょ

松戸市立横須賀小学校

鬼山 彩緒利



この3日間、国内から様々な立場、視点で Bangladesh を学ぶことができた。Bangladesh の社会構造、環境、子どもの権利など、時には目を背きたくなるような現実とも出会った。日本と違う部分にたくさん出会った。でもエクマッタの子ども達を見て、初めて「いっしょ」の部分を感じられた。元ストリートチルドレンという背景を持つ彼らだが、「勉強するのがそんなに楽しくない人？」という質問に対して、こんなにたくさんの子が手を挙げた。しかも楽しそうな笑顔を見せながら。日本の子ども

もと変わらないなとすごく思う。やはり人の心を動かすのは人との出会いだろうと思う。違いを探せばたくさんあるが、これからも「いっしょ」を探し続けていきたい。

事前研修の東京ジャーミー見学の際に伺った「上から目線では見えるものも見えてこない。」という言葉忘れずに、これからも一人の学び手として幸せな未来を考えていきたい。

8月9日(金)

暗闇の中の光

伊勢崎市立赤堀南小学校

田中 利奈



「ストリートチルドレン」「児童労働」「家事使用人」という言葉が印象深い。世界では1億6000万人の子どもたちが児童労働を強いられている。Bangladesh のストリートチルドレン340万人、児童労働170万人。この数字が、SDGs8.7に掲げられた「2025年までに撲滅」という文言とあまりにもかけ離れていて呆然とする。そこに拍車を掛けるように、児童労働の雇い

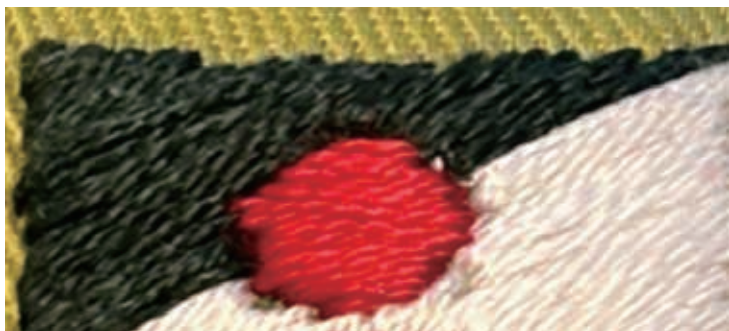
主は善意で子どもたちを雇っているという事実を知り、だから児童労働はなくなり、またその意識を変えることはとても難しいと感じた。そういった中で、ストリートチルドレンを大逆転に導くエクマッタ、「誰も取り残さない」という精神のもと活動するシャプラニールの情熱と愛情が、子どもたちが真っ暗闇の中で見つける光となっている。同様に、日本に目を向けてみても、トー横キッズ、ヤングケアラー、自殺、子どもの貧困など、子どもたちをめぐる問題は山積みだ。日本という大きな光の中にいる子どもたちが暗闇に引き込まれない術を考えていきたい。

8月10日(土)

国旗のように…

駒場東邦中学・高等学校

太田 祥子



バングラデシュとの関わりを50年近く続けるNGO シャプラニールのワークで、児童労働が親族間の扶助の文脈で語られる複雑さを学んだ。一方、日本のヤングケアラーにも話が及び、地域や親戚から孤立する日本の若者の現状も認識させられた。両国の国旗を対比させるかのように、2国を比較してみると、いく

つもの批判的文脈的視点をもとに考えられると思った。

在日バングラデシュの方は、国旗の緑色が好きだと、祖国への誇りと愛情をもって語ってくれた。

8月10日(土)

絆を築く

東洋英和女学院小学部

田中 慧



日本在住のバングラデシュ人のジャヒドさん、モシウッディンさんへのインタビュー。その後一緒に東十条へ向かい、飲食店を経営なさっているホサインさんにモスクを案内して頂いたりお話をうかがったりしました。最も印象的かつ喜ばしかったのは、人と人としての交流を持てたことです。日本で暮らす我々がバングラデシュについて教えてもらうという形の交流ではありましたが、バングラデシュがただの他国の1つではなく友人の祖国という見方に変わりました。他人事から自分事に大きく変わった瞬間でした。

人々が温かくて助け合うことがバングラデシュの良さであると皆さん仰っていました。経済発展が続いていった先のバングラデシュでも同じ状態であるのだろうかと少し疑問に思うところもありますが、やはり国際理解のベースは人々の絆であるのだと実感しました。ほかにもデモについての見解、貧困層への見方など多角的にバングラデシュをとらえられる学びや気づきを得られました。バングラデシュに渡航できなかったからこそとらえられた気づきであると思います。

8月11日(日)

希望をもって共に歩む

白百合学園小学校

高橋 絵理



バングラデシュに行けない中で、現地の方と繋がるチャンスのひとつであった JICA バングラデシュスタッフとの交流。はじめて聞く Bengali English にドキドキしながら、スリル感溢れるオンライン交流となった。交流中にも停電で真っ暗になる画面から、現地のインフラの脆弱性を感じる一場面となった。

最も印象に残ったお話は、自然災害が与える教育への影響であった。バングラデシュでは、気候変動の影響により、サイクロンや豪雨の発生頻度が年々高まっており、家屋や学校に被害をもたらし、結果として子どもたちの学びを止めてしまう。また、感染症や貧困、教師不足など、副次的に多方面で様々な問題が生じるとのこと。気候変動は子どもたちの生きる権利と密接に関わっていることを、生の声を通して再認識させられた。勤務校においても、登下校中に熱波に倒れる子ども、猛暑のため禁止される外遊び、行事の見直しなど、気候変動の影響を少なからず受けている。

日本の教師という立場から、子どもたちの今と未来を守るために私には何ができるのか。エクマットラの渡辺さんが「行動を起こせる人」を願ったように、私も子どもたちや先生方と手を取り合い、気候変動について考え、希望をもって行動できる人でありたい。

8月11日(日)

平和な世界を希求して

群馬県立尾瀬高等学校

清水 紀恵



NPO 法人 Forum2050 代表・戸田隆夫様による講義での1枚。国際協力一筋40年、これまでに115ヶ国を訪問してきた国際協力のエキスパートである戸田様の講義は、平和な世界を希求する熱い想いで溢れていた。

SDGsの実現が絶望に近い今、世界中で10人に1人が飢餓で苦しんでいる今、正確な人数が把握できないほどのストリートチルドレンが存在する今、一体私たちに何ができるのか、そして何を次世代に伝えたいのか？

「先進国」と「発展途上国」、「日本人」と「外国人」などの枠組みを超え、同じ地球に存在する国、同じ地球に生きる人間としてアクションを起こし続けることの重要性を知ることができた。

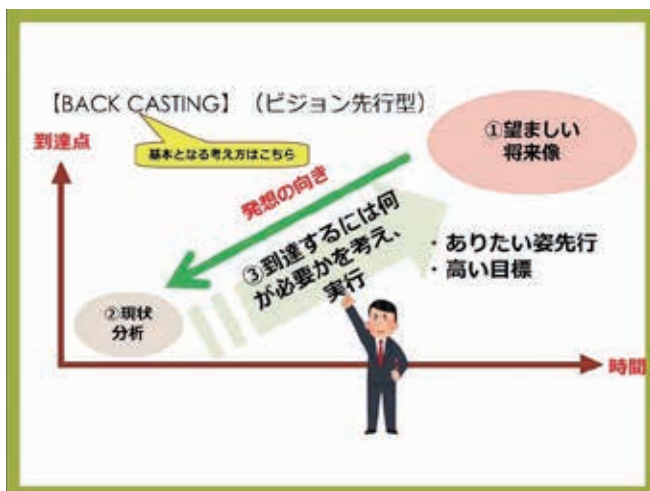
同時に、自分がもの凄く狭い視点で、しかも一方的に物事を捉え、考えていることに気づかされた。「私はどんな世界を創りたいのか？どうすればそれが実現できるのか？私は、今日、そして明日、何をするのか？」を、自問自答し続けたい。

8月11日(日)

夢はでっかく

埼玉県立不動岡高等学校

澤田 将智



JICA 基金による支援。NPO 法人 YOU&ME ファミリー代表理事玉木さんのお話。「教育こそが未来をつくる」をモットーにして現地活動がスタート。玉木さんは現地のスタッフに『『BACK CASTING』でいこう!』望ましい将来像・理想がまず存在している。もちろん理想と現実のギャップはあるだろうが、周りの仲間、生徒はもちろん、学校の卒業生たちも助けてくれる。保護者会も実施しているらしく、日本でも問題である『親の教育』にも力を入れて、理解を求めている。研修中に何度も出てきた仲間意識の強いバン格拉デシュの国民性を重ねて捉えることもでき、

学校を核とした一つのファミリーを感じることができた。

生徒たちに SDGs を考えさせる時、ついつい身近な一人ひとりの行動を考えさせがち。我々もそれでいいと思っている節がある。現任校の探究活動もそうだ。夢がなかったり、目標が低かったりする。その成果物の質も高校生のレベルではない(ように思う)。では、あえて大きな夢を先に持たせてみたらどうなるだろうか。生徒は「そんなの無理」だと思うか? 生徒がジブンゴトと捉ええることができた時、どうなるか? 全部自分だけで成し遂げる必要はないことを伝えたらどうなるか? 周りの友人、大人、さらにはオンラインで繋がる海の向こうの人たちも助けてくれるかもしれない。その橋渡しをするのが、この研修に参加した我々にできることであり、これから求められていく仕事になるだろう。

8月11日(日)

ジブンゴト = 次世代に伝え続けること

市川市立宮田小学校

執行 稜



3日間を通し、たくさんの日本人がバン格拉デシュに関わり、様々な形で支援していることを知った。支援できている子供はごくわずかかもしれない。それでもそれが子供たちの未来への架け橋になっている。

では、今の自分には何ができるのか。一番に考えたことは目の前にいる次世代を生きる子供たちに今回の学びを伝え続けていくこと。今研修はこの一年だけの学びになってはいけない。自分自身が常に当事者として、ジブンゴトとして伝え続けていくことが今自分にできることだと感じた。

自分の変容をしっかりと認識、児童生徒の変容を描く

8/24 (土)

時刻

プログラム

● 10:00

プログラム説明

● 10:15

バングラデシュ・パラグアイ研修報告

学びの共有～バングラデシュ・パラグアイコースで何を見てきたの？～

バングラデシュ（国内代替）コース、パラグアイコースでそれぞれどんなところを訪問し、何を感じてきたのか…。1人1枚写真を選び、研修での学びを共有しました。皆さんわくわくしながらお互いのコースの発表を聞いていました。



● 11:15

休憩

● 11:25

派遣前・派遣後の「モヤワク」の振り返り、自身を見つめる

● 11:45

【講義・演習】研修の学びを教室に届けるにあたり

東京都市大学教授 佐藤 真久先生

研修での学びをどうつなげる…？

海外研修・国内代替研修での学びを、どうやって子ども達の学びにつなげていくのか…。毎年先生達が頭を悩ませながら授業を組み立てていきます。今年は、すでに授業実践をしてその苦労を知っている過年度参加者の先生達から、心強いアドバイスを聞くことができました！



● 12:45

午後の活動説明

● 13:00

テーマ別チームに分かれての活動

- それぞれの研修での体験共有（テーマに基づいて）
- 授業実践案の共有

いよいよ授業案のブラッシュアップ！

実践したいテーマごとチームに分かれ、授業案の相談タイム。校種も教科も異なる先生同士、持っている視点も様々です。1人では気付かなかったことに改めて気付かされたり、悩んでいることの糸口を見つけたりと、授業案のブラッシュアップにつながりました。



● 16:30

全体共有

- 他のチームに共有したいこと（悩み、気づき）

● 17:15

写真撮影、解散

8/25 (日)

時 刻

プログラム

- 9:30 プログラム説明
- 9:45 チームシャッフル活動（代表者授業案を共有）
 - 予想される子ども達の反応は？
 - 子ども達の学びにつながる組立・発問になっているか。
 - good と better を伝える、質問共有

グループシャッフル！

チーム代表者の授業案を、他のチームメンバーと過年度参加者に見てもらいました。活発な意見交換となり、予定していた時間を延長…！色々な視点からアドバイスをもらった代表者。どんな授業案になっていくのでしょうか…。



- 10:30 チーム活動
 - シャッフル活動で他チームからもらった意見、他チームで見てきた事例を共有
 - 代表授業のブラッシュアップ
 - 時間があれば個人授業もブラッシュアップ

最後のチーム活動

もう一度自分のチームにもどり、改めて授業案を揉んでいきます。この2日間、授業作りにじっくりと頭を悩ませた先生達が、どんな授業実践をしていくのか、楽しみです！



- 13:30 全体共有
 - 各グループ報告
 - アドバイザーより
東京都市大学教授 佐藤 真久先生
教育環境デザイン研究所 畑 文子先生
- 14:30 休憩
- 14:45 一人一言振り返り
- 15:45 あいさつ、諸連絡
- 16:30 解散

《おまけ～過年度参加者特別企画～》

過年度参加者との派遣後研修初コラボ！

今回は、教師海外研修に参加したことのある先生が20名程この派遣後研修に参加してくれました。研修参加後も、こうしてパワフルに活動をしている先生がいることが、今年参加した先生にとっても、大きな刺激となりました！

過年度参加者の学び合い

ザンビア、パラグアイ、ベトナム…と、年度も混ざった過年度参加者の皆さん。実はそれぞれのコースで何を見てきたのかは知らない部分も多く、改めて自身が参加した国や文化を紹介し合い、今後の過年度参加者ネットワークについても話し合っていました。これからどう広がっていくのか、楽しみです…！



7

授業実践

テーマごと、3～4名ずつのチームに分けられました。校種が違うからこそその視点、パラグアイコース・バングラデシュコースの経験からの視点でアドバイスをし合いながら授業を作っていました！

【多文化共生①】 P.24 ～

蓮尾 志津加（パラグアイ・東京・小）
井土 恵美里（バングラデシュ・埼玉・高）
吉田 彩子（パラグアイ・東京・小）



【多文化共生②】 P.41 ～

渡邊 千尋（パラグアイ・東京・高）
加藤 瑞穂（バングラデシュ・福井・小）
城島 愛（パラグアイ・千葉・小）
早川 千恵子（パラグアイ・長野・小）



【ジブンゴト】 P.71 ～

岩田 徳子（パラグアイ・富山・高）
執行 稜（バングラデシュ・千葉・小）
田中 慧（バングラデシュ・東京・小）



【つながり&共生】 P.92 ～

鬼山 彩緒利（バングラデシュ・千葉・小）
田中 利奈（バングラデシュ・群馬・小）
中村 陽美（パラグアイ・埼玉・特支（高校））
根岸 彩夏（パラグアイ・群馬・高）



【答えのない問い】 P.124 ～

夏堀 隼也（パラグアイ・千葉・小）
河上 智子（パラグアイ・埼玉・小）
渡邊 恋子（パラグアイ・新潟・小）



【経済成長の光と影】 P.142 ～

清水 紀恵（バングラデシュ・群馬・高）
太田 祥子（バングラデシュ・東京・中高）
澤田 将智（バングラデシュ・埼玉・高）
高橋 絵理（バングラデシュ・東京・小）



【多文化共生 1】

いろいろな国のことを知ろう

【実践者】

氏 名	蓮尾 志津加	学校名	東京都大田区立矢口東小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	2 年 1 組（25 名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024 年 9 月 ～ 11 月（10 時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

生活・道徳

02 単元名と単元目標

単元名：いろいろな国のことを知ろう

単元目標：学級にいる外国にルーツを持つ子どもたちの理解を深め、諸外国への興味や親しみを持つことができる。

関連する学習指導要領上の目標：

生活科：具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- 1 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- 2 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- 3 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

道徳：内容項目 C 国際理解、国際親善

他国の人々や文化に興味をもち親しもうとする実践意欲を育てる。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	活動や体験の課程において、自分自身、身近な人びと、社会及び自然の特徴や良さ、それらの関わり等に貴付いているとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けている。
② 思考・判断・表現	身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現している。
③ 主体的に学習に取り組む態度	身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学ぼうとしたり、生活を豊かにしたりしようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈児童/生徒観〉

1年生から持ち上がりの児童である。学級にはネパールと中国にそれぞれルーツをもつ児童がいる。1年生のときは、「外国人」だからと、距離を置いているような様子が見られていた。日々の学級経営や道徳の学習でそのような意識は、薄れている。今年度は、自分の外国にルーツのある子どもたちだけでなく、諸外国にも興味をもって共生していく態度を養いたいと考え、この単元を設定した。

〈指導観〉

他国発祥のものが、日本の生活にあたりまえに溶け込んでいる場合が多く、身の回りの事物が自国の文化のものなのかを明確に区別することは難しい。自分が日本のものだと思っていたものが、他国から来たものであることを知ったり、日本では触れることのできない他国の文化を知ったりすることは、2年生の児童にとっては新しい発見である。そういった新しい知識や物との出会いをきっかけに、さらに他国を知り、親しもうとする気持ちをもてるようにしていきたい。

他国のイメージは「楽しそう」といったプラスのものだけではなく、「戦争・こわい」といったマイナスのイメージをもつ児童も少なくない。また、学区内には、様々な外国人が住んでいる。いろいろな国と壁をつくるのではなく、外国や外国人、文化を認め、共生していく態度を育てていきたい。

05 単元計画（全 10 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	日本ってどんな国？ 外国のイメージは？	日本と外国のイメージを共有し、これからの学習の見通しをもつ。	日本と外国のイメージを話そう ・日本と外国について自分の考えをワークシートに記入し、全体でシェアする。 ・知っている国の名前とその国の知っていることや有名なものを話す。 ・世界地図で場所を確認する。
	資料・教材など ワークシート・世界地図		
2	パラグアイについて知ろう	パラグアイを多角的に知る	写真を見て、気づいたことを伝え合おう。 もっと知りたいことを考えよう。 ○パラグアイについて知る。 ・4人班でフォトランゲージを行い、思ったことをグループで伝え合う。 ①ラパーチャ ②イグアス日本語学校の様子 ③村の学校 ④スーパーの様子 ⑤街の様子 ○国名を当て、パラグアイという国名を知る。 ・児童の声から選択肢をつくり、考えるようにする。その際、理由も言う。

			○パラグアイについて、知ったことや問いをワークシートに書く。 ・パラグアイについて初めて知ったよ。 ・有名な食べ物は？ ・人気の遊びは？ ・人気のスポーツは？ ・お金持ちの国なのかな？
	資料・教材など 写真・ワークシート		
3 本時	パラグアイについてもっと知ろう	児童の問いからパラグアイを多角的に知る	パラグアイのことを知ろう ○パラグアイの紹介動画を見て理解を深める。 ○前時の問いをもとに、グループで3択クイズをする。写真等の資料を見せて、考えやすいようにする。 Q.人気のスポーツは？ バスケットボール・サッカー・なわとび Q 日本の動画を見ることが好き。日本のアニメで知られているものは？ ポケモン ドラえもん ドラゴンボール Q.お金持ちの国なのかな？ 5 0 0 0Gs.はいくら？ 1 0 0 円、1 0 0 0 円、5 0 0 0 円 5 0 0 0Gs.で買えるものについて考える。 Q.ニャンドゥティーの意味はなに？ 花・かざり・蜘蛛の巣 Q.1番よく食べられている食べ物は、チパ。その材料は？ とうもろこし・いも・こめ ○マテ茶・テレレの紹介（匂い・触った感じ） 次時への見通しを持つ。 ○パラグアイについて、知ったことや問いをワークシートに書く。
	資料・教材など パラグアイ紹介動画・写真・ニャンドゥティー・マテ茶		
4 5	チパを作って食べよう！ マテ茶を飲んでみよう！	実際にその国の食を体験することで、文化を知る。	チパ作りをしよう ○チパを作り、試食する。 マテ茶を飲む。
	資料・教材など チパミックス 卵 水 粉チーズ アニス マテ茶		
6	中国について知ろう	中国を多角的に知る	どこの国が考え、その国のことを知ろう ・4人班でフォトリレーを行い、意見を出し合い、国名を当てる。 ・国旗や位置、挨拶を知る。 ・質問してみたいことを考える。
	資料・教材など 写真（人・街・言葉・食べ物） 世界地図 質問用紙		

7	中国とつながろう	中国の方をゲストティーチャーとして招き、交流し、理解を深める。	中国とつながろう ・ゲストティーチャーによる簡単な挨拶やゲーム・手遊び紹介 ・質疑応答をして、理解を深める。 ・学区内にも多くの中国の人が住んでいることに気づかせる。
	資料・教材など 質問用紙		
8	ネパールについて知ろう	ネパールを多角的に知る	どこの国か考え、その国のことを知ろう ・4人班でフォトランゲージを行い、意見を出し合い、国名を当てる。 ・国旗や位置、挨拶を知る。 ・質問してみたいことを考える。
	資料・教材など 写真（人・街・言葉・食べ物） 世界地図 質問用紙		
9	ネパールとつながろう	ネパールの方をゲストティーチャーとして招き、交流し、理解を深める。	中国とつながろう ・ゲストティーチャーによる簡単な挨拶やゲーム・手遊び紹介 ・質疑応答をして、理解を深める。 ・学区内にも多くのネパールの人が住んでいることに気づかせる。
	資料・教材など 質問用紙		
10	外国のイメージは？	日本と外国のイメージを共有し、これからどのように生活していくか考える。	・外国について自分の考えをワークシートに記入し、全体でシェアする。 ・第一時との考えの変化や広がり気づく。 ・外国について自分の考えをワークシートに記入し、全体でシェアする。
	資料・教材など ワークシート		

06 本時の展開（3時間目）

本時のねらい：パラグアイの文化に興味をもち、異文化に親しむことができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入（5分）	パラグアイのことを知ろう ○前時の学習を思い出し、パラグアイの位置、国旗などを理解する。	・学習の見通しをもてるようにする。 ・重要な部分だけに絞って視聴させる。 ・児童の疑問からクイズを出題する。 ・補足説明をする。
展開（30分）	○パラグアイの紹介動画を見て理解を深める。 ○グループで3択クイズをする。写真等の資料を見せて、考えやすいようにする。 Q.人気のスポーツは？ バスケットボール・ サッカー ・なわとび	

08 評価規準に基づく本時の評価方法

パラグアイの文化に興味をもち、異文化に親しむことができたか。（発言・ワークシート）

09 学校外との連携（※該当のある場合）

- ・保護者（中国 ネパール）

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

【あなたにとって、外国のイメージは？】1時間目

- ・戦争、こわい（80％）
- ・楽しい（15％）
- ・家が大きい、ことばが違う、遠い、難しい（5％）

【あなたにとって、外国のイメージは？】10時間目

- ・とってもいいところ、平和、やさしい、きれい、ちょっと行きたい（94％）
- ・戦争、こわい（6％）

※戦争はあるけど、楽しそうだとも思う。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

諸外国の面白さ。戦争だけでは「ない」ということ。

イメージだけで、その国のことを知った気持ちにならないでほしい。自分の五感を使って、その国について知る機会を設けたい。また、今後出会う外国の方との壁を少しでも低く、薄くしてほしいという願いを込めた。

12 苦労した点

低学年における国際理解教育をどうするか悩んだ。東京都大田区は国際色豊かなところなので、その特色を生かしたいと思った。自校には外国に所縁のある児童がいるため、日本の児童とイメージだけで関わるのではなく、その国の背景も知って、相互理解の場にしたいと考えた。

該当児童の自国への関心がどのくらいあるか。また、どのように捉えているかを確認しながら授業をすすめていく必要があった。若い年齢だからこそ傷つくことがあるので、配慮が必要になった。

13 改善点

- ・クイズ形式としたため、一方的な授業になる場面があった。
→子どもたちがみんなでクイズを作って出題し合うという形式もとれたのでは。
- ・パラグアイの様子動画が少し難しい内容だった。
→パラグアイの方を呼んで話を聞けるとよかった。

14 成果が出た点

- ・子どもたちの問い（興味関心）からクイズを作れたこと。
- ・他国を知ること、自国の理解につながった。
- ・動画→クイズ→本物のマテ茶という構成がよかった。

- ・「実物」の力
- ・国際理解教育の入り口としては、とても良い授業。
- ・保護者をゲストティーチャーとして招聘したことで、学級経営にもプラスになった。

15 自由記述

この授業を通して、子どもたちの外国への意識やイメージがプラス変わったことが何よりも嬉しい。イメージだけで、物事を捉えずに、自分の五感で体験してこそ本当の「学び」になるはず。パラグアイを入り口に、中国やネパールの保護者にも授業に参加してもらえたことで、その国のことや該当児童の背景理解につなげ、学級経営にも生かしたことは貴重な経験になった。

本研修を通して、様々な地域・異校種の先生とつながり「国際理解教育」について深く学ぶ機会をいただけたことに感謝したい。今後も目の前の子どもたちと対話しながら、授業やクラスをつくっていきけるよう自己研鑽していきたい。

【多文化共生 1】

日本語教育

【実践者】

氏 名	井土 恵美里	学校名	埼玉県立所沢西高等学校
担当教科等	国語	対象学年（人数）	3 年（選択 3 0 名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024 年 9 月 ～ 10 月（8 時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

日本語の表現（国語）

02 単元名と単元目標

単元名：日本語教育の観点から見る多文化共生

単元目標：多文化共生に配慮した日本語教育について理解する

関連する学習指導要領上の目標：学校設置科目のため特になし

03 単元の評価規準

① 知識・技能	日本語教育の概要について理解する
② 思考・判断・表現	・在日外国人と関わる上で意識しなければならないことは何か考え、配慮した行動ができる。 ・（在日外国人に関わらず）文化や価値観の異なる他者と関わる上で重要なことは何か考えられる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	グループワークに積極的に参加する。ワークシートの記入度合。

04 単元設定の理由・単元の意義

国際化に伴い、多様化する社会において、他者と共生するとはどういうことなのかを見つめ直して欲しいと感じたため、単元を設定した。

〈児童/生徒観〉

3 学年の自由選択科目なので、国語に対する意欲は高い生徒が多い。日本語教育への関心もあるようだが、日本語教育がどのようなものなのかの理解は乏しい。

また、生徒の人間関係の築き方を見ていると、他者への関心は決して低くないが、相手の個性を受け入れることが難しいように見える。「多様性」や「協調性」をただ自己に都合の良いものとして捉えてしま

うこともあり、他者との共生のための「多様性」や「協調性」として捉えることに困難を感じているようである。

〈指導観〉

ここでポイントにしたいのは「異文化理解」であって、「日本語教員」の養成ではない。「異文化理解」のために「日本語学習者の視点に立つこと」が必要なので目的がぶれないようにする。

05 単元計画（全8時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	途上国を知る	国際理解 →発展途上国の労働状況と、先進国である日本との関係性（ラナ・プラザ崩壊事故など）	・ バングラデシュの紹介 ・ 日本の高校生とバングラデシュの生徒の500円の価値の比較
	資料・教材など	プリント、アンケート、PPT	
2 3	日本語教育への理解	多文化共生 →日本に住む在留外国人とのコミュニケーションについて	・ 日本語教育（直接指導法）の概要理解、指導案作成 →・ 6、7時間目に主に3人1組でロールプレイングを実施。それぞれの場面設定は以下の通り。 ①地震発生 ②授業準備 ③体調不良 ④遊ぶ約束 ⑤食事場面 ⑥ゴミの分別 ⑦その他 →・ 与えられた場面設定に基づいて「話す」「聞く」の指導案を作成する。1人は日本語教師、1人は学習者、1人は共生者の設定。学習者はバングラデシュから来日した日本語初級者。ただし、設定に関しては生徒の意見を取り入れて各班柔軟に変更可。 ・ 指導案作成後、ジグソー法により指導案を深めていく。そのため、各班「自分と異なる文化的背景や価値観を持つ人と関わる時にどのようなことを考えますか」という軸で自分たちの指導案について別の班に説明できるようにしておく。
	資料・教材など プリント 教科書（みんなの日本語） 埼玉県の前在日外国人数の統計 https://www.pref.saitama.lg.jp/a0306/keikakutoukei/r5-6toukei.html やさしい日本語について https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/92484001.html		
4 5	日本語教育の実践	①日本語学習者（異なる他者）の立場を慮る	・ 前時で作成した指導案を基に、場面や、立場をシャッフルしジグソー法で意見交換。感じた

		②「やさしい日本語」について理解する	こと、考えたことの共有。また、何を意識して指導案を作成したのか意見交換し、元の班で改めて指導案を作成する。 ・「やさしい日本語」の説明・理解をする。 ・「やさしい日本語」の内容を踏まえた上で、再度指導案を作成する。 ・必要に応じて、再度ジグソー法で意見を深める。
	資料・教材など	プリント、PPT	
6 7 本時	多文化共生 →在留外国人に関わらず、身近な他者との関わり方について学ぶ	これから自分と異なる文化的背景や価値観を持つ他者とどのように関わるのか考える	・主に3人1組でロールプレイングを実施。それぞれの場面設定は以下の通り。 ①地震発生 ②授業準備 ③体調不良 ④遊ぶ約束 ⑤食事場面 ⑥ゴミの分別 ⑦その他 ・何に気を付けたのか、どのようなことに苦労したのか、共有する
	資料・教材など	プリント、その他生徒各自で作成	
8	多文化共生 →在留外国人に関わらず、身近な他者との関わり方について、自らの考えを深める	在日外国人だけでなく、文化や価値観の異なる他者と関わる上で意識しなければならないことは何かを考える。	・プリントを通じて各自振り返り。 ・ペアワーク、グループワークを通じて考えを深める。
	資料・教材など	プリント	

06 本時の展開（6・7 時間目）

本時のねらい：多文化共生→在留外国人に関わらず、身近な他者との関わり方について学ぶ

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 10分 10分	前時の復習、本時の目的の紹介。評価の観点も提示する。 各班、発表の最終調整。	生徒の進捗状況を確認し、臨機応変に時間を動かす
展開 30分	【発表時間】10班×5分 →生徒役と教師役に分かれて発表を実施する。 スライド資料や、イラスト資料の使用は自由 【振り返り】10班×2分 →《発表した生徒》発表をする上でのこだわりポイントを伝える。 《発表していない生徒》プリントを用意。1班が終わるごとに時間を設け、振り返りを実施。1つ前に発表した班が、全体を代表して、振り返りを発表 or 質問する。	発表→残っている班は6限に実施。5～6班は6限の予定。

30 分	5 限で終わらなかった班の発表と振り返り	プリントを用意。
まとめ 15 分	全体を通しての振り返り。 この時間で「異文化理解」に繋がたい（「多文化共生」は次時）。 自分の班の苦労したポイント・こだわりポイントと、他の班のこだわりポイントを比較した上で、文化の違う他者と関わるとはどういうことか、何に配慮すべきなのかを考える。 個人作業は10分ほど。 その後は、席を変えながらのペアワーク。	
5 分	まとめ。次時の確認。	

使用する資料・教材：

- ・プリント
- ・その他生徒各自で作成

07 板書計画

PPT を使用

08 評価規準に基づく本時の評価方法

発表評価シート、自己評価シート、総括プリントをそれぞれ点数化する。

09 学校外との連携（※該当のある場合）

特になし

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

アンケートにおいて、2 学期までの学習内容の中で自身の成長に繋がったと考えられる分野を聞いたところ30人中18人が「日本語教育」と回答しており、割合は1番多かった。実際に、アルバイト先で活用できたとする意見や、日本国内での外国人とのコミュニケーション言語として、英語だけでなく、日本語を活用するために「やさしい日本語」を研究する必要があるという意見があった。多様な文化についても否定から入るのではなく、受け入れる姿勢を持つこと、また、日本の文化を発信することも大切なのではないかという意見があがった。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

単純に「遠い外国での多様性・多文化共生」ではなく、「日本国内での多様性・多文化共生」を伝えるためにこの研修に参加した。実際、日本で生活するバングラデシュ人の方々にお会いし、交流できたことで、私自身も「日本国内での多様性・多文化共生」を実感することができた。生徒にも「日本国内で感じられる外国の暮らし・価値観」を伝えたいと思っていたことはもちろんのこと、日本国内で生まれ育った人同士の間にも、異なる価値観があることを伝えたいと思い、授業を組み立てた。

12 苦労した点

- ・聞き馴染みのない「バングラデシュ」という国に対して、生徒が身近に感じるにはどうすれば良いか創意工夫した点。
- ・「日本語教育」に対しての興味関心を持たせる点。

13 改善点

- ・10 班全ての発表を行ったので、少し間延びしてしまう感覚があった。
- ・発表の評価シートを紙媒体で行ったため、集計が非常に大変だった。
→Google フォームでの回答にすべきだった。
- ・総括プリントや、学期末のアンケートからは、学びが深まり、生徒の成長に繋がったことがよくわかった。そのような意見や学びを共有、深める時間をもっと多く取れば、さらに学びが深まったかもしれない。

14 成果が出た点

- ・普段当たり前のように使っている日本語について、新しい角度から捉えることができたという意見があった。
- ・他者との関わり方について、改めて見つめ直すことができたという意見を出した生徒が多かった。また、他者との関わり方は、海外の人と交流する際にのみ必要なことではなく、日本人同士の交流でも必要だと感じたという意見も多く、当初の目標は達成できたといえる。

15 自由記述

実際に授業をするまでは、2 点不安があった。1 点目は、「日本語教育」という生徒にあまり関わりのない分野の学習について、生徒自身が興味を持てるのかということである。2 点目は、「外国人と関わる上で大切なこと」で終わることなく、「日本人同士で関わる上でも大切なこと」という気づきに持っていけるのかということである。しかし、授業後のプリントやアンケートからは、「日本語教育」への興味がわいたことや、対人関係で注意しなければならないことなどについて、授業を踏まえた上で、生徒なりに考えられていたようで、安心した。今後も、「生徒の興味関心のある分野」と「生徒が社会で生きる上で必要なスキルの分野」のすり合わせを丁寧に行い、学習前に興味があるかないに関わらず、よりよい学びができるように授業を工夫したい。

【多文化共生 1】

自分とつながりのある国をしょうかいしよう

【実践者】

氏 名	吉田 彩子	学校名	東京都板橋区立板橋第八小学校
担当教科等	日本語指導	対象学年（人数）	日本語学級（3名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024 年 10 月 ～ 12 月（10 時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

日本語指導

02 単元名と単元目標

単元名：自分とつながりのある国をしょうかいしよう

単元目標：自分とつながりのある国の良いところを見つけ、すすんで紹介しようとする

03 単元の評価規準

① 知識・技能	調べて分かったことを分かりやすい表現で書いたり話したりできる。
② 思考・判断・表現	自分とつながりのある国の良いところや日本との違いを考えている。
③ 主体的に学習に取り組む態度	自分とつながりのある国の良いところを見つけようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈児童/生徒観〉

対象児童は日本語学級に通級する3年生の児童3名で、つながりのある国はネパール、バングラデシュ、台湾である。来歴や日本語の習得レベルはそれぞれ異なり、うち1名は家庭内言語も幼年期から日本語である。今は、自分とつながりのある国への思いは前向きであり、家庭内でも衣食住の固有の文化に触れる機会はあるが、学年が進んで日本での生活が長くなるにつれて、家族との関係が複雑になったりする可能性がある。そのため、この単元を通して、改めて自分とつながりのある国の良さについて考え、自分の家族やその文化を大切にしたい思いを育んでいきたい

〈指導観〉

発表するテーマを選んだり調べたりする意欲を高めるために、日本語学級での学習発表会での発表活動をゴールとして設定した。また、家族でそれぞれの国のことを話題にしてもらい、児童の日本での異文化適応の様相にも関心を持ってもらうことがねらいの一つであるため、本やインターネットから情報収

集をするのではなく、家庭から聞いてくるのを始めの活動としている。そして、知らなかったことを新しく調べるのではなく、できるだけ、自分が好きだったことや日本にもあったらいいなと思うことを友達に紹介するという設定にして、家族の協力を得やすくしている。具体的には日常の食べ物や衣服、伝統的な行事、学校のことなどを想定している。ただし、日本生まれの児童などや幼年期に来日した児童は、あまり両親の文化的背景を知らないこともあるので、児童の様子に配慮しながら、進めていく。

05 単元計画（全 10 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 本時 2	自分とつながりのある国の良いところを考えよう	パラグアイの日系移住地について知り、自分とつながりのある国の良いところを考える。	・日系移住地の生活について知る。 ・自分とつながりのある国のよいところを考える。
	資料・教材など	ワークシート、世界地図、写真資料	
3 ～ 8	調べたことをまとめよう	調べた情報を整理し、資料に分かりやすくまとめる。	・選んだテーマについて、情報を集める。 ・発表する情報を精選し、写真などを用いて資料にまとめる。 ・発表の練習をする。
	資料・教材など	本、インターネット、ワークシート	
9 10	調べたことを友達に伝えよう	資料を見せながら分かりやすく伝える。	・分かりやすい話し方に気を付けて発表をする。 ・友達の発表を聞き、他の国の文化について知る。 ・友達の発表の良いところを見つける。
	資料・教材など	作成した資料（画用紙、模造紙、パワーポイント等）、実物	

06 本時の展開（1 時間目）

本時のねらい：パラグアイの日系移住地の生活について知り、自分とつながりのある国の良いところについて考えることができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5 分)	1 挨拶 2 めあての確認 自分とつながりのある国の良いところを考えよう	○単元の目標や今後の見通しを確認する
展開 (25 分)	3 パラグアイの日本語学校について知る。 ・何をしているのか写真から気付いたことを伝え合う。 ・場所や、映っているのはどこの国の人か考える。 4 パラグアイについて紹介する。 ・日本とは異なる文化の国であることや日系人について知る。	○教室や児童の様子、児童がしていることに視点をしばって考えさせる。 ○自分や家族が日本に移住してきたこととの共通点に気付かせる。

まとめ (15分)	5 移住地の生活、行事等の取り組みを紹介する。 ・学校の様子や行事のこと、食事のことなどを知る。 ・なぜ日本語を学習したり日本式の生活をしたりしているのかを考える。 6 自分たちの日本での暮らしについて振り返る。 ・今の生活の中で、ネパールやバングラデシュ、台湾のどんな文化や習慣を取り入れているか考える。 ・ネパールやバングラデシュ、台湾の食文化や行事について、知っていることを伝え合う。 ・食事、行事、言葉、学校の様子、衣服など、項目を整理する。 7 今後の見通しを確認する。 ・日本でもやりたいと思うこと、学級の友達に知ってほしいと思うことを考えてワークシートに書く。 ・家の人に聞いて来ることを宿題にする。	○現地の言語や文化を学習する場ではなく、自分とつながりのある国のことを学習する場であることを、自身の立場に置き換えて気付かせる。 ○気付いたこと、これから調べたいことをワークシートに記入する。
----------------------	--	--

使用する資料・教材：

- ・世界地図
- ・イグアス移住地やパラグアイの文化に関する写真
- ・ワークシート

07 板書計画

つながりのある国についてしょうかいしよう

つながりのある国

- ・お父さん、お母さんの国
- ・住んでいた国

→ネパール、バングラデシュ、台湾

世界地図

日本地図

<気が付いたこと>

- ・〇〇が違う
- ・〇〇がある
- ・〇〇を学習している

<なぜ日本文化を大切にしているのか>

- ・〇〇から
- ・〇〇が好き

↓

自分とつながりのある国のいいところは？

08 評価規準に基づく本時の評価方法

日系移住地について紹介したことをもとに、自分のつながりのある国の良いところを考えようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】（発言、ワークシート）

09 学校外との連携（※該当のある場合）

- ・発表のテーマ設定や調べ学習の情報設定において、保護者から協力を得た。

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

- ・どの児童も最終的に、食べ物をテーマに選び、発表を行った。単元を通して意欲は高かったが、調べ学習を行っていく中で、児童によってはあまり自分とつながりのある国について知らない実態も見られた。保護者からの協力が得られた児童もいたが、あまり連携が上手くいかなかった家庭の児童とは、インターネットを活用して、その国の衣食住に関する文化と一緒に調べ、その中で知っているものや興味を持ったものを深く調べ直して発表につなげていく形で進めた。
- ・調べ学習をする中で、友達が調べている食べ物や地理的な位置、街の様子などにも関心をもち、お互いの国の類似点などを嬉しそうに話している様子があった。一方で、普段、子供同士では気付かない、宗教的な文化の違いが話題になったことがあり、指導者側が事前に想定して十分に配慮しておくことが必要だったと感じた。
- ・発表会では、保護者や在籍学級の担任、児童も参観に来ている中で、自信をもって発表していた。自分と同じ国とつながりのある、他の児童がどんなテーマを選んで発表するのかも、ずっと楽しみにしていて、興味をもって聞くことができていた。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

- ・日系移住地で日本語や日本文化を大切に生活していることや、一方で、世代によって日本や日系人というルーツについての思いが変わって来ていることが分かった。同じことが、日本にいる外国とつながりのある児童にも起こると思うので、自分の住んでいた国や家族の国の文化を大切にする事の良さを伝えたいと思った。

12 苦労した点

- ・日系移住地の人達の立場を、日本にいる自分たちの立場に置き換えて考えさせることが難しかった。今回は地図を表示して図で表したが、理解できた児童と今一つの様子の児童がいた。

13 改善点

- ・日系移住地の人達の生活について、学校での言語の学びと生活様式の両方を紹介したが、どちらかに絞る方が分かりやすい。今回の単元計画や目標であれば、日本語学校を扱うよりも、店や行事、レストランなどに絞り、それらがある理由と、近隣の池袋などにも多国籍の店などが多いことを関連付ける活動ができたと思う

14 成果が出た点

- ・日系移住地で日本の生活様式や文化を取り入れて生活している理由を始めに考えさせていたことで、児童がテーマ設定する時に、「好きなこと」や「日本にもあったらいいなと思うこと」を意識しながらテーマを絞らせることができた。
- ・自分とつながりのある国について、新しいことを知ったり、周りの人に説明したりできる良い機会となり、関心をもって取り組む児童が多かった。

15 自由記述

・日本語学級としての意味

本単元は日本語学級の教員4名それぞれが、自分が担当する児童に対して行った。本時のパラグアイについての授業を実施したのは私のみだが、海外研修で学んだ日系移住地の様子や日系人の方々の思いを同僚教員と共有し、本時の授業実践を公開することで、他の教員も本単元の目標をよく理解し、本学級で学ぶ児童たちの思いに寄り添いながら単元を進めていくことができた。また、本学級の児童が自分とつながりのある国について主体的に話す機会は普段ないので、今回の、周りの人に「紹介する」「教える」という経験は、楽しく、また嬉しいものであり、それぞれの文化を肯定的に捉える機会になっていたように思う。

・来年度以降の実践について

今年度の実践では、パラグアイについて知ることでなく、日系人の思いから、自分たちのルーツと向き合うことを意図していたが、本学級の児童の実態から考えると少し回りくどかったことが反省として残る。来年度以降の実践では、パラグアイを一例としつつ、扱う情報をより精選して分かりやすくしていきたい。また、本単元の実践とは別に、普通学級の6年生の学級でも異なる内容で授業実践を行った。今後も継続し、研修の成果を校内でより広げていきたい。

【多文化共生2】

言語・方言の旅へ

「言語・方言を題材に世界・自身の暮らす地域を多角的にとらえる」

【実践者】

氏名	渡邊 千尋	学校名	東京都立新島高等学校
担当教科等	外国語（英語）	対象学年（人数）	2年1組（10名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年10月4日（2時間）、3月（2時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

外国語・英語コミュニケーションⅡ

02 単元名と単元目標

単元名：言語・方言の旅へ 「言語・方言を題材に世界・自身の暮らす地域を多角的にとらえる」

単元目標：

（前半2時間）言語の持つ影響力を自覚し、言語活動を通して世界を多角的にとらえる。諸外国を知ることから、自身が使う・学ぶ言語に着目し、言語について対話を通して考える。

（後半2時間）前半の日本を俯瞰的にとらえ、諸言語について考えた視点をもとに、新島・式根島の方言について多様な視点で考え、方言の意義について考えるとともに、新島の魅力を再発見する。

関連する学習指導要領上の目標：

*外国語によるコミュニケーションにおける「見方・考え方」を働かせ、5つの言語領域における言語活動及びそれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考え方などを的確に理解したり、適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を養う。

*外国語によるコミュニケーションにおける「見方・考え方」は、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること」をいう。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	与えられた英文を理解し、正しく情報を読み取ることができる。
② 思考・判断・表現	与えられた英文に対し、自身の意見を整理し、伝えることができる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	言語が持つ影響力について理解を深めるとともに、言語学習者として言葉を通して他者や社会に関わろうとしている。 方言の価値について理解を深めるとともに、対話を通して他者や社会に関わろうとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

JICA 教師海外研修に参加し、他の参加者との対話と通し、改めて「教師の役割」について考える機会が多々あった。その中で、英語教員として自身の今までの経験や、本研修での学びを内在化させ授業実践を行いたいと思った。今回、パラグアイに渡航し、英語が全く通じず、相手の言っていることがわからず、自身の意図を直接伝えられないという状況があり、改めて言語の存在意義や重要性について考えることとなった。

また、パラグアイではスペイン語と先住民の言語であるグアラニー語が公用語になっている。パラグアイ人のアイデンティティを構成する文化の多くがグアラニー語起源であり、言語とアイデンティティの関係について考えた。さらに、イグアスで多くの日系の方々と言語とアイデンティティの継承についての話をうかがった。

言語についてジブンゴトとして考えるために、生徒が学んでいる英語について考えるだけでなく、諸言語について多角的に考える視点をもとに地元新島・式根島の方言についても考え、普段とは異なる視点で新島・式根島の魅力を再発見してほしいと思い今回の単元を設定した。

〈児童/生徒観〉

2 学年：生徒 10 名中、新島出身が 6 名、式根島出身が 2 名、他 2 名が島外留学生である。生徒同士は大変仲が良く、対話等も活発に行える。英語の能力については個人差が大きい。そのため、お互いが教えあえるようなグループ、ペアワークの設定が必要である。

〈指導観〉

本研修を通して物事を多角的な視点で考えることの重要性とその考えを相手に言語化して伝えることの意義を学んだ。特に、「島」という環境で生活している生徒たちであるため、自分の当たり前が当たり前でないという認識を常に持ち他者と関わってほしいと思いこの題材を扱った。

また、活動中心の授業にし、対人での発表や学び合いができる活動を多く取り入れ、集団活動から得られる学習効果を最大化することをねらいとしている。

05 単元計画（全 4 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 本時	世界の言語事情	言語活動を通して、日本を俯瞰して見る ことにより、自分の当たり前は世界の当 たり前ではないことを再認識する。	・ 言語クイズ ・ ジグソー法
	資料・教材など	パワーポイント、プリント	
2 本時	言語を学ぶというこ と	言語を使い広がる可能性について考え る。	・ グループディスカッション ・ 振り返り
	資料・教材など	パワーポイント、プリント	
3	方言の継承について	言語についてジブンゴトとして考える。 方言を残すことの意味について考える。	・ ゲストスピーカー ・ グループディスカッション
	資料・教材など	パワーポイント、プリント	
4 本時	方言についてのアウ トプット活動	自身の考えを行動に移す。 発信したことによる反応を体感する。	・ グループ活動

		・新島・式根島の方言を知ってもらえるものを日本語・英語で作成する（デジタルパンフレット、SNSでの発信、フライヤー、QRコード等）
	資料・教材など	パワーポイント

06 本時の展開（1～2 時間目）

本時のねらい：

1 時間目：言語活動を通して、日本を俯瞰してみるにより、自分の当たり前は世界の当たり前ではないことを再認識する。

2 時間目：言語を使い、広がる可能性について考える。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (15 分)	○本日のねらいの共有 ○言語クイズ ①本時に必要な語彙のインプットと定義の確認（母語、公用語、共通語など） ②世界にはどれくらいの言語があるか、諸言語の使用割合など	生徒への指示、質問等は基本的に英語で行うが、生徒の理解に応じて日本語も使用する。
展開 (40 分)	ジグソー法（3 グループ） 説明 5 分、個人活動 5 分、エキスパート活動 7 + 3 分、グループ内の情報共有 $3 \times 3 = 9$ 分、意思決定 5 分、全体共有 5 分 「自身が韓国人という設定で、後輩に留学を勧めるなら、日本・パラグアイ・マレーシアの中からどの国を勧めますか？一つ選択してください。」 まずは個人で考える。その後、各国のエキスパート活動をし、3 カ国の情報をグループ内で共有する。	エキスパート活動では教員 + JET 2 名で各グループを担当し、語彙等の支援を行う。 生徒間の複雑なコミュニケーション活動は日本語で行う。
2 時間目 展開① (40 分)	3 カ国の実情を通して言語について多角的に考える。 (各国のシートに書かれている情報を参照) ・様々な視点から考える（15 分） ・パラグアイについて（5 分） なぜパラグアイではスペイン語とグアラニー語が公用語になっているのか。 ・マレーシアについて（5 分） 共通語として英語が広く使われているが、なぜマレーシアではマレー語が公用語なのか。 ・日本について（5 分） 日本には「公用語」があるかないか？ 日本にはどんな言語があるか？	英語・日本語を併用する。 意見を出しやすい雰囲気を作る。意見が出ない場合は、グループ内で共有・話す時間をとる。

展開② (15 分)	○ジブンゴトとして考えるために 問：言語を使えるとどんな可能性が広がるか。今日の学びをふまえて考える。 個人で考える（2 分）。ペアで共有（2 分）。 日系パラグアイ人 福岡さんの映像（6 分） 「言語を話せると広がる可能性」について （はじめのみスペイン語）→英語→日本語で聞く ビデオを見た後にペアで共有（5 分）	
まとめ (10 分)	自身の変容を振り返る。 授業の感想を記述する。 教室全体で共有する。	

使用する資料・教材：

- ・パワーポイント
- ・ワークシート

07 板書計画

PPT を使用

08 評価規準に基づく本時の評価方法

- ①資料から情報を正しく読み取る。
- ②資料で得た情報を、ワークシートにまとめる。情報を他者に正しく伝えることができる。
- ③グループワーク等で自身の意見を述べるができる。他者の意見を聞き、それに対して自身の意見を述べるができる。

09 学校外との連携（※該当のある場合）

- ・新島村博物館、村立新島小学校（ゲストスピーカー等）

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

ジグソー法において、「自身が韓国人という設定で、後輩に留学を勧めるなら、日本・パラグアイ・マレーシアの中からどの国を勧めますか？一つ選択してください。」という問いに対して、活動開始前は、半分以上の生徒が日本を選択した。ジグソー法、ディスカッションを通して、最終決定では日本を選んだ生徒は 0 名になり、パラグアイまたはマレーシアを選択した。

○生徒のアンケートより

【今日の授業を受けて感じたことや考えたことを書いてください。】

言語って大切/何カ国語も話せるのが普通の国があってすごいなと思いました/言語がわかれば世界広がると思いました。/言語を沢山知ること自分の視野や将来のことについて考えられると思った。/マレーシアとか、他の国について知れてよかった/もっと他の国に行ったり、知ったりしていきたい/授業で触れたところやあまり馴染みのない国を英語で読み取ってそれを発表することで国の文化や歴史が自然と

入ってくるのがいいなと感じたし海外に行くことでより世界が広がると思った。/公用語いっぱいある国もあれば日本みたいに設定してない国もあったり、ひとつしかなかったりして考え方そこも違うんだなーと思った/沢山の言語に触れることによって、より多くの国の異文化を細かく学ぶことが出来るのは、自分が当たり前だと思っていた事が実は他の国では違ったりと、今まで見えていなかったものを知ることができるので良いなと思いました。/知らない言語がいっぱいある中で、その地に行った時に使わないのはすごくもったいないと思いました。外国人がこんにちは、ありがとう、と言ってくれた時に嬉しいように、自国の言葉使ってくれようとしているのがすごくいいことだと思ったので、どんどん使ってみたり知ろうとするのが大事だと思いました。

【もっと知りたくなったこと、学びたくなったこと、自身の考えの変化を書いてください。】

少しだけ他の言語に興味湧いた/世界で一番喋れる言語が多い国/英語以外の言語について知りたくなった。/日本みたいに公用語が決まっていない国があるのかどうか気になった。/最初は日本がいいのかなと思ったけど、キムに合うと思ったマレーシアに変えました/色んな国の言葉の表現の仕方を知りたい

他の国の色んな情報も知りたくなった！言語とか特産品とか主食とか！/実際のどのくらいの人が英語話せるんだろうと思った/留学とかの場所も目的によって違うなと改めて思った/もっと、他の国の文化や特色を知りたいなと思いました。/他の国の言語すきになる！

【グループ内での話し合いで、クラスメイトのよかったところをあげてください。】

〇〇さんと〇〇さんの発表がわかりやすかった/〇〇さんのキャッサバをイチオシしているところが、熱意が伝わって良かったです。/それぞれが考えていた事が似ていた事がほとんどだったけどしっかりとそこから3人の意見を広げることが出来た/〇〇さんと〇〇さんの地理的な観点から植民地支配が影響しているという考えや、憲法 GHQ などは驚いた/今までで習ったことから答えを出していたのが凄かった/みんな歴史の背景とか経験を使って色んな視点から答えていることがよかった/自分では思いつかなかったこと知れた/〇〇さんのグローバルな視点は私にはとても新鮮な考え方だった。/〇〇さんの異文化に関わるみたいな視点がすごいいいと思いました。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

「島」という環境で生活している生徒たちに、自分（たち）の当たり前が当たり前でないという認識を常に持ち、他者と関わってほしいという思いでこの題材を扱った。前半の2時間で世界の言語に目を向け、グローバルな視点で考えた視野を持ちつつ、後半では自分たちの地域の方言に注目し学習を進めていくことにより、自分たちのクラス地域の言葉（方言）の存在意義について普段とは異なる視点で物事を考えることの重要性を伝えたかった。

12 苦労した点

①英語の授業では普段は10名の生徒を習熟度別に3展開しており、1クラス2名から4名と少人数体制である。授業実践当日が10名で行う初めての授業であったため、どのような反応になるのかが想像ができなかった点。

②ジグソー法を英語で行うにあたり、ゼロから資料を作る点に苦労した。そのため、まずは日本語で資料を作成した。生成AIを活用し、「CEFR A1レベルの英語に翻訳して」と指示をし、できた英文を本校のJET2名と表現や語彙等を書きかえていった。

③後半の方言についてゲストスピーカーの依頼に時間がかかってしまい、年内の実施が難しくなった点。年度末の3月に後半の授業2時間を行う予定である。

④問いの設定

扱うテーマについて「正解のない問い」の設定することが難しかった。同じ授業実践グループのメンバーとアイデアを出しながら作成した。

13 改善点

①英語の使用について

普段、英語の授業でディスカッションなどを行っていないため、生徒間の対話はほぼ日本語で行った。今後、生徒同士が英語でディスカッションできるように少しずつ発話する機会を設け、改善していきたい。

②ジグソー法のテーマについて

授業後の協議会でも話題に出たことであるが、ジグソーのテーマを絞ったほうがよかったのか、一般的な情報のみでよかったのか、という点である。今後、ジグソー法を授業で実践していく中で、改善していきたい。

14 成果が出た点

①グループ活動

今回は言語について多角的に考えることがねらいであったこともあり、2学年全員で行った。普段の授業では行うことが難しいグループ活動を取り入れることにより、生徒間で活発な話内の場を設けることができた。普段の授業では見られない生徒の様子や、活発な意見交換があり、教員にとっても良い刺激になった。

②多角的な視点で考える問いの設定

「正解のない問い」の設定をしたことにより、生徒が今までの人生での体験や学びを総合的に活用して考え、他の生徒に伝えることができていた点。生徒には社会や国語といった他教科での学びも活用していた。

③生成AIの活用

今回、ジグソー資料の作成やパワーポイントの作成で生成AI（Chat GPT）を活用した。英語科教員にとってAIを活用することは教材作成においてとても有効であると実感した。今後も活用していきたい。

15 自由記述

授業実践について

生徒たちの振り返りのコメントから英語以外の言語や他の国の文化・特色を知りたいなど、「さらに知りたくなったこと」も出てきたので、今後の授業づくりに取り入れたい。また、教科・校種横断的に教育活動ができるような環境づくりを新島の先生方と一緒に整えていきたい。

教師海外研修全体について

本研修では事前研修から事後研修に至るまで、授業実践のことを考えることになる。今まで、一つの授業にこれほど多くの時間を費やしたことがなかった。今回の授業を組み立てるうえで、他の参加者や本校の教員だけでなく、教員以外の方々からも意見やアイデアをいただいた。その過程を経て、今後も授業を行う上で心にとめておきたいと思ったことは、「授業者が伝えたいことを、自身の言葉で伝える。そうすることによって、それぞれの生徒が何らかのメッセージを受け取り、考え、行動する。」というこ

とである。今回の授業実践により、この抽象的なことを体感できた。今後も自身が伝えたいことを念頭に置いて授業や教育活動を行っていききたい。

また、本研修での学びの一つに「自分の考えや気持ちを言語化することの難しさと大切さ」をあげる。見たもの、聞いたもの、感じたことを自分の中で消化し、他者に的確に表現することはとても難しいが、自分や他者を理解するためには必須であると考えた。事前研修では、私自身を含め、参加者は吸収した新しい情報を消化しきれず、さらに、それらに対して自分の考えを的確に表現することができず、終始モヤモヤしていた。パラグアイでの研修中はほぼ毎日振り返りの時間があり、そこで私たちは少しずつ自分の感情などを言語化することができるようになってきた。毎日見学先で同じものを見ているが、見る人によりとらえ方や感じ方は異なる。そのことを共有し、伝える時間は私の中で貴重な学びのプロセスであった。事後研修になると言語化することにも慣れてきたようで、言語化する楽しさ（＝ワクワク）も増えた。今後も本研修で得たことを生かし、自身と生徒の学びを発展させていきたい。

【多文化共生2】

持続可能な社会を生きる

【実践者】

氏名	加藤 瑞穂	学校名	美浜町立美浜東小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	6年1組（12名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年12月～1月（6時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

家庭科

02 単元名と単元目標

単元名：持続可能な社会のために

単元目標：世界と自分の生活がつながっていることを実感し、消費者の立場から自分にできることは何かを考え、実践する。

関連する学習指導要領上の目標：日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	自分の生活と身近な環境との関わりや環境に配慮した物の使い方などについて理解している。
② 思考・判断・表現	環境に配慮した生活についての物の使い方などに問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなどして課題を解決する力を身に付けている。
③ 主体的に学習に取り組む態度	家族の一員として、生活をより良くしようと、環境に配慮した生活について、課題の解決に向けて主体的に取り組んだり、振り返って改善したりして、生活を工夫し、実践しようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

家庭科は、児童の生活に身近でとても大切な教科である。今回、国内研修で学んだことを活かすのに最適な単元が「持続可能な社会を生きる」であり、その学習を通して様々なことを学んでほしいと考えた。今後、人々が地球で共生していくためには、1人1人が地球を良くしたいという意識をもつことが大切である。そのために授業では、「消費者の立場として何ができるか」を考えることに焦点を当てることにした。研修では、バングラデシュの良さをたくさん知ったが、劣悪な労働環境や環境に配慮のない工場や建物が非常に問題になっていることが衝撃的だった。「持続可能な社会」をテーマにしているので、ま

ずそのような実態を児童が知ること、そして日々の生活で何ができるかを考え、実践していくことを目的として授業づくりを行った。

〈児童/生徒観〉

真面目な児童が多く、普段からとても熱心に授業に取り組んでいる。しかし、自分の意思を表出することが苦手な児童が多いため、授業にはグループ活動を多く取り入れ、自分の意見を発表する機会を多くとるようにした。

美浜の小学校では、総合の時間で年間を通して持続可能な社会について考える取り組みを行っている。そのため、SDGsについて大まかな知識は持っている。しかし、具体的な目標や取り組みについては知らない児童が多かった。

〈指導観〉

私たち消費者の普段の行動は、持続可能な社会をつくるために非常に重要であることを知ってほしい。一人一人が意識を持って行動することで未来を変えることができるということを伝えたい。そのために、生活に最も身近である「食」や「衣服」などの消費行動に焦点を当てた。食や衣服を生産する過程には労働問題・環境問題など様々な問題がある。まずは、その課題を知り、消費者としてどのように行動すると良いのかをじっくり考えていきたい。

05 単元計画（全6時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	生活と身近な環境の関わりについて調べよう	生活と身近な環境の関わりに気づく。	・教科書のフォトランゲージを見て、自分たちの生活が環境に与える影響を考える。 ・問題点と影響についてグループになって話し合う。
	資料・教材など	教科書のフォトランゲージ・ワークシート	
2	持続可能な社会って何だろう？	持続可能な社会の視点から生活のあり方を考える。	・前時で話し合った内容を共有する。 ・動画を視聴し、地球上で起こる様々な問題について学習する。
	資料・教材など	NHK for school（放置しないで！地球温暖化）・ワークシート	
3	私たち消費者にできること ～食編～	「食」の問題点を知り、消費者としてできることを考える。	・「バナナ」に焦点を当て、生産背景にある労働問題・環境汚染について学習する。 ・ジグソー学習を行い意見共有する。
	資料・教材など	自作資料・ワークシート	
4 本時	私たち消費者にできること ～衣服編～	「衣服」の問題点を知り、消費者としてできることを考える。	・バングラデシュの縫製産業に焦点を当て、生産背景にある労働問題・環境問題について学習する。 ・衣服を買う時に消費者としてできることを考える。
	資料・教材など	自作資料・ワークシート	
5	実践計画を立てよう	日々の生活で自分にできるベスト3を考え、	・普段の自分の生活を振り返り、改善できることを考える。

		実生活の中で実践できるようにする。	・3つに絞り、意見共有する。
	資料・教材など	ワークシート	
6	実践を発表し振り返ろう	実践したことを共有し、振り返る	・実践内容をグループで共有し、学習内容を振り返る。
	資料・教材など	ワークシート	

06 本時の展開（4 時間目）

本時のねらい：本時のねらい：私たちの身近な「衣服」が生産される背景を知り、消費者として多角的な視点を持つことができる。

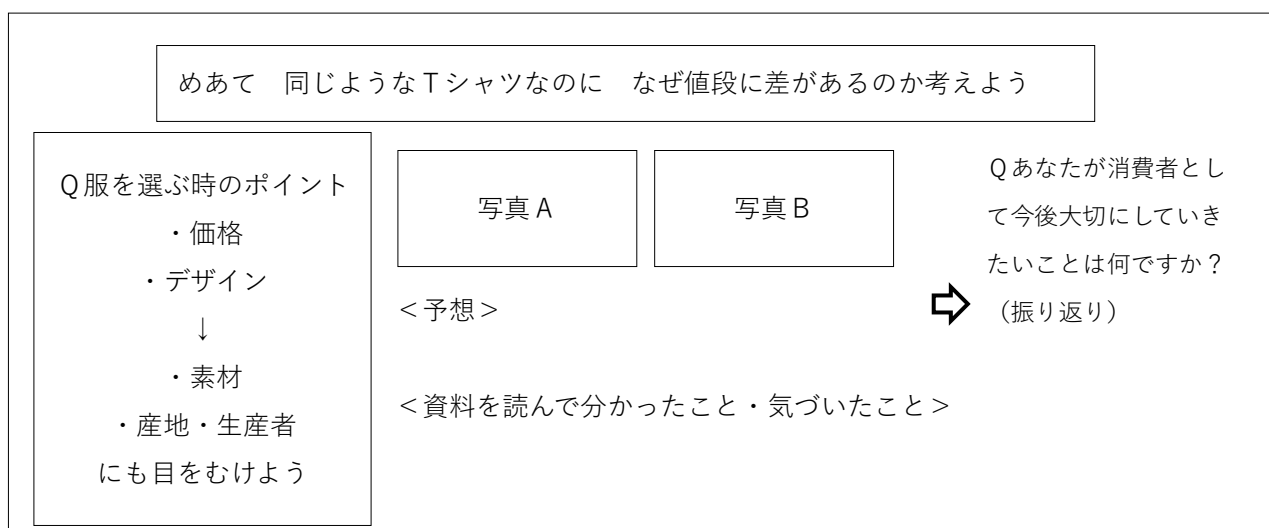
過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5分)	T：あなたが服を買うときに重視しているポイントはなんですか？ ①価格 ②デザイン ③流行 ④素材 ⑤着心地 ⑥産地 C：価格が1番かな C：似合う服が良いからデザインも大事 ・自分たちが衣服を購入するときにもつ視点を振り返り、「価格」「デザイン」などの表面的なことに着目することが多いことを理解する。	○テレビにアンケート結果を提示する。(Google Forms)
展開 (30分)	T：あなたはTシャツを買いにきました。AとBどちらを選びますか？(どちらもデザインは同じ) A・バングラデシュ製Tシャツ 1000円 B・日本製Tシャツ 5000円 C：安い方のA！ C：Bの方が高いけどなんとなく良さそう 同じようなTシャツなのに、なぜ値段に差があるのか考えよう	○Tシャツのデザインはだいたい同じであることを伝え、値段の差に着目するように促す。
	・なぜかを予想し、ワークシートに記入する。 C：服を作っている環境が全然違う C：バングラデシュの工場は照明が暗いね C：日本の工場は清潔だね ・AとBに関する資料を読み、ペアと意見を共有する。 ・改めて気づいたことをワークシートに記入する。 ・全体で意見共有を行う。 <資料Aを読んで> C：バングラの人々は毎日深夜まで働いているのに、給料がとても少ない。	○縫製工場の写真を掲示する。 ○AとBに関して詳しく書かれた資料を配付

まとめ (10分)	C：エアコンがついていないなど、とても苦しい環境で服を作っている。 C：バングラの人々の給料をあげて欲しい。 <資料Bを読んで> C：国内で服を生産するにはお金がかかるのかな。 C：日本は、品質や安心・安全を大事にしている。 ・ラナプラザ崩壊事故について説明する。 ・映画「メイド・イン・バングラデシュ」の予告編を視聴する。 T：あなたが消費者として今後大切にしていきたいことは何ですか。 ・意見をワークシートに記入し、ペアと共有する。 ・振り返りの発表を行う。	○バングラデシュの縫製工場について多角的に見て理解を深められるようにする。
----------------------	--	--

使用する資料・教材：

自作資料A・B・自作ワークシート

07 板書計画



08 評価規準に基づく本時の評価方法

・授業中の観察・ワークシート

09 学校外との連携（※該当のある場合）

なし

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

初めは、自分の消費行動についてほぼ何も考えていなかった児童が多かった。しかし、授業を進めるにつれて、商品や消費行動について多角的な視点を持って考えることができるようになった。

【授業後の児童の感想】

- ・これからは産地などにも注目して服を買いたいです。この前のフェアトレードバナナみたいに、外国でも働いている人に仕事をした量にしっかりと給料を払っている服を買いたいです。
- ・どんな人がどんな思いで作っているのかを思いながら、買うか買わないかを決めたいです。
- ・私はいつも価格を見て服を決めるので、これからは労働環境なども考えて、持続可能な社会にするためにどうしたらいいかを考えて買い物をしたいです。

11 国内代替研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

バングラデシュは急速に経済成長しているが、労働問題・環境問題はなかなか改善されず、国民は苦しい状況下にある。中でもラナプラザの崩壊事故は強く印象に残った。バングラデシュの縫製工場で作られる衣服は日本でも多く販売されており、この事故は他人事ではなく、自分事として考えていかなければならない課題であると感じた。家庭科の授業で、どのように授業に落とし込むか非常に悩んだが、消費者という立場として授業を進めていくことにした。

12 苦労した点

- ・単元全体の学習計画を考えること
- ・単元のねらいを児童に身に付けさせるための授業づくり
- ・児童に思考の変容を与える授業づくり
- ・AとBの資料作成

13 改善点

- ・導入では、服を買う時に大事にしていることを聞いたが、服を買う経験があまりない児童がおり、実感をもって考えられなかった。
- ・「値段の差」を考えることがメインになってしまい、消費者としてどうすると良いか考える時間が短くなってしまった。本題は「私たちは消費者として課題にどう向き合うか」のため、時間配分が良くなかった。
- ・学習課題の落としどころをきちんときめておく良かった。正解はないが教師自身が考えを持っておくことが大切だと思った。
- ・単元名が「持続可能な社会」で目標が「自分でできることを考え、実践する」なので、今日はSDGsのどれを考えるか掲示して最初におさえておく良かった。
- ・SDGs10「人や国の不平等をなくそう」でバングラデシュの人々が豊かな生活ができるにはどうしたら良いか考えさせることができると良かった。
- ・SDGs12「つくる責任・つかう責任」を掲示すると良かった。先進国の人々は安くTシャツが買えるので、「まだ着られるTシャツもすぐに処分してしまう→安く買えるから、まだ着られるTシャツがあるのに、気に入った次のものを買う→買ってもらえるから発展途上国では、安い賃金でTシャツを作る産業が成り立つ」という現状の中で、バングラデシュの人々の賃金を上げるためにはどうしたらいいのか。また、賃金の安いバングラデシュに工場を建ててしまったという経営側の責任が問題でもある。バングラデシュでも質の良い高く売れる製品を作り、賃金を上げることも大切。そのために、安易に安い製品を買わないようにするといいいのかな、でもそれだとバングラデシュの人々の収入が減るのか・・・などモヤモヤする部分をしっかり考えさせたかった。

・児童らが、どうすればバングラデシュの人々が豊かな生活ができるのか、自分たちができることは何かを考え、活発な議論ができると良かった。正解がないからこそ、より良い未来のためにどうすれば良いのか、考えさせたかった。

・1 時間の間に、①バングラデシュの縫製産業の実態を知る②バングラ産の衣服が安い理由を考える活動③消費者としてできることを考える活動、と内容が多すぎて、児童も少し混乱してしまったと思う。何時間かに分けて授業出来ると良かった。

14 成果が出た点

- ・児童らが、外国の労働問題・環境問題を知ることができた。
- ・消費者としての自分の行動を考えるきっかけになった。
- ・消費者としての考え方を改めるきっかけになった。
- ・身近な生活に学習で得たことを活かすことができた。
- ・児童らが活発に意見交換することができていた。

15 自由記述

夏の研修は、非常に濃い 3 日間だった。色々な人々が、色々な面からバングラデシュについて語ってくれた。バングラデシュに熱い想いを持っておられる人ばかりで、話に感銘を受けるとともに自分がこれまで様々なことに無関心で他人事であったかに気付かされた。私自身、日本とバングラデシュのつながりを考えたことがこれまでに一度も無かったが、今回の研修でつながりが沢山あることを学んだ。自分とは「関係ない」と思っていることも、必ず何かつながっている。そういう思いを持つことができるようになった。自分の生きる姿勢を変えることができた素晴らしい機会だったと感じており、この研修を受けることができとても感謝している。また、普段児童と関わる中で私が得た学びを伝えられるように今後も努力していきたい。

【多文化共生2】

行徳のまちから世界のまちへ ～パラグアイの人とアミーゴになろう～

【実践者】

氏名	城島 愛	学校名	市川市立行徳小学校
担当教科等	総合的な学習の時間	対象学年（人数）	3年4組（33名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年11月～12月（12時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合的な学習の時間

02 単元名と単元目標

単元名：行徳のまちから世界のまちへ ～パラグアイの人とアミーゴになろう～

単元目標：世界（パラグアイ）の人と友達になることで、世界に目を向け、言語や文化、習慣などさまざまな違いに気付くことができる。

関連する学習指導要領上の目標：（1）横断的・総合的な学習や探究的な学習を通すこと

03 単元の評価規準

① 知識・技能	①日本とパラグアイの共通点や相違点に気づく。 ②自分たちのまち、市、県、国、世界と視野を広げ、日本とパラグアイが同じ地球に存在し仲間であることを理解している。
② 思考・判断・表現	①目的に応じて、適切な手段（本やインターネットで調べたり、人に聞いたりする）を活用し、情報を集めることができる。 ②収集した情報を整理・分析し、答えを見つけたり、次の活動に生かしたりすることができる。 ③目的や相手に応じて、考えや情報を分かりやすく表現することができる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	①話し合い、考えた活動を、自ら進んで実践しようとしている。 ②パラグアイの人や情報と進んで関わり、学ぼうとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈単元観〉

今年度の総合的な学習の時間では、まず、自分たちのまち（行徳）の魅力について調べるところから始まった。2年生の生活科では、「町探検」をして様々なまちの魅力を知っている。しかし、3年生になり社会科で学習を進めると、梨や塩、のりや寺社仏閣などまだまだ知らなかった魅力について触れる機会

があった。そして、毎年三年生が行っている「おみこし集会」に対する知識興味と憧れもあり、行徳の魅力をさらに調べたりお祭りやおみこしについて深めたりする学習を計画することとなった。そうして、1次では、「行徳の魅力をみつけよう」2次では、「話輪和笑しゅい おみこし集会 伝統を受け継ぐ祭り」をテーマに進めてきた。本時に当たる3次では、「行徳のまちから世界のまちへ ～パラグアイの人とアミーゴになろう～」とテーマを設定し、最終の4次では、「世界の課題 SDG sについて調べよう」を考えている。

3次～4次の設定理由・背景としては、今年度より外国語活動やローマ字の学習が始まったことや、国語や社会、道徳の授業で度々取り扱ったSDG sにより、海外に目を向けたり文化に触れたりする機会を持てたことが一つである。そして、中学年では自分ひとりから「友達と一緒に」という発達段階に突入し、子どもの世界が広がることも学習の題材として適していると考えた。グローバル化や多様性など子ども達を取り巻く社会が大きく変化する中で、広い世界に目を向けて興味・関心を持ち、広い視野で物事を捉えられる人になってほしい。国籍性別関係なく、自分自身と他者を大切に人になってほしい。という願いからこのテーマを設定した。前述した、「友達と一緒に」から他者に興味を持ち、協力する・つながりを持つという点で、パラグアイ発祥の「国際友情デー」を導入に用いてパラグアイを知り、パラグアイの人と友達になることをテーマにすることで、地球の裏側にいる友達とのつながりを築いてほしいと考えた。友達になるために、自分のことを知ってもらう。相手のことを知る。ということで、2次までに学習した行徳の魅力・おまつり（学校・生活・文化）の内容を盛り込んだビデオレターをパラグアイの日本語学校の児童へ送ったり、反対にパラグアイの友達からもビデオレターをもらったりすることで、交流により世界の人々との繋がりを持ち対話できる形をつくりたい。ビデオレターを作成する中で、自分達のまちについて改めて考えを深めたり、伝える内容や伝え方について仲間と相談して工夫したりと、様々な思考の広がりやズレから、多くの対話的な場面が生まれるだろう。そして、もらったビデオレターからも新たな問いを見出し、その解を考えたり調べたりする中で、日系の方に直接インタビューする場を設けることで、より深い学びにしていきたい。

子ども達の実態から、まずは興味関心を高める導入を設定することを大切にして、子ども達自身が主体的に友達になりたい！そのためにこうしよう！と活発な議論をしたり生き生きと活動したりできる単元を目指していきたい。そして、最後の4次では、パラグアイをきっかけに世界に向けた関心の流れを絶やさずに、「SDG s」について学んでいきたい。17の目標すべての達成には程遠い現状を理解し、今の自分たちには何ができるのか、小さな力でも積み重なっていけば大きな力となることを意識しながら、まずは自分の興味のあるテーマについて考え、調べ、友達と共有することで一人一人の意識を高めていけるような学習にしていきたい。

〈児童の実態〉

進級によりクラス替えがあり、新しい人間関係が構築されたり、中学年になり教科も増え学習内容も難しくなったりと、子ども達にとって環境の変化の大きな半年だった。しかし、何事にも前向きで、新しいもの知らないことに興味津々で意欲的に学習に臨んでいる。進級当初は学習規律がバラバラだったり落ち着きのない様子も度々見られたが、ゲームを通してルールを守ることを身につけたり、友達のいいところを見つけて認め合ったりする中で、少しずつ言動にも気を付けるようになった。支援の必要な児童も数名いたり特別支援学級の児童が交流授業に参加したりと様々な実態を抱える中で、できないこと、わからないことに関してもそのままにせず、練習を重ねて努力したり友達同士で教えあったりするなど、励ましあいながらクラスみんなで成長している。

1次や2次の学習では、タブレットを使って調べたり図書室から関連する本を借りて読んだり、興味を抱いた事柄について、進んで活動する姿が多かった。タブレットのキーボード入力については、ようやく覚えたローマ字で、入力が難しくても表を見ながら打ち込んだり、調べてわかったことをみんなに知らせたりと、わずかな情報でも、子ども達の興味関心が学習意欲の起爆剤になっていると感じている。また、ゲストティーチャーの皆さんに直接教えていただいたことについても、ふりかえりや感想から子供たちの中に印象深く残っていることが伺える。ただ調べて知り、自分で考えを巡らせるだけでなく、当事者の方に直接お話を伺うことで納得できたり、さらに疑問をもったりすることができる貴重な機会だったのだと考える。

本単元ではパラグアイの子ども達との交流を予定している。今年度より始まった「外国語活動」では、毎時間とても楽しく前向きに学習に参加している。授業の中で英語ではない他の国の言葉を学ぶ機会もあり、その時は比較しながら興味深そうに繰り返し口にして親しんでいる。そのような様子から、前向きに本単元に取り組めるだろうと考える。音楽会では、「きらきら星」を日本語・英語・スペイン語で歌うことにした。最初はやや難しそうだったが、すぐに覚えて楽しそうに歌う姿が印象的だった。他教科の学習の中や普段の会話の中で、ちょっとした日本と海外との違いを紹介すると目を丸くして驚いていたり、興味深く質問してきいたり、海外に関しての興味関心は高いと感じる。そして、本校は日本語学級設置校で、地域的に外国籍や外国にルーツがある児童が多い。今年度本学級には帰国子女1名在籍のみだが、学年・学校を見渡すと様々な子ども達が在籍するこの環境は、国際理解教育について理解を深めやすい環境であり、様々な学習を広げられる可能性があると考えている。

多くの児童が大勢の前で話すことにあまり自信がないが、少人数だと話しやすかったり、考えを聞くことを好んでいたりすることから、適切な手立てを設定することで主体的・対話的で深い学びにつなげていきたい。そして、外国語の学習に全員が前向きで、海外に興味がある児童が多いことも、やはり本単元の題材は子ども達の実態にあったものであると考える。一方で身近で耳にするニュースなどから海外に恐怖心があったり、言語の部分で自信がないことで苦手意識を抱いたりしている児童もいることがわかった。そのような児童にとって、外国の良いところを見つけて良い印象を持ったり、更にそこから興味関心を抱いたりできるような学習にしていくことも目標の一つである。

人懐こく思いやりがある子ども達なので、そのまっすぐな気持ちを世界の懸け橋として、パラグアイ、そして世界へとつなげていきたい。

〈指導観〉

① パラグアイの子ども達と友達になることで、世界へ目を向ける。

外国語活動が始まったり音楽会でスペイン語に挑戦したり、そして他教科でSDGsに触れたり、子ども達にとって身近になった外国について、「友達」になるという目的のもと、親しみをもって学習に臨めるような素材の提示や興味を引く導入の工夫をする。

② 自分たちのまち（国）と世界のまち（国）の良さと違いに気づく。

魅力を発信する際の調べ学習で自分たちのまち（国）の魅力に気づき、誇りをもつとともに、パラグアイとの交流により、世界のまち（国）の魅力を知り、互いを尊重し自分たちは同じ地球の仲間だという意識を育む。

③ 相手のことを考えたり思いやったりする中で、国際理解を深めるとともに豊かな心を育む。

ビデオレター作成の際は、相手にとってわかりやすい説明になっているか、足りないところはないかなどを考えて作ったり、一緒に活動する友達と意見を出し合いながらより良いものを協力してつくったりと、

道徳的側面での成長も狙っていきたい。そして何より、外国への前向きな印象や考えをもてることを目指していく。

05 単元計画（全 12 時間）

	小単元名	ねらい・学習活動	評価方法
1	○パラグアイってどんな国？	・写真から見つけたことを共有し、パラグアイの学校の様子を中心に様々な角度からパラグアイの実態を知る。	・発言 ・ワークシート ・感想
	資料・教材など ワークシート		
2	○アミーゴになろう！	・パラグアイの「秘密の友達」のゲームに挑戦し、パラグアイの文化に触れる。 ・「国際友情デー」について考え、日本語学校の子ども達と友達になる方法を考える。 ・自分たちのことを知ってもらうために、行徳小や行徳のまちの魅力、自分たちの日常などを伝える方法を考える。 →様々な方法を考える中で、ビデオレターを作成する準備をする。	・発言
	資料・教材など		
3 ～ 7	○行徳・日本の魅力発信計画（ビデオレター作成）	①学習（教室紹介も含む） ②生活（登下校・業間・給食・掃除・係） ③おみこし集会・行徳のまち紹介 ④日本の文化（衣・食・住・行事など）紹介 ↑クラスごとにテーマに分かれて活動 ・紹介の仕方（劇・紙芝居・ロケなど）や内容・構成などを考える中で、自分たちのまちや国の魅力に気付いたり、伝え方について工夫したりする。	・発言 ・行動
	資料・教材など		
8 ～ 11 本時	○アミーゴのことを知ろう！ステキを見つけよう！	・受け取ったビデオレターでパラグアイの実態を知り、共通点や相違点を見つけたり、新たな疑問をもったりする。 ・知りたい事柄について整理して調べ、わかったことを共有する。（本・インターネット・インタビューなど） ・わかったことをまとめ、アミーゴ（友達）の国のことを理解する中で、世界とのつながりを実感する。	・発言 ・ワークシート ・発表
	資料・教材など ワークシート		
12	○もっともっとパラグアイ！そして世界へ	・パラグアイの課題を知ることで、日本の現状についても考え、世界の实情について興味をもつ。（フォトランゲージ） →4次のテーマ「SDGs」への布石	・発言 ・ワークシート ・感想
	資料・教材など ワークシート		

06 本時の展開（11 時間目）

本時のねらい：パラグアイについて調べたことを整理し、友達と考えを深めあったり、疑問に思ったことを質問したりして、パラグアイの魅力に気付くことができる。 【思考力・判断力・表現力】

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (4分)	1、前時までのふりかえり ・パラグアイではお肉をたくさん食べる ・甘いものがたくさんある ・学校が半日しかない ・日本とパラグアイはなかよし ・世界一のスープがある ・どうして雨が降ると学校が休みになるの？ ・どうして日系の人は日本語を話すの？ ・給食はあるの？ など	◎「パラグアイ発見表」に「わかったこと」「疑問」「気になる」の内容確認しながら整理する。 ※前時のワークシートをもとに、本時の見通しをもち、発言しやすくする。 ◎項目別にながら整理することで、視覚的に理解しやすくする。
展開 (2分)	2、本時のめあてを確認する。 アミーゴのすむパラグアイについて、わかったことをまとめよう。	
20分	3、まだわからない「疑問」や改めて確認したい「気になる」ことについて、予想を立て、グループごとに質問を一つか二つに絞る。 【個人→グループ】 ・なぜ雨だと学校が休みなのか →傘がないから？勉強する量が少ないから？ ・なぜ肉が主食なのか →野菜があまり採れないから？みんな野菜が嫌いだから？ ・スペイン語とグアラニー語2つ勉強するのは大変か。 ・チパ・エンパナーダ・ベジュ・アサードの他によく食べるものは？ ・宿題はあるの？どんなもの？	◎※まずは自己内対話、そして他者との交流と、段階をふむことで、一人一人が考えをもって対話できるようにする。 ※一人では考えつかない事柄について、グループで共有する中で、思考のヒントを得る。
10分	4、オンライン質問コーナーでインタビューする。 日系2世 パラグアイ在住 JICAパラグアイ 福岡 ひとみさん	◎パラグアイ在住の日系人の方にオンラインで直接インタビューすることで、疑問の解決を図る。 ※まずはグループで1つは質問したいことを聞けることとし、なるべく多くの交流がもてるようにする。 ※自分の意見ではなくても、グループの中で出た考えを代わりに発表することも認め、活発な意見交流を促す。

まとめ (6分)	5、全体でまとめ 「疑問」「気になる」→「わかった」へのまとめ	◎インタビューで分かったことをまとめ、「パラグアイ発見表」を完成させる。
3分	6、ふりかえり	◎学習内容をふりかえり、学びを通して考えたことをワークシートに書く。

使用する資料・教材：

- ・ワークシート
- ・大型テレビ装置・パソコン一式・オンライン

07 板書計画

②アミーゴのすむパラグアイについてわかったことをまとめよう			
☆パラグアイ発見表☆※子ども達の調べた内容によって発見表のまとめ方は変える予定です			
衣	食	住	学校
文化	環境	その他	

08 評価規準に基づく本時の評価方法

思考・判断・表現—②：発言、ワークシート、発表

09 学校外との連携（※該当のある場合）

- ・イグアス日本語学校 3学年
- ・JICAパラグアイ 職員 福岡 ひとみさん

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

- ・時差や季節が反対なことなどを知って驚く
→オンライン質問コーナーで協力いただいたひとみさんのご厚意の大きさに気づき感謝。
- ・パラグアイに行きたい！直接会いたい！
- ・スペイン語について興味を持つ
- ・自分たちの国について知識を増やすと同時にパラグアイはどうかという思考が広がった。
- ・家族にもパラグアイのことを話すほど楽しく学習に臨み興味を持っていった。
- ・自らパラグアイについて調べ、他教科での学習中や生活の中でもパラグアイの話題を出す。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

日本とパラグアイの共通点や相違点を見つけながら、それぞれの訪問先での学びをしっかりと吸収し、様々な側面からの授業展開を想定し研修に臨んでいた。中でも「今日の一枚」を担当した日がたまたま「友情の日」で、そのことについて調べたことをきっかけとし、様々な場面で「アミーゴ」について考える機会があったことから、子ども達の実態と繋げ授業を膨らませていった。3年生という発達段階と学習環境から、①他者とのつながりを持つこと②自ら考えること③世界に目を向けること、をゴールに設定していた。本単元の一番の目標である「アミーゴになる」ことで、国という垣根を超えた繋がりを持ち、世界に目を向けることでさまざまな魅力があることを伝えたい。と考えていた。大なり小なり一人一人の胸に種を撒くことを目的としていた。

12 苦労した点

ありません。学年、JICAの皆さんに支えられて取り組みました。

13 改善点

- ・日系の方々についてももう少し学ぶ時間を十分にとるべきだった。
- ・子ども達の強い意欲をもっと生かして様々な学びにつなげるべきだった。
- ・イグアス日本語学校との交流をもっと重ねていきたかった。
- ・準備不足でオンライン配信で少々手間取ってしまった。

14 成果が出た点

(子ども達の変容から)

- ・外国により大きく興味関心をもった
- ・自ら調べたり考えたりする
- ・進んで友達と意見を交流したり協力したりする
- ・比較しながら検討し、最適解を探す など

(教職員・保護者)

- ・研修の内容に興味をもって聞いてくださり、授業の協力をしてくださった。
→「実は興味があって…」「うちでも授業して!」といった声があり、思いのほか多くの先生方が興味を持っていることが分かった。
- ・子ども達が家でも学習したことを話し、保護者も興味を持ったり協力したりしてくれた。
→「パラグアイの勉強が楽しいそうです。」「マテ茶買ってと言われました。」などの声

15 自由記述

最初は授業を単発や自クラスのみでの取り組みで考えていたが、学年の先生方の理解と協力の下、校内授業研究と絡めることで、単元で大きく時間をもらい、学年で取り組むことができた。導入は全クラス私が行い、その後の展開は提案した流れに沿って学年間で情報交換をし、4クラス同時に進めることができた。単元の流れなどを夏休み明けに早々に了承いただいたので、担当した音楽発表会で、「きらきら星」を日本語・英語・スペイン語の3か国語で歌ったり、「小さな世界」では、学年全員で国旗を持ったりする取り組みをするなど、単元に向けた仕掛けを盛り込みながら準備をすることができた。学年の先

生方は、廊下や壁面にパラグアイやSDGsについての掲示物を沢山作って「パラグアイ通り」を作ってください、単元の流れも理解して全面協力で支援して下さった。

今回の学習のテーマである「パラグアイの人とアミーゴになろう」のため、イグアス日本語学校のみなさんには多大なるご協力をいただいた。試験前で忙しい中、目的と意図を理解くださり、素晴らしいビデオレターを送って下さった。子ども達は自分達のビデオレターを作成する際も、日本語学校の友達にわかりやすく伝える方法を工夫したり、想像を膨らませたりしながら生き生きと活動していたが、受け取ったビデオレターを見た時の目の輝きや見終わったあとの感想には思いが溢れていた。将来、この子どもたちがもしかしたらどこかでつながっていくかもしれない。直接でなくても何かしらの形でつながるかもしれない。そう願っている。

また、授業を考える中で、子ども達の今までの学び方として、ゲストティーチャーに協力いただくことが多く、生の声をきくことは学びを深めることにとても効果的だということがわかっていたので、どうかしてその機会をもてないか考えたところ、オンライン質問コーナーを依頼することとなった。日本と季節も時間も真反対、地球の裏側にいるひとみさんには大きなご負担をかけてしまったのにも関わらず、子ども達にわかりやすく、丁寧に回答下さった。授業研講師の先生からは、「ひとみさんの回答によって子ども達はさらに学びを広げられる。」と太鼓判をもらった。バイクで学校に通う子ども達、気温の変化、カラフルなお家、高層ビル…これからも一人一人が興味関心疑問を持ったことを追求していけるよう、モヤモヤワクワクを子ども達と楽しんでいきたい。

【多文化共生2】

パラグアイで出会ったアミーゴと受け継いだ 友情の大豆

【実践者】

氏名	早川 千恵子	学校名	長野市立浅川小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	1年1組（22名）2組（23名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年8月～12月（16+10時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

生活科・道徳・特別活動・健康教育（食育指導）・人権教育

02 単元名と単元目標

単元名：パラグアイで出会ったアミーゴと受け継いだ大豆

単元目標：パラグアイで暮らす日本とかかわりのある人との出会いを通して、それぞれの願いや思いを知り、自分たちにできることを考える。

関連する学習指導要領上の目標：

○生活科：具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1)活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。

(2)身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。

(3)身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

○学級活動

(2)イ：よりよい人間関係の形成 エ：食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成

○人権的な視点

・価値的・態度的側面…相手や他社を思う気持ちを受けとめようとする。

自分の生活につなげて考えようとする。

・技能的側面…相手の立場になって考えることができる。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付いているとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けている。
---------	---

② 思考・判断・表現	身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現している。
③ 主体的に学習に取り組む態度	身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学ぼうとしたり、生活を豊かにしたりしようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

4月に長野市内の十数園から入学してきた子どもたち。いろいろなことに興味をもち、学ぶ気持ちを強くもっている。入学後から、運動会や生活科の活動場面など学年合同で取り組んでおり、畑の活動では、ジャンボカボチャやサツマイモを学年で一緒に育てている。2学期には、音楽会や浅川チャレンジ(遠足)などともに活動する場面があるので、2学期当初に学年集会を行い、クラスのお友だちから学年のお友だちとも仲良くなろうということで活動し始めている。毎日の給食ではよく食べ、1学期に栄養教諭と一緒に給食センターの様子や作る人の思いを知り、食べることの大切さを学んでいる。

そんな中で、1学期末に出題された毎日の給食クイズで大豆の国内自給率が6%であることを知り、私たちの生活に欠かせない大豆製品についてもっと知りたいと課題意識をもつことができた。長野県では例年2年生になると多くの学校で大豆を育てており、本校では収穫後に地域ボランティアのみなさんとみそづくりなどにも挑戦していて、子どもたちの身近な食品として大豆が位置付いている。

このように、子どもたちの意識と生活科を中心とした学習を展開していく中で、担任がパラグアイ研修で気づいた地球の反対側で暮らす人々が離れた地で日本を思い、それらを知ることを通して、多様な考えがあることを尊重し、今度自分たちに何ができるのかを生活の中から見つけ出していく一歩になればと願い、この単元を設定した。

05 単元計画（全16時間＋番外編10時間） ★オンライン配信

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 2 ★	友だちについて考えよう。	「ひみつのともだち」に取り組むことで、クラスの友だちについて考えるとともに、パラグアイ「友情の日」について知る。	・学年集会で二学期の見通しをもち、学年で協力することが必要であると感じた後、「ひみつのともだち」のやり方を知り、クラスごとに挑戦する。
	資料・教材など ひみつのともだちカード・ニャンドゥティーと担任のカード 公開：参会者4名（オンライン3名、MC1名）※お試しオンラインで見通しをもつ		
3 4 ★	パラグアイについて知ろう。	パラグアイと日本をいろいろな角度から比較しながら、日本やパラグアイについて考える。	・参観日に合わせて、パラグアイについて紹介する。(位置、人口、産業、学校生活、食事、日系など) ・両国の人口ピラミッド図をタブレットの手持ち資料として気づいたことを話し合う。 ・日本でよく見る世界地図とパラグアイで購入した世界地図を比べる。 ・授業最後に「パラグアイで出会ったアミーゴ」としてオンライン参観者を紹介する。
	資料・教材など：パラグアイ紹介パワポ、ニャンドゥティー、国旗、パラグアイのお菓子や醤油、先住民族の笛・弓矢・置物、ミドリ工房作品、アオポイ着用、タブレット、テレビ		

	公開：参観者 56 名（保護者 40 名、オンライン 14 名、MC 1 名）※参観日の保護者に加え、他県教諭が夏休み中だったこともあり、多数の先生方に参観していただくことができた		
5 6 ★	大豆の自給率から身近な食べ物について考えよう。	大豆の自給率から給食や身近な食べ物について考えよう。 ※長野市第四給食センター栄養教諭豊田真奈美先生とのコラボ	・身近な大豆食品や給食の大豆メニューを確認する。 ・給食だよりでの大豆クイズを想起し、6 %がどのくらいなのかを実際の大豆で確認する。 ・その他の食品の国内自給率について考え、輸入しないと多くの食べ物が手に入らない状況であることを可視化して示す。 ・給食では栄養教諭が地産地消に取り組んでいる理由を考え、栄養教諭の思いを知る。 ・地産地消を目指すパラグアイの宇宙とつながる農業を紹介する。 ・イグアス日本語学校大山しおん教頭先生からパラグアイの食事について話を聞く。
	資料・教材など：大豆実物、大豆食品や自給率で作った給食を示した資料、パワーポイント、タブレット、テレビ、配信用の視聴覚機器（市教委より借用）、板書模造紙、アオポイ 公開：参観者 15 名（給食ボランティア 1 名、市民新聞記者 1 名、大学院生 1 名、オンライン 9 名、MC 1 名）		
7 8 ★	パラグアイで出会ったアミーゴ①	パラグアイ人のカルロス ・パラグアイ ・パラグアイ在住 ・日本語が話せる ・パラグアイについて聞いてみたいことをペアと考えて直接質問してみる	・写真からカルロスについて予想する。 ・スペイン語での自己紹介から、日本人ではないと予想後に日本語での自己紹介でオンライン登場してもらう。 ・パラグアイについて、カルロスから聞く。 ・カルロスに子どもたちから質問する。 ・スペイン語の歌を教わる。
	資料・教材など：パワーポイント、今までの授業の掲示物、配信用の視聴覚機器（市教委より借用）、テレビ、板書模造紙など 公開：参観者 10 名（オンライン 7 名、MC 1 名）		
9 10 ★	パラグアイで出会ったアミーゴ②	立川さん ・新潟県出身 ・日本人 ・パラグアイで MIDORI 工房を営む ・スペイン語を話せる ・いろいろな国の人と働くときに大切にしていることを聞いてみる	・二学期始業式の校長講話から外国で暮らす日本人について考える。 ・写真から立川さんについて予想する。 ・前時のカルロスや立川さんから、日本人について考える。 ・立川さんにオンラインで登場していただき、パラグアイでの活動いろいろな国の人と働くときに大切にしていることなど直接お話を聞く。
	資料・教材など：パワーポイント、今までの授業の掲示物、ミドリ工房の作品、アオポイ、配信用の視聴覚機器（市教委より借用）、テレビ、板書模造紙など 公開：参観者 16 名（オンライン 9 名、市立長野中学生 3 名、大学院生 1 名、MC 1 名）		
11 ★	パラグアイで出会ったアミーゴ③	JICA パラグアイ平井班長 通訳エリカさん	・前時の「日本人」について考えたことを確認する。 ・二人の写真から気づいたことを話す。

		日系二世の思いを知る ・パラグアイ人 ・日系人 ・国際人 小山アガタ琴美さんにインタビュー	・日系二世の二人がパラグアイ人であることを伝え、映像からエリカさんの思いを知る。 ・それぞれの立場によって思いが異なり、その思いを尊重することが大切であると感じる。
	資料・教材など：写真、エリカさんインタビュー映像①②③、配信用視聴覚機器、板書用模造紙 公開：参観者 13 名（ひかり子ども園元園長 1 名、オンライン 11 名、MC 1 名）		
12	給食で使う大豆を選別してみよう。	給食で提供する大豆の選別をやる。 栄養教諭豊田真奈美先生とのコラボ	・形や汚れなど確認して選別する。 ・給食で紹介してもらうメッセージを考える。 ・12 月の献立で市内各校に発信する。
	資料・教材など：給食用の大豆、トレイ、大豆選別の基準		
13 本時 ★	パラグアイで出会ったアミーゴ④ ※長野市指定 北部支会人権教育公開授業	大西ホルヘさん 福岡日登美さん ・日系二世 ・パラグアイイグアス出身 日本とのつながりを大切にする思いを知り、今後自分たちに何ができるのかを生活の中から見つけ出す一歩とする	・今までに出会ったアミーゴを想起する。 ・日系二世のホルヘさんの紹介をする。 ・遺伝子組み換えでない大豆を作る理由を予想する。 ・ホルヘさんの思いを映像で確認する。 ・パラグアイ従業員の子どものために、スペイン語学校を作ったことを伝える。 ・今までのアミーゴとつないでくれたひとみさんの思いを聞く。 ・ホルヘさんから「友情の大豆」を受け継ぐ。 ・ホルヘさんやひとみさんの思いを聞いて、自分の生活で役立てられそうなことについて考える。
	資料・教材など：「友情の大豆」、ホルヘさんインタビュー映像、配信用視聴覚機器 公開：参観者 名（参観 35 名、市教委 1 名、オンライン 20 名、MC 1 名、オンラインでの研究会参加者 4 名）		
14	ホルヘさんの大豆を受け継ごう。	ホルヘさんの大豆栽培の様子を知り、「友情の大豆」について考える。	・ホルヘさんの農場の様子を知る。 ・大豆栽培の苦労について考える。 ・大豆栽培に興味をもつ。
	資料・教材など：友情の大豆、ホルヘさんの大豆資料、大豆に関する本		
15	「友情の大豆」について今後どんなことができそうかを考えよう。	大豆をどうしたいのかを考える。 ・育てたい ・食べてみたい ・みんなに分けたい	・大豆の育て方を知りたい。 ・大豆を育てている人に聞いてみたい。 ・大豆の本で調べたい。 ・たくさんあるから学校の畑だけでは余るかも。
	資料・教材など：友情の大豆、大豆に関する本		
16	大豆の育て方を調べよう。	大豆の育て方を調べ、2 年生や市内産地の学校での取り組みと出会う。	・2 年生が育てていることを確認する。 ・市内の学校で大豆栽培が盛んな地域があることを知る。（ジャンボカボチャを育てる中条地区など西山地区）

		日本の大豆とパラグアイの大豆を比較してみる。	・聞いてみたいことを考える。
	資料・教材など：友情の大豆、日本の大豆（ナカセンナリ）、大豆に関する本、市内の大豆生産にかかわる資料など		
※3 学期以降は、ホルヘさんから受け継いだ「友情の大豆」について、大豆に関わる活動を中心に展開する予定。			
番外編 10 時間	音楽会でパラグアイを紹介しよう。	「かえるのがっしょう」の鍵盤演奏で、世界の地域の特色あるリズムを取り入れながらいろいろな国を冒険する。 カルロス、立川さんと動画メッセージで交流する。	・お囃子、ジャズ、サンバなど世界の地域のリズムに合わせて鍵盤を演奏する。 ・リズムを紹介するセリフを自分たちで考え、自分たちの言葉で伝える。 ・カルロスから教わった「Hola hola paravos y para mi」を歌う。歌詞の意味は、イグアス日本語学校三田村校長先生に教えてもらう。 ・「地球のみんなが国際人」という子どもたちが考え出した言葉を最後のセリフで伝える。 ・カルロスや立川さんからのメッセージを子どもたちに伝え、相手意識をもち、思いを届けるステージを作る。
	資料・教材など 鍵盤ハーモニカ、カルロスの歌動画、電子オルガン		

06 本時の展開（13 時間目）

本時のねらい：

日本とつながりのあるパラグアイの人々との交流から、人とつながることを楽しみ、広い世界に関心が高まってきた子どもたちが、大西ホルヘさんの大豆づくりのお話から、ホルヘさんが日本や周りの人々とのつながりを大切にする思いを感じとり、つながりを広げるために自分ができそうなことについて考える。

人権的な視点

- ・知識的側面…（本時に含まない）
- ・価値的・態度的側面…相手や他社を思う気持ちを受けとめようとする。★1
自分の生活につなげて考えようとする。★2
- ・技能的側面…相手の立場になって考えることができる。★3

指導上の留意点

- ・どの子にも画面が見えるように配慮する。
- ・意見を伝えあう場面では、ペアを確認しながら話し合えるようにする。
- ・遺伝子組み換え大豆についての説明は NHK 動画を活用し、日本の大豆は非遺伝子組み換えであると確認する。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入（8分）	1 今までに出会ったアミーゴと日本のつながりをふり返る。 ○パラグアイで出会ったアミーゴから、それぞれが考える○○人を確認しよう。	・パワーポイントから今までに出会ったアミーゴ

展開 (34分)	・大山しおん教頭先生(日系人) ・カルロス(パラグアイ人) ・立川さん(パラグアイ在住の日本人) ・平井さん(日系二世パラグアイ人) ・エリカさん(日系二世国際人) ・琴美さん(日本人) 2 大西ホルへさんがどんな人か考える。 ○写真を見て、どんな人か予想してみよう。 ・どこに住んでいるのかな。 ・どんな言葉をしゃべるのかな。 ・平井さんとちょっと似ているかも。 ・日系の人かな。 3 ホルへさんのことについて紹介を聞く。 ○ホルへさんについて紹介します。 ・ホルへさんは日系人なんだね。 ・大豆をどのくらい作っているのかな。 ・農協ってパラグアイにもあるんだ。 4 ホルへさんが遺伝子組み換えではない大豆をなぜ作っているのかを考える。★3 ホルへさんは、なぜ遺伝子組み換えではない大豆を作るのだろう。 ○ペアと一緒に考えてみよう。 ・大変なのになんで作るのかな。 ・日本と関係があるのかな。 ・日本に送っているのかな。 5 ホルへさんの VTR を視聴し、ホルへさんの思いを知る。 VTR①★1 ○ホルへさんの話を聞いてみよう。 ・ふるさとの日本に大豆を送っていたんだね。 ・確かに日本の国内自給率はすごく低かった。 ・東日本大震災でも大豆が助けてくれていたんだね。 ・遠く離れた場所だけど、日本とつながっているんだね。 ・ホルへさんは、日本のことだけでなく、パラグアイの人や出会った人のことを考えている。 6 ホルへさんの考えや今まで出会ったアミーゴを思い返し、自分にできそうなことことを考える。★2 ○ホルへさんや今までに出会ったアミーゴを思い出し、同じ国際人としてできそうなことややってみたいことを考えてみよう。 ・いろいろな国の人ともっとつながりたい。 ・パラグアイや他の国について知りたい。 ・ホルへさんのことを家族に伝えたい。	の写真から想起できるようにする。 ・前時に発言があった「地球のみんなが国際人」を確認する。 ・担任と一緒に写真からホルへさんを見せる。 ☆大西ホルへさん ・日系二世 ・パラグアイ在住 ・イグアス農協理事長 ・大豆(遺伝子組み換え)の大農家 ・遺伝子組み換え大豆について簡単な説明(VTR)をする。 ・遺伝子組み換えではない大豆を育てるのはとても手間がかかり、日本に輸出できないことを伝える。 ・両親のふるさとである日本とのつながりを今でも大切にしている。 ・東日本大震災の時に大豆を日本に送り、豆腐を配った。 ・日本の食糧危機に備えている点から栄養教諭と学んだ自給率の資料を示す。 ・ホルへさんがパラグアイ従業員の子どもたちのために私設のスペイン語学校を設立したことも伝える。 ・今までの掲示物やパワーポイント資料などを見ながら、ペアで意見を交換できるようにする。
---------------------	--	--

まとめ (3分)	・ 周りにいるみんなのことを大切にしたい。 ホルへさんの思いを聞き、つながりを広げるために自分ができそうなことを考えている。 7 アミーゴとつなげてくれたひとみさんと出会う。 ○ひとみさんの紹介と感想を聞こう。 ・ 今までのアミーゴを先生に紹介してくれた人なんだね。 ・ ひとみさんはどんなつながりを大切にしているのかな。 8 ひとみさんより、ホルへさんの思いのこもった「友情の大豆」を受け継ぐ。 ○ひとみさんより、ホルへさんの「友情の大豆」を受け継ごう。 ・ ホルへさんの大豆を育ててみたい。 ・ 大豆を育てて食べてみたい。 ・ 二年生が育てているから教えてもらおう。	☆福岡ひとみさん ・ 日系二世パラグアイ人 ・ JICA パラグアイで勤務、研修の案内人 ・ 日本で暮らしたことがある。 ・ 「友情の大豆」を紹介する。 ・ 今後どんなことがやりたいのかを語ることができるようにする。
---------------------	--	---

使用する資料・教材：

映像（大西ホルへさん）、福岡ひとみさん（生出演）、授業用パワーポイント、テレビ、授業配信用機材（長野市教委より借用）、今までの授業で活用した板書用模造紙、パラグアイグッズ（パラサント工芸品、先住民工芸品、テレレ、ニャンドゥティー、アオポイ、世界地図、パラグアイ地図）、友情の大豆、本時板書用模造紙

07 板書計画

学年での実施ということで、S Tの2組担任に分担。パラグアイのアミーゴからのメッセージに対して子どもたちがつぶやいたことを模造紙へ書き込む。授業後には廊下に掲示。（毎時間実施）

「ホルへさんが遺伝子組み換えではない大豆を作っているのはなぜ？」（問い）

- ① 日本とのつながりのため
- ② 日本の食糧危機にそなえて

「ひとみさんが大切にしていることは？」

昔からの友だち、今の友だちも大切にすること

08 評価規準に基づく本時の評価方法 ※人権教育の観点から

- ・ 価値的・態度的側面…相手や他社を思う気持ちを受けとめようとする。
自分の生活につなげて考えようとする。
- ・ 技能的側面…相手の立場になって考えることができる。

09 学校外との連携（※該当のある場合）

- ・ イグアス日本語学校：大山しおん教頭先生
- ・ パラグアイミライ塾：カルロス（元横国大学院生）
- ・ パラグアイ MIDORI 工房：立川巧雪さん
- ・ パラグアイフェスティバル：小山アガタ琴美さん（元イグアス日本語学校教員）

- ・ JICA パラグアイ：福岡日登美さん
- ・ パラグアイ通訳：菊池エリカさん
- ・ 長野市第四給食センター栄養教諭：豊田真奈美先生
- ・ 長野市メディアコーディネータ(MC)による zoom 配信
- ・ 長野市教育委員会より zoom 配信機材の借用

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

- ・ 地球のみんなが国際人（エリカさんの言葉を受けて）
- ・ 日本は年上の人が多いが、パラグアイは若い人が多いのはなぜ（出生率の比較）
- ・ 大豆など飼料が輸入されないと、肉や卵が食べられなくなってしまう。
- ・ 日本の国内自給率が低い中で、給食の先生はがんばって地産地消(国産)のものを使っている。
- ・ もしこんな大雨が続いたら、お米も育たなくなってしまうのではないか。
- ・ いろいろな国の人と一緒に働くときに大切にしていること（目を見てあいさつすること、きちんと謝ること）は日本も外国も同じ（立川さん）

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

日本と地球の反対側に位置するパラグアイで、日本のことをとても大事に思っている人々との出会いから、世界の人とつながり、互いを理解し合い、ともに生きることの大切さを感じてほしいと強く願った。

12 苦労した点

- ・ 小学1年生の子どもたちの意識を考え、自分たちの生活に関連した内容を数多くあった研修内容の中から見つけ出して、教材化していくこと。
- ・ ホルへさんの大豆を生活科2年の大豆作りに出会った人やパラグアイ（イグアス）の特色を紐づけていく過程。
- ・ 教員のみならず、多くの人に伝えたいと願い、毎回授業を配信したこと。配信方法の工夫。
- ・ 学年実施での役割分担や海外研修を体験していない校内職員や参観者にこの単元展開について理解してもらうこと。

13 改善点

- ・ 2学期開始後の8月末からの実践は有効だったが、本校職員への研修報告が授業公開前だったので、全職員への共通理解が遅くなってしまった。
- ・ 本時については、人権教育の観点から研究会を開催したが、取り扱った内容についての話題に広がるところが多く出されていたので、研究会の進行についても伝達の必要があった。
- ・ zoom 参観者の研究会も同時並行していたので、研究会最後に発表してもらうとより効果的だった。

14 成果が出た点

- ・ 学年全体で、対話を中心に据え、考えを深め合う姿が自然にできるようになった。
- ・ 授業公開を長野市人権教育研究協議会とタイアップしたことで、より多くの人にパラグアイ研修での学びを知ってもらう機会となった。

- ・「授業 zoomer」として毎時間授業配信公開は、延べ 200 名以上の大勢の人に発信することができた。県内外の教職員だけでなく、授業展開で興味関心をもったいろいろな職種の人や学生が世界中から参観し、それぞれの立場から感じたことを参観後に伝えてくれた。
- ・地域の新聞社の取材があり、学校関係者以外にも発信することができた。
- ・給食センターの栄養教諭とメディアコーディネータによって、それぞれの立場からも市内各校への発信があり、授業者以外の視点からもこの単元を広げることや、また授業者としてふり返る機会にもなった。

15 自由記述

パラグアイ研修が多岐にわたる分野にアプローチした大変充実した内容だったので、小学 1 年生の子どもたちにどの部分を取り入れることができるだろうかと研修中からずっと悩み考えていたが、ホルヘさんの日本を大切に思う気持ちに出会い、たくさんの人との出会いを通して自分が感じたことを紹介しながら一緒に考えていこうと願い、今回の大単元展開が出来上がった。音楽会では、パラグアイにかかわる発表へとつながるなど、現在も子どもたちの思いや学びたい気持ちが原動力となり、子どもたちの発言やアイデアから、さらに新しい展開が切り開かれており、まるで生き物のような学びが続いている。

本単元の取り組みについては、「授業 zoomer」として公開授業までの全授業を配信したことも大きな成果があったと考える。地球の反対側のパラグアイのामीゴたちと会話を交わしながら交流することを通して、子どもたちが自分事として考え、よりパラグアイにより興味関心をもって授業展開をすることにつながった。加えて、県内外の教職員だけでなく、学生や他業種の興味をもった大勢の人たちが国内のみならず、パラグアイ、アジア、オーストラリア、ヨーロッパと世界中から参観して下さったことで、新たな視点でのレスポンスがあり、それらを取り入れながら授業展開をブラッシュアップすることにつながった。

また、この単元に一緒に取り組んでいた隣のクラスの担任はお便りで活動の様子を発信、教頭先生は日報や授業研究会を通して、そして校長先生は学校 HP など職員全体で取り組みを広げてくださっていた。さらには、ともに授業を組み立てた栄養教諭やメディアコーディネータも本単元での活動をそれぞれの立場から市内各校に配信して下さっており、新聞掲載や zoom 配信も含めて本単元にかかわった大勢の方が感じたことを独自の目線で広げて下さっていることに大変感銘を受けた。同様に、今回私が JICA 教師海外研修に挑戦したことで、自分にもできることをやってみたいと資格を取る人や自身の人生を見つめ直して新たな一歩踏み出す人など、教員だけでなく、参観して下さったたくさんの人の人生にも多大な影響を与えていることを感じた。授業のオンライン配信もあったので、子どもだけでなく、私たち大人世代にもこの研修の価値が伝わったのではないかとと思われる。

このように進化しながら学びが展開できるのは、パラグアイ研修を通じて人生でかけがえのない素晴らしい機会を与えていただけたこと、そしてそこで出会った人たちの「願い」や「思い」をより多くの人に伝えたいという強い願いを授業者として抱いたことが、小学 1 年生の子どもたちや関わって下さったたくさんの人たちにも伝わったのではないかと考えられる。今回の研修で得ることのできた「生きた教材」を、これからも出会うたくさん子どもたちとその時々に変えながら展開し、ともに考え続けていきたいと考える。

【ジブンゴト】

Iwata's Special Class

『We Are 地球人～「他人事」から「自分事」へ～』

【実践者】

氏 名	岩田 徳子	学校名	富山県立上市高等学校
担当教科等	外国語（英語）、総合	対象学年（人数）	第2学年（122名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年9月 ～ 12月（9時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

外国語・英語コミュニケーションⅡ / 総合的な探求の時間

02 単元名と単元目標

単元名：Iwata's Special Class 『We are 地球人～「他人事」から「自分事」へ～』

単元目標：

- ①パラグアイという国について知り、異文化にふれる中で、国による違いや繋がりを感じ、世界へ目を向ける視点をもつ。
- ②パラグアイで活躍する日本人など海外と関わりのある日本人と交流する機会を設定することで、今後の自分の生き方や進路を考える一助となれればと思っている。
- ③「他人事」ではなく、「地球人」の一人として「自分事」のように世界的な課題に向き合おうとする態度を養う。

関連する学習指導要領上の目標：

・外国語（英語）：外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

・総合的な探求の時間：探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を 次のとおり育成することを目指す。(1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。(2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。(3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	国際協力の基本概念、主要な国際機関、開発途上国の現状など、基礎的な知識を正しく理解しているか。
② 思考・判断・表現	グループワークやディスカッションを通して、自分の考えを効果的に伝え、相手の意見を尊重しながら議論を進めることができるか。
③ 主体的に学習に取り組む態度	国際協力の学習に対して高い関心と意欲を持ち、積極的に取り組んでいるか。自ら進んで課題を見つけ、解決するために必要な情報を積極的に収集しているか。グループワークなどで他のメンバーと協力し、共同で課題解決に取り組んでいるか。

04 単元設定の理由・単元の意義

対象となる生徒の多くは、授業やニュースで日頃から海外の話題に触れたり、情報を得たりすることがあっても、どこか遠い国の話で自分たちには関係のない「他人事」として捉えているように感じる。「他人事」ではなく、「地球人」の一人として「自分事」として「自分ができることはないか」など世界的な課題に向き合おうとする態度を養い、世界に目を向ける機会としたいと思う。パラグアイで奮闘する立川さんやアフリカセネガルで海外協力隊員としてご活躍された安川さんと関わる機会を設定することで、今後の自分の生き方や進路を考える一助となれればと思っている。

〈児童/生徒観〉

個性豊かで活発な学年である。本校の総合学科のカリキュラムから今年度から個々に進路を意識した選択授業に前向きに努力を示す生徒が多い一方で、まだ将来の目標が定まらず、自分から主体的に行動に取りかかれない生徒もいる。授業やニュースで日頃から海外の話題に触れたり、情報を得たりすることがあってもどこか遠い国の話で自分たちには関係のない「他人事」として捉えているように感じる。長時間継続して集中力を保つことに課題があるため、興味関心を高め、生徒たちが自主的に「自分事」として考えることができるような授業づくりと問いの設定が必要である。

〈指導観〉

対象となる生徒の多くは、授業やニュースで日頃から海外の話題に触れたり、情報を得たりすることがあっても、どこか遠い国の話で自分たちには関係のない「他人事」として捉えているように感じる。しかし、私たちが使用したり食べたりする身近なモノのほとんどが海外で作られたり、海外から輸入されたりしていることから私たちの生活は密接に海外と繋がっており、むしろ日本は海外を頼らざるを得ない状況である。それらを実感し、海外で起きていることが「他人事」ではなく、「地球人」の一人として「自分事」として「自分ができることはないか」など世界的な課題に向き合おうとする態度を養い、世界に目を向ける機会になってほしいと思っている。また、海外と関わりのある方との交流を通して、「海外なんてあり得ない」ではなく「海外もあり得るかも」などと今後の自分の生き方や進路を考える一助となれれば願っている。

05 単元計画（全 9 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 2	「私たちの身の回りのものはどこから来るの？」	自分たちが日ごろ何気なく使用している製品や口にしている食べ物が当たり前にあるのではないこと、自分たちの生活と他の国が繋がっていること、自分たちの消費スタイルが国際協力に繋がることを知る。	・自分の身の回りにある製品や口にする食べ物がどこから来ているか調べ学習を行う。調べ学習を通して、日本と世界との密接な繋がりに気が付く。 ・化粧品のラメやスマホに使われる原料など日本に輸入される日用品の裏側を「マイカ」を通して児童労働の実態について知る。 ・自分たちができること（商品の選択、消費スタイルなど）を考え、意見交換をする。
資料・教材など ・世界との繋がりワークシート（アフリカとの繋がり）・パワポ ・児童労働について取材した VTR			
3 4	「世界の果てまでイッテ Q in PARAGUAY！」	地理的に日本の反対側に位置する「パラグアイ」について国の概要について知り、興味関心を高めることができる。	・フォトランゲージを含んだスライドショーを通して、パラグアイに関するクイズを解きながら国の概要を知る。パラグアイの食や工芸品、現地通貨などを見たり、触ったり 5 感を通してパラグアイを感じる。
資料・教材など ・パワポ ・教師海外研修の現地で撮影した写真、映像、資料 ・ニャンドゥティ（伝統工芸） ・グアラニー族の工芸品（弓矢） ・テレレ（マテ茶） ・アオポイ（衣装） ・パラグアイ通貨 ・世界地図			
5	「Iwata's Special Class」番外編	レポート課題から、友達や周りの意見にも耳を傾け、多種多様な意見があることに気が付き、他者の意見を尊重しながら国際協力への方法を考えることができる。また、次週からの進路学習として、自分の将来を考え、お越しいただくパラグアイで活躍する日本人「MIDORI 工房立川さん」について知る事ができる。	・各クラスをオンラインでつないで実施する。 ①レポート課題では、「私たちの身の回りのものはどこから来るの？」の授業を受けて、問い「“同じ地球人”として自分たちができること、日々の生活の中で協力できそうなことは何か？」について個々の意見を書く。今回はクラスごとにグループになり、この問いについてグループディスカッションを実施する。 ・各クラス 2 グループから自分たちが出した答えを発表する。 ②ライフプラン（自分の将来像）を記入する。 ③次回お越しいただく MIDORI 工房と立川さんについての概要を知り、立川さんへのインタビュー内容を考えて、記入する。
資料・教材など ・パワポ ・レポート課題のコピー ・グループごとに意見を記入する白紙 ・ライフプランワークシート兼インタビューワークシート ・MIDORI 工房の Web サイト			
6 7	「スペシャルゲスト① パラグアイで活躍する日本人～MIDORI 工房立川さん」	パラグアイで活躍する日本人との交流から、自身の今後の生き方や	・MIDORI 工房立川さんに来校して頂き、立川さんの講演を聞いたり、ワークショップに参加したりする。

		進路を考える一助とすることができる。	・事前に考えたインタビューを行う。
	資料・教材など ・パワポ ・ワークシート ・ライブプランワークシート兼インタビューワークシート		
8	「スペシャルゲスト② 海外協力隊員～安川さん」	JICAが行っている国際協力事業や海外協力隊の活動内容、SDGについて理解を深めることができる。	・海外協力隊 JICA 出前講座から海外協力隊員をお迎えし、JICA 事業内容や海外協力隊員の活動を知り、開発途上国の生活や文化、国際協力活動について理解を深める。
	資料・教材など ・パワポ ・JICA 国際協力機構ホームページ ・ワークシート		
9 本時	「私たちにできることはあるのか」	同じ地球に生きる“地球人”として「自分事」として自分たちができる国際協力について考えることができる。	・自分ができそうな国際協力があることを実感する。「JICA 海外協力隊 職種一覧表」から自分がやってみたい、できそうな職種を1つ選んで今後の生き方や進路を考える一助とする。
	資料・教材など ・パワーポイント・ワークシート・Padlet・SDGs カード（大）掲示物（アイデアのヒントとなるよう掲示）・模造紙・ペン・タブレットパソコン		

06 本時の展開（9 時間目）

本時のねらい：これまでの授業から同じ地球に生きる「地球人」として「私たちができる国際協力」を「自分事」として考え、その考えを他者との対話を通して共有することで様々な意見や考えがあることに気付き多様な視点と学びを得る。また、これまでに関わった立川さんや安川さんの例から、自分が得意なことややってみたいことを JICA 海外協力隊職種一覧から調べ、考えることで今後の生き方や進路を考える一助とする。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (10分)	○本時のねらいを共有する。 ○これまでの振り返りを行う。 ・各テーブル3～4人ごとのグループでタブレットパソコンを1つ使用する。 ・Padlet のホワイトボード機能を使用してこれまでの授業（「私たちの身近なものはどこから来たの？～アフリカとの繋がり」、「世界の果てまでのイッテ Q in パラグアイ」、「パラグアイで活躍する日本人～立川さん」、「アフリカセネガルで活躍する日本人～安川さん」）の4つのカテゴリーから印象に残ったテーマを話し合って1つ選び、付箋機能に印象に残ったことを（代表者が）記入する。	・タブレットを使用する上でルールを明示しておく。 （①使用するタイミング以外は触らない、②代表者のタブレットのみ使用し、その他は個々のタブレットは使用しないなど） ・タブレットパソコンを使用する上で不備があれば、代替として事前に用意しておいた模造紙とペンを使用して記入させる。
展開1 (20分)	○問いを提示する。 ☆問い「“同じ地球人”として自分たちができること何か」 ・各グループでこれまでの学習内容を参考にしながら具体的にアイデアを出し合う。	

展開 2 (15 分) まとめ (5 分)	☆ワールドカフェ形式で実践する ①第 1 ラウンド：テーマについて話し合いながら探求する。前回のプリントに記載した「自分たちにできること」を個々に持ち寄りグループで話し合う。話し合った内容を模造紙にメモ代わりに自由に書き出す。ラウンドが終わる頃に、グループで残る人物を一人決め、他のメンバーは全員が別のテーブルに移動する。 ②第 2 ラウンド：アイデアを共有し、深める。 残った人物が、自分のグループで話された内容を新しいメンバーに説明する。各自、自分がいたグループで話し合われた内容を紹介し、会話を深める。その際に、模造紙に新しいアイデアを追加したり、つながりを発見したりする。 ③最終ラウンド：気づきや意見を統合する。 全員が最初のグループに戻り、別のグループで得られた気づきや理解を交換する。出たアイデアや言葉を会話しながら、自由に模造紙に付け足していく。 ④全体でグループごとに発表する。 各グループから 1 名の代表者が全体に向けて「自分たちができること」を発表する。 ○問いを提示する。 ☆問い「もしあなたが海外協力隊員になったら、どこの国でどんな活動をしてみたいか」 ① プリント「JICA 海外協力隊 職種一覧表」あるいはタブレットパソコンから「JICA ホームページの職種検索」から自分が得意なことや将来やってみたいことを思いながら探す。 ②グループでそれぞれの意見を共有する。 ③全体で共有する。 ○ 授業の振り返りをオンライン上のアンケートフォームで回答する。	・ ワールドカフェ形式についてルールと合わせて、大まかに説明する。 ・ 第 2 ラウンドで、別のグループに移動する際に 1 つのグループに多くても 5 人までとなるよう指示する。また、話が本題から逸脱しないように促す。 ・ 結論を導き出すことが目的ではなく、できるだけたくさんの様々なアイデアを導き出せるように言葉掛けを適宜行う。 ・ 他者の発表に対して批判するのではなく、様々な考えやアイデアに傾聴する態度を言葉掛ける。 ・ 「パラグアイで活躍する立川さん」や「アフリカで海外協力隊員として活躍された安川さん」の例をもとに、話を振る。 ・ 以前設定した生徒それぞれの「ライフプラン」に「海外」や「国際協力」が進路の選択肢の一つになり得ることを示唆する。 ・ 時間がない場合には、帰りの会の時間に各クラスで実施してもらうなど本日に回答してもらう。
---	---	--

使用する資料・教材：

パワーポイント/ワークシート/Padlet/SDGs カード（大）掲示物（アイデアのヒントとなるよう掲示）
/模造紙/ペン/タブレットパソコン

07 板書計画

PPT を使用

08 評価規準に基づく本時の評価方法

【知識・技能】これまで学んできた開発途上国の現状などを理解し、問題に向き合うことができるか。

【思考・判断・表現】グループワークやディスカッションを通して、自分の考えを効果的に伝え、相手の意見を尊重しながら議論を進めることができるか。

【主体的に学習に取り組む態度】国際協力の学習に対して高い関心と意欲を持ち、積極的に取り組んでいるか。自ら進んで課題を見つけ、解決するために必要な情報を積極的に収集しているか。グループワークなどで他のメンバーと協力し、共同で課題解決に取り組んでいるか。

09 学校外との連携（※該当のある場合）

- ・MIDORI 工房 立川氏
- ・JICA 国際協力出前講座

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

以下、生徒の発言を抜粋したもの

- ・普段から多くの人が使っている身近なものが児童労働によってつくられていると知った。
- ・国際協力で自分にできることがいろいろあることが分かった。
- ・私より小さい子が大変な環境で働いていることが分かり、そこで取られたものは、私も使っていると知り、考えなくてはいけないと感じた。
- ・まず知ることによって自分が相手の立場にたって考えることができるようになった。
- ・貧しいだけの国だと思っていたけどフレンドリーだったということを知れたようにアフリカへの印象が変わりました。
- ・おしゃれを楽しんでいたりして、日本と似ているところがたくさんあると分かった。
- ・自分の勝手なイメージで決めつけてしまっていたとわかった。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

- ・海外にも目を向けてほしい。
- ・遠く離れた日本の反対側で、日本にルーツをもつ人々が自分たちのアイデンティティを大切にしながら遠く離れた日本への想いを次の世代へ引き継ごうと努力されていること、パラグアイという国でチャンスを見だし、さらなる明るい未来への架け橋を築こうと起業する日本人がいること、そして（人種やルーツにとらわれずに）日本に想いを馳せ、日本のことを考えてくれている人々がいること。
- ・一つの物事でも一方向から見るのではなく、様々な角度（視点）から見て、視点を変えて考えてみてほしい。
- ・日本は他国に対して〇〇してあげているではなく、世界の協力があって今の日本があることを忘れてはならない。「途上国＝かわいそう、日本の方がえらい、たぶん日本は大丈夫だろう」ではなく、「途上国＝可能性が大きい国、移住でなくても、生活の一部が海外にもなり得ること、日本の外にも視野を広げていく必要性」
- ・「廃材全てが宝物」MIDORI 工房立川さんより 貴重な資源を大切に。
- ・〇〇人として⇒地球市民として一緒に考える

12 苦労した点

- ・自分の授業を通して生徒の成長や学びに「こうなってほしい、こう思っていたほしい」と期待したことが、その通りに行かず悩んだ。例えば、生徒の発言の中に「日本に生まれて良かった、こういう子どもたち（児童労働をする児童の姿を見て）がいるから自分たちの生活が成り立っているから、感謝したいと思った」などという意見があり、多様な意見や考えを尊重するが、異なる立場からではなく“同じ地球人とし

と一緒に考える”立場を促すような指導の仕方について、どのようにすれば生徒にそのような意見や考えをもってもらえることができるか悩み苦戦した。

13 改善点

- ・ 2 学年 120 名弱を対象としたので、人数が多く目の行き届かない部分も多くあった。今回は、大人数の生徒の国際理解、国際協力への入り口となったと思うが、一つのクラスに絞って実施するなど、少人数で深く時間をかけて実施する方法も良かったかもしれないと感じた。
- ・ より多くの先生方や保護者を巻き込んだり、また外部との連携を行ったりして広く活動できたら良かった。JICA 北陸と協議した中で、何か合同でできないか今後も継続して関わらせて頂く予定である。
- ・ 授業のスケジュールから確保できる時間も限られていたが、1 回～9 回を実施するにあたり、回毎に間が空きすぎたことから継続性が途切れることもあった。
- ・ 生徒がより一層 “同じ地球人” として “自分事” のように思考を巡らせることができるような発問の仕方や促し方。

14 成果が出た点

9 回目の授業後にアンケートを実施したところ、意外にも生徒からは「今回の授業を受けて外国に興味、関心をもった」、「今まで知らないことを知ることができて良かった」という意見が多く聞かれ、この授業を機に今後の自分の暮らし方や生き方を考えるきっかけとなったり、また世界についても “自分事として” という言葉が多くみられたりして嬉しかった。

15 自由記述

今回の授業実践は、ほとんどの生徒にとって国際理解や国際協力への “入り口” 程度だったかもしれない。それでもこの授業が、多くの生徒が世界に目を向けるきっかけとなり、世界で活躍する日本人の例から今後の生き方や進路を考える上で参考となっていればこの授業を実践して良かったと感じる。そして、生徒の中に “同じ地球に生きる地球人” として “自分事” のように世界の課題に向き合おうとする素地が少しでも養われていたら嬉しい。

【ジブンゴト】

We're all different, we're all good,
we're friends.

【実践者】

氏 名	執行 稜	学校名	市川市立宮田小学校
担当教科等	総合的な学習の時間	対象学年（人数）	6 学年（5 9 名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024 年 10 月 ～ 2 月（15 時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合的な学習の時間

02 単元名と単元目標

単元名：We're all different, we're all good, we're friends.

単元目標：

○他国に住む人々の暮らしや文化を知り、国際的な知見を広げたり自国のよさを再認識したりする。

○文化や考え方について伝え合うことで互いの「違い」を理解し、その「違い」を含めて他国を尊重することができる。

○友だちや他国に住む子供たちと協働的に学びながら、異文化や違いを認め合うことで、共に地球で生きる仲間として他国や他者を大切にしようとする。

関連する学習指導要領上の目標：

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能 を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。

(2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。

(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさ を生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	・交流活動を通して、他国の特徴や文化について理解している。【概念的な知識の獲得】 ・他国と自国との違いを見つけ、それぞれに良さがあることに気付き、他国を尊重したり自国の文化の美しさを改めて感じたりすることができる。【探究的な学びの良さの理解】
---------	---

② 思考・判断・表現	・体験したり調べたりしたことをもとに課題を設定し見通しをもって学習の計画を立てている。【課題設定力】 ・目的を考えて、自分の力で目的に合った情報を収集している。【情報収集力】 ・収集した情報を整理・分析し、次の活動に生かしている。【情報活用能力】
③ 主体的に学習に取り組む態度	・課題解決のために、進んで探究活動に取り組もうとしている。【主体的に取り組む力】 ・学年の仲間や他国の子供たちなど様々な人の意見を共感的な姿勢で受け止め、協力して活動することができる。【協働して取り組む力】 ・学んだことを自分の将来の姿や社会貢献としての役割について考え、実践しようとする。【社会とつながる】

04 単元設定の理由・単元の意義

グローバル化が進む現代社会において、異なる文化や価値観を理解し、国際的な視野を持って行動できる人材を育てることは、未来を生きる子供たちにとって非常に重要である。現代の多くの課題（気候変動、貧困、紛争、難民問題、環境破壊など）は、一国のみで解決できるものではなく、国際的な協力が必要であり、国際理解教育を通じて、これらのグローバルな問題を理解し、解決に向けて協力する重要性を学ぶ必要がある。また、異なる文化、宗教、言語、習慣を持つ人々との共存が日常化している現代では、異文化への理解が欠かせない。国際理解教育は、他者の文化や背景を尊重する姿勢を養い、偏見や差別を減らし、共生社会を築く基盤となる。異文化に対する無理解や固定観念がもたらす誤解や対立を防ぎ、平和的な共存を目指すために、文化的多様性を理解する力が求められている。

さらに、異なる価値観や視点に触れることで、一つの見方にとらわれない柔軟な思考や多角的なものの見方を身につけることができる。そのために、様々な国や地域の背景を紹介し、狭い視野にとらわれないグローバルな思考を促し、今後の国際社会で活躍するための基盤を作りたい。

これらを踏まえ、本単元では、他国に住む人々の暮らしや文化を知ること、国際的な知見を広げたり、自国のよさを再認識したりし、文化や考え方について伝え合うことで互いの「違い」を理解し、その「違い」を含めて他国を尊重すること。友だちや他国に住む子供たちと協働的に学びながら、異文化や違いを認め合い、地球に生きる仲間として共に生きていこうとすること。また、他国で起きている諸問題に対し、自己の課題として捉える視点を持つことで、「地球市民」の一員として自己の存在を理解し、自分事として考えられる意欲・態度を育てていきたいと考え、本単元を設定した。

〈児童/生徒観〉

本学年は、学校や学級の中に、外国にルーツがあったり、他国で生活したりした児童が多数おり、日本以外の国について身近に感じている児童もいる。また、他教科の学習の中でも世界について取り扱うことがあったり、ニュースなどで情報を得たりして、日本以外の国、特に開発途上国について知る機会はある。しかし、それは知識や情報にとどまっており、自分に関係があることだと認識している児童はほとんどいない。他国についての興味関心をもっている児童も多い一方で、自国との違いを受け入れられずに笑ったり、怖がったりする児童もいる。多くの児童にとって、他国が身近な存在ではないという現状である。

〈指導観〉

体験活動や異文化交流を通じて学びを深めることで、持続可能で平和な国際社会の構築に貢献できることを知ること。また、自国の枠を超えて、グローバル社会の中で他国や他文化に対する理解、相互尊重

や共生していく必要性に気付くことを今回の学習材「国際理解教育」というテーマを通して感じてほしい。本時では、バングラデシュの子供たちが置かれている現状を知り、その問題について考えることで、世界の出来事に目を向けるきっかけとしたい。

そのために以下の三つについて、手立てを考えた。

①バングラデシュについて知ることで、他国に興味・関心を持つきっかけとしたい。そのために 自国とバングラデシュとの違いを知り、フォトランゲージ（写真やイラストから、そこに込められた意味や思いなどについてさまざまな角度から推察する学習活動の一つ）を通して、バングラデシュの子供の置かれている現状とその背景を考えさせる。

②協働的に学ぶことで、同じ問題に対する考えの違いを知り、自分なりの最適解を更新できるようにしていきたい。捉え方や考え方は無数にあることやそれらを知ったり、考えたりすることで価値観の再構築ができるようにしたい。

③本時の振り返りとして、ミライシードのオクリンクプラス機能を活用し、学級全体で共有したい。どんな意見や回答が多いかを単語で確認したり（ワードクラウド機能）、多様な考えを可視化し、友だちの意見や理解を聞いたりすることで、自分の学びを広げるとともに、相互に学び合うことができるようにしたい。

05 単元計画（全 15 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 ～ 3 本時	世界の国について知ろう	他国に住む人々の暮らしや文化を知ること、国際的な知見を広げたり、自国のよさを再認識したりし、文化や考え方について伝え合うことで互いの「違い」を理解し、その「違い」を含めて他国を尊重することができる。	・オリエンテーション ・「外国と自分たちの結びつき」ってなんだろう ・「バングラデシュ」ってどんな国？ ・「エジプト」ってどんな国？ ・海外で暮らしたことのある友達から聞いてみよう
	資料・教材など	バングラデシュの写真など	
4 ～ 13	エジプトで暮らす子どもたちと交流して、異文化・多文化への理解を深めよう	友だちや他国に住む子供たちと協働的に学びながら、異文化や違いを認め合い、地球で生きる仲間として共に生きていこうとすることができる。	・エジプトの友達に日本の良さを伝えよう（オンライン交流①） ・エジプトの友達から聞いたことと日本との共通点や疑問をまとめよう ・日本の暮らしや音楽など、自分たちの身近な生活について伝えたいことをまとめよう（オンライン交流②） ・宗教や国民性など、日本のパーソナルな文化について伝えたいことをまとめよう（オンライン交流③）

			・互いの国の話を聞いてどう感じたか、またそれを踏まえて今後どう生きていくのか伝えたいことをまとめよう（オンライン交流④）
	資料・教材など		
14 ～ 15	伝えよう ～未来に向かってできること～	他国で起きている諸問題に対し、自己の課題として捉える視点を持つことで、「地球市民」の一員として自己の存在を理解し、自分事として考えられる意欲・態度を育てるとともに、価値観の再構築を繰り返すことで、自分なりの最適解を更新し続けようとする。	・将来の国際社会がこうなっていたら…という視点でドリームマップを作ろう ・自分たちが知った世界との関わりや考えを発信しよう ・多文化共生社会について、考えをまとめよう
	資料・教材など		

06 本時の展開（2 時間目）

本時のねらい：

○バングラデシュの子供の現状を知り、それについて考えることができる。【思考・判断・表現】

○バングラデシュの暮らしや文化を通して、国際的な視野を持ち、異文化を理解し、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていることについて理解する。 【知識・技能】

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5分)	1 バングラディッシュについて知る ・バングラデシュに行けなかった教員の体験談を聞く。 ・識字率に着目させることで、日本との教育の違いを意識させる。 ・バングラディッシュの国土の面積、人口、言語について、自国との違いを知る。	◎バングラデシュの国旗から興味・関心を持てるようにする。 ◎自国とバングラデシュを比較することで、その違いからバングラデシュの特徴を探ることができるようにする。
展開 (10分)	2 フォトランゲージ ・町の様子を見ることで、人口の多さや人口密度世界一の現状を知る。 ・ストリートチルドレンの写真を見て、気付いたことや感じたことを発表する。 <予想される児童の反応> ・ごみを片付けている？集めている？ ・車を直している。仕事？手伝い？ ・服を着ていない。 ・裸足で歩いている。 ・袋を持って、何かを探している。	◎ストリートチルドレン(340万人)、児童労働に従事している(170万人)など数値でも捉えることができるようする。 ◎日本の小学生の人数(約605万人)と比較して考えることができるようにする。 ◎自分たちと同じ子供が今この時にこのような生

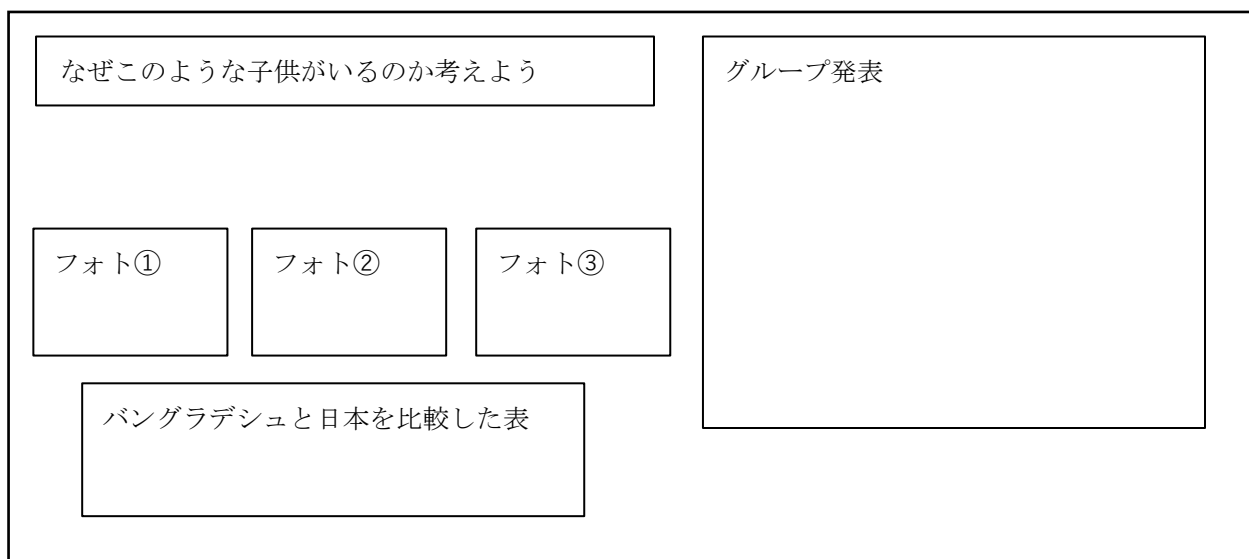
20 分	・みんな勉強をしていない。学校に行っていない。 3 学習問題について考える。	活を送っている現実を知る。(これが普通の日常であること)
	なぜこのような子供がいるのだろう ・なぜストリートチルドレンや児童労働に従事している子供がいるのか、要因を考える。(個人ワーク 3 分→グループワーク) ・学級全体で共有する。 <予想される児童の反応> ・家族がいらない→戦争やデモでいなくなってしまった。 ・人が多すぎて学校に入れない→人口と学校の数が追いついていない。国にお金がなく、学校が造れない。 ・貧困→学校に行くお金がない。 ・学校に行く必要がない。(義務教育がない) ・家庭的な問題→家族に事情があって仕事ができないから代わりに働いている。 <児童から出なければ紹介する> A 貧困→家族が子供を養うのが困難。 生き延びるため。 B 家庭内の問題 →家族を養うため。家庭内暴力、虐待、薬物依存など。 C 戦争や紛争→家族がいなくなった。 D 社会的サービスの不足 →学校が足りない。遠い。社会福祉や保護施設の不足。 E 教育機会の不足 →学校に行けない。識字率の低さ。働ける職種がない。 ・日本でも同じような問題があることや、なぜこのことがこんなに大きな問題になってしまうのかにも軽く触れることで、今後の課題となるようにする。 ・SDGs の目標との格差など現実とのギャップを知る。	◎グループを回り、問題の切り口やその背景について、「なぜそうなのか?」という視点をもてるように必要に応じて助言する。 ◎※「全然思いつかない」「分からない」というのも一つの解として認める。(知らないこと=もっと知りたいという思いに繋がれば良い) ◎別グループとのつながりや比較など、必要に応じて助言、板書してまとめる。 ◎実際の社会的背景については詳しく説明せず、児童が自発的に考えられる程度に留める。
まとめ (10 分)	4 振り返りをする ・今日の授業から考えたことをオクリンクプラスで共有する。 <予想される児童の反応> ・バングラデシュのことで知らないことが多かった。他の国はどうなのかも知りたい。 ・世界で起きている現実について考えることができた。 ・実際に他国の子と話したり、関わったりしてみたい。もっと見方や考え方が変わるかもしれない。 ・他国の文化や暮らしについて興味をもつことができた。他の国はどうなのか調べたい。 ・今日考えた問題は他国の問題だけではなく、自分たちの生活や文化を見直す機会になった。	◎4 5 分前の自分とどう変化があったか、もっと知りたいことはあるかなど考える視点を助言する。 ◎本時の学びが自分たちの将来や生活に繋がったり、結び付いたりしていることに気付くようにする。

	・他国だけではなく、自国の問題についても考えていきたい。 ・児童の言葉でまとめられるようにする →世界で起こっている様々な問題について興味関心を持つこと、目を向けることを少し意識して生活してほしい。そのことが「世界を知ること」のきっかけとなる。 5 次時の活動の見通しを持つ。 ・担任が体験した JICA での活動や自国とエジプトの異文化について知る。	
--	---	--

使用する資料・教材：

- ・ Bangladesh と日本を比較するための資料（パワーポイント）
- ・ Bangladesh の写真（フォトライター用）
- ・ タブレット（オクリンクプラス）

07 板書計画



08 評価規準に基づく本時の評価方法

- ①個人ワーク（付箋への書き出し）
- ②グループワーク（交流、発言）
- ③振り返り（オクリンクプラス）

09 学校外との連携（※該当のある場合）

E J S シビエルコーム校

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

授業をする前は、Bangladesh がどこにあるのか、どんな国なのかを知らなかった児童が45分後には「その国に住む子供たちの置かれている背景」について真剣に考え、協議することができた。また、

「自国以外の文化に興味を持った」「自分も将来いろんな国へ行って、いろんな人に出会ってみたい」など積極的に国際交流・理解に取り組んでいきたいという意欲をほとんどの児童がもつことができた。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

バングラデシュの国内研修の中で一番印象に残ったのは、バングラデシュにおける児童の在り方であった。児童労働、家庭崩壊、教育機会の不足など、自分たちとは大きく違う環境に生きる同世代の子供たちが存在していること、またそれを知ることによって自国以外への興味をもつ機会を作りたいと考えた。

12 苦労した点

自分たちとは異なる国土や文化で生きる子供たちの置かれている状況について、どのように「ジブンゴト」として捉え、考えさせるか、そのための教材や提示の仕方を一番考えた。知るだけでなく、「なぜこのような問題が起きているか、自分ならどうしたいか、どういう支援を必要とするか」という視点をもつことで、どこか知らない国の問題ではなく、「ジブンゴト」として問題意識をもてるようにした。

13 改善点

- ・時間が足りなかった。もっと個人で思考する時間や、グループワークの時間を設けたかった。
- ・グループ同士での交流や共有する時間を入れたほうがより学びや考えが深まったように思う。
- ・今回バングラデシュに関する授業は1単位時間しか取れなかったため、来年度は通年で国際理解の単元計画を立て、表面的な知識だけではなく、実際にバングラデシュの方と繋がる体験をさせたい。

14 成果が出た点

- ・「違い」や「多様性」を知り、それを理解しようとするきっかけを作ることができた。自国との違いやその背景を考えることで、異文化について考えることができた。
- ・協働的に学ぶことで、自分の考えを表現したり新しいアイデアを取り入れたりしながら、価値観の再構築をすることができた。交流活動をするなかで、「世界と自分との関わり」について自分なりの考えを持つことができた。

15 自由記述

今回初めて国際理解教育の単元計画を立てた。まずは私自身が世界の諸問題を「ジブンゴト」として捉えることで、子供たちに何をどう伝えたいのかを明確にすることができた。来年度以降も毎年国際理解の単元に取り組んでいきたい。

【ジブンゴト】

全ての人の well being を目指す

【実践者】

氏 名	田中 慧	学校名	私立東洋英和女学院小学部
担当教科等	国語・算数	対象学年（人数）	5年生（80名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年11月～2月（5時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合的な学習の時間

02 単元名と単元目標

単元名：全ての人の well being を目指す

単元目標：身近な異文化、貧困に関心を持ち、自分にできることを考えて実行する。

関連する学習指導要領上の目標：

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	国際理解の視点を持って、課題を解決するために必要な知識を、自らが探究する中で身につけている。
② 思考・判断・表現	国際協力の意義を改めて思考し、自らにできることを考え、それを分かち合おうとしている。
③ 主体的に学習に取り組む態度	単元を通じて理解した事象を自分ごととしてとらえ、積極的に自らにできることを実践しようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

本校はキリスト教主義の学校であり、環境問題、被災地支援、国際協力などの社会貢献につながる活動を「小さいかご活動」と名付けられて行われている。この活動は下記の讃美歌をもとに作られたものである。

小さいかごに

訳詞 富岡正男

小さいかごに花を入れ さびしい人にあげたなら
色も香りも部屋に満ち 気持ち良い日を過ごすでしょう
あいのわざは小さくても 神の力がこもるから
闇夜のような世の中を 真昼のように照らすでしょう

しかし、そういった活動の意味や意義について子ども達が考える機会は学年が上がるほどに少なくなり、子ども達は自分たちが行った募金や支援が一体何のために、誰のために、なぜ行われているのかについて関心を持てていないのが現状である。

また、本校は女子校の私立小学校であり、子ども達は、教育方針、家庭の経済レベルが比較的近い同性のみで構成された集団である。そうした環境だからこそ、得られるよさがある一方で学校の外の社会に対する解像度が高まりづらいという問題意識もある。

以上の状況から、すでに校内で行われている活動の意義、意味を子ども達がより深く考え、世界の課題を自分ごととしてとらえ、現在の自分及び将来の自分がどのように世界の課題に貢献していけるのかの足がかりとなるよう、本単元を設定した。

〈児童/生徒観〉

全体的にお人好しで、学校の建学の精神「敬神奉仕」（神を敬い、人に奉仕する）をよく理解しており、誰かの役に立つ活動には気持ちよく参加する児童たちである。日々の礼拝や、ボランティア委員会など、日々の学校生活の中で、募金をしたり寄付をしたりといった活動は日常的なものとなっており、参加率も高い。前述の通り、募金や寄付の意義を深く考えたり、恵まれている自分たちの生活を支えている根幹にあるものを振り返ったりする習慣は乏しいが、知的好奇心は高く、積極的に自分のできることを探して取り組むエネルギーに溢れた集団でもある。

〈指導観〉

本単元を進めるにあたり、国際理解を考える上で根源的な「well being」に向き合うことを出発点とした。また、それを具体的に捉えるために身近な異文化として「フィリピン」を設定した。24年度に授業者がバングラデシュへ渡航できなかったということもあるが、本校の目と鼻の先にフィリピン大使館があり、学校周辺にフィリピン関係の店舗が多数存在すること、身近であるにも関わらずフィリピンの国内にはストリートチルドレンや絶対的貧困状態にある人が多数存在する国家であること、そして23年度に授業者が実際にフィリピンへのスタディツアーに参加し、ストリートチルドレンたちと実際に交流した経験があったために、フィリピンを題材としている。

身近なフィリピン、自分たちの知っているフィリピンは比較的豊かなイメージを持っていると思われる。子ども達は、「豊かな国」「貧しい国」を両極端なものとしてとらえている傾向があるので、フィリピンという国を学ぶうちに、状況はより複雑であることを感じさせたい。誰かの well being を考えるためには、その人たちの置かれている環境に関心を持つことの大切さに気づかせたい。

最終的には、学校から与えられた活動に受動的に参加するだけでなく、「誰のために、どんなこと」を自分たちができるのか、児童自らが選んで実践できるように働きかけたい。

05 単元計画（全 5 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 本時	Well being とは	Well being とは何かを考えさせる。	・活動のタイトルにもなっている讃美歌「小さいかごに」の歌詞から、「さみしい人」「闇夜のような世の中」とは一体何を指しているのか考えさせる。 →その人たちは本当に不幸なのか。 ・日本のジェンダーギャップ指数の低評価を受けて、自分たちは可哀想で闇の中にいると思うか問いかける。 ・Well being について →自分にとっての Well being とは？ ・全ての人の Well being を目指すためにどうすればいいか考えていくことを確認。
	資料・教材など ・ DEAR（開発教育）掲載の「ブレインストーミング」 ・ DEAR（開発教育）掲載の「ランキング」		
2	一番身近な外国～フィリピン～	身近な異文化に目を向ける。	・日本にいる外国人の国籍別ランキングを考える。個別に予想→正解と見比べる。 ・日本全体のランキングと港区のランキングを見比べて思ったことを周囲と話し合う。 ・最も身近な外国「フィリピン」について知る。（位置、言語、宗教、平均年齢など） ・六本木周辺で暮らすフィリピンの方々。（大使館、フィリピン料理のお店、フィリピン仕様の百均の存在）
	資料・教材など ・学校周辺の写真 ・キッズ外務省ホームページ		
3	貧困とは何か	フィリピンの貧困の実態を知り、「貧困」という状態の解像度をあげる。	・フィリピンの写真を見せる① →この子たちがストリートチルドレンであり、インタビューしてきた内容を伝える。 ・フィリピンの写真を見せる② →貧困地区パヤタスのこと、教室にずっとあったぬいぐるみが実はその女性たちの手作りであることを伝える。 ・絶対的貧困と相対的貧困について。 ・解決するためには何が必要なのか考える。
	資料・教材など 2023 年夏に渡航した際の写真や動画		
4	日本の果たしてきた役割	JICA や NGO の果たしてきた役割を知る。	・これまでに日本および日本人がどのようなアプローチを「貧困」に対して行ってきたのかを知る。

			・いくつか紹介する NGO のホームページを読んでペアで紹介し合う。 ・ストリートチルドレンを脱却した青年たちのことを伝える。
	資料・教材など ・JICA コンセプトムービー ・NHK for school 「NGO の役割」 など ・ホームページ（「特定非営利活動法人アイキャン」「シャプラニール」「国境なき医師団」「ACEF 認定 NPO 法人アジアキリスト教教育基金」「チャイルドファンドジャパン」 など） ・ともに歩んだ人々アイキャンの 30 年ー		
5	全ての人の Well being のために	自分たちにできることを考える。	・改めて、解決するために必要なことを考える。 ・これまでに募金や献金をした先のことを一体どのくらい知っているのか。 →それもだめではないけど・・・。 →いいことした気分だけになってないか。 ・「可哀想だから、恵まれている立場の私たちが施してあげる」という思いの何がいけないのか。
	資料・教材など ・DEAR（開発教育）掲載の「ランキング」		

06 本時の展開（1 時間目）

本時のねらい：自分にとっての well being を考える。他者の well being に関心を持つとする。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5 分)	1 小さいかご活動の名前の由来を考える。 （今までやってきたことを振り返る） T 小さいかご活動で今までどんなことをしてきたか。 T また、小さいかご活動以外には学外の誰かに向けてどんな活動をしてきたか。 T 小さいかご活動はなぜこの名前なのか。 「小さいかご」の歌を歌う。	これまでに学校で行われてきた活動を包括的に思い出せるよう助言する。
展開 (10 分)	2 「さみしい人」とは一体何を指しているのか考える。 T さみしい人とは誰なのか。 【ブレイクストーミング】 ・付箋に書いたものをグループごとのワークシートに貼る。 ・グループで共有・分かち合い ・全体に共有・分かち合い T その人たちって本当にさみしいの？そこにいる人は本当に闇夜の中にいるの？	※意識してほしいこと※ ①質より量 ②評価しない （褒めたり笑ったり否定したりしない） ③長々と説明しない

2 分	3 日本のジェンダーギャップ指数から自分たちを振り返る T 日本のジェンダーギャップ指数って 146 カ国中何位くらいだか知っているか。 T 118 位。皆さんが途上国だと思っているような国よりも遥かに下である。 T 118 位の国の女の子であるあなたたちは、女の子だから不幸なのだろうか。日本の女の子は闇夜の中にいるのだろうか。(中にはそう感じている人もいることと思う。) T みなさんが上位国の人たちから一方的に可哀想だと思われて、集めた募金とか励ましの手紙送られたら違和感がないだろうか。 T みなさんがさっき挙げた属性の人たちも同じではないだろうか。 T では私たちは「小さいかご活動」や献金や支援活動を、なぜ行っているのだろうか。私たちのやっていることの意味とは一体何か。	※ジェンダーギャップとは・・・ 男女の違いにより生じる格差。現状ほとんどの場合は、女性側が社会の中で不利な扱いを受けていることを示している。 ※ジェンダーギャップ指数とは・・・ 世界経済フォーラムが毎年公表しているもので、経済活動や 政治への参画度、教育水準、出生率や 健康寿命などから算出される、男女格差 を示す指標。日本は 2024 年度 146 カ国中 118 位。ただし教育と健康面では世界トップクラス。
3 分	4 well being について知る	well(良い) + being (状態) 「個人や社会の良い状態」 主観的ウェルビーイングと客観的ウェルビーイングの違い SDGs を超えた先の SWGs へ
15 分	5 自分にとっての well being とは【ランキング】 ・ワークシートに一人で順位づけをする。 ・グループで一つのランキングを作る。 ・グループごとに発表する。	※正解は存在せず、自分なりの答えを見つけることが重要であると伝える。 ※人によって変わってくることを伝える。
まとめ (5 分)	6 全ての人の well being を目指す。 T 全ての人が well being な状態とはとても言えない世界の状態。 T 今まで学んできたことや経験は、すべての人の well being のために活かせるだろうか。 T 表面的なデータや思い込みや義務感で支援をすることの是非をどう思うか。 ワークシートに感想を書く。	クリスマスを迎える準備をする期間に特にこのことを覚えて過ごすよう働きかける。

使用する資料・教材：パワーポイントの資料/ブレインストーミング用の模造紙、付箋/ワークシート

07 板書計画

PPT を使用

08 評価規準に基づく本時の評価方法

発言・ワークシートの記述

09 学校外との連携（※該当のある場合）

特になし

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

ジェンダーギャップ指数という観点で見ると、虐げられている日本の女の子という視点と、幸せに暮らしている自分たちの視点に大きなギャップがあるということに、衝撃を受けている児童が多かった。また、一人ひとりがよりよく生きるために必要なものが、人によって思った以上に異なるということにも衝撃を受けている様子だった。

これまで以上に、自分たちの支援活動が一体誰の何のためになっているのか考えたいというコメントが多かった。

「意外に、日本にもさびしい人がいるんだなと思った。」

「さびしい人って誰から見たさびしい人なんだろう。」

「well being はお金だけが必要なわけではない。」

「家族やお金があるから幸せとかではなく、もう一回ちゃんと見直そうと思った。」

「自分は well being なのかというのをしっかりと考えると、今までかわいそうだなと（私が）思っている人たち自身がどう感じているかはわからないということを知った」

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

今回、バングラデシュに渡航できなかったことによって、国内の異文化という観点を学ぶことができた。日本や外国に限らずどこにどんな人たちがいて、どんな思いでいるのか、もちろん全てを理解し切ることにはできないが、アンテナを立てていくことの大切さを痛感した。他の参加者の先生方と話す中で、本校の中でつながりを感じられる異文化が、経済的に発展している北側諸国に偏っているという発見もあり、その発見も授業のアイディアとして活用した。

そして、最も大きかったのは、Well being の概念についてだった。世界のために自分が何をできるのかを考えるためには、「途上国」だけを見つめるのではなく、自分自身や日本国内を見つめていくという視点が必要であること、一方的に寄付や支援をしていくだけではなく、あらゆる分野、産業のサイクルを見直す視点が必要であることを私自身が学んで、衝撃を受けた。これらを児童達に伝えていくために、単年度の授業ではなくて何年も継続して実践できるカリキュラムとして残していきたいと強く思った。

12 苦勞した点

- ・学校行事、校務分掌が立て込んでしまい、授業日をなかなか決められなかった。
- ・5 時間計画として設定したが、授業と授業の間が開いてしまい、子ども達が前時の内容を忘れないように折に触れて学級で授業内容について話した。

・この授業自体が、私個人の実践にとどまらず学校のカリキュラムとして定着させていくという目的があるため、本来はフィリピンに関係する外部団体の協力を仰ぐなどの計画もあったが、学校として今後何年間も継続が可能であるのか慎重な検討が求められ、結果的に実現しなかった。

13 改善点

- ・これまでに行なってきた実践をもう少しゆっくり振り返りたかった。授業前に思い出すための課題を出しておけば、今まで自分たちがどういう心持ちで活動に参加していたのかを子ども達を感じることができたのではないかな。
- ・「well being は大切だと思いました」「もっと支援をしたいと思いました」という表面的なコメントに対して、なぜそう感じたのか、具体的には何が必要なのか、深める活動をするべきだった。
- ・自分自身が well being な状況に置かれていない児童の心情にもう少し配慮が必要だった。

14 成果が出た点

- ・日々の募金や支援活動の意義を立ち止まって考える（「本当に役に立っているのか」「どんな意味があるのか」）視点を子ども達が得ることができたために、学級で話をしやすくなった。
- ・今回の授業とは無関係かもしれないが、数名の子ども達が国内外の状況に目を向けて、自らが見つけた NGO の活動に実際参加し始めていた。
- ・この実践自体にはまだブラッシュアップが必要な部分も大きいですが、学校全体にこの活動を定着させていく流れが生まれた。

15 自由記述

国際協力、国際理解を「きれいごと」として終わらせず、「ジブンゴト」として、子ども達にとらえてもらうために、教育者として何ができるのか、他の参加者の方々と語り合い、共に授業を作れたことが本当に貴重な経験であった。参加された先生達の勤務校は校種も地域も異なっていたが、共通していたのは、その学校にただ通っているだけでは見えてこないものに触れるチャンスを教育の力で子ども達に提供したいという志だったと思う。

報告会にて、「この授業を受けた後、果たして子どもたちは他人事から自分事になるのでしょうか」という指摘をいただいたことをきっかけに、何を持ってジブンゴトになるのか、授業そのものが授業者自身の自己満足に過ぎなかったのではないかと悩んだ。身もふたもないことを言ってしまうと、子ども達の思いや心を教師側の思った通りに動かすことはできない。それでも、子ども達が今以上に他者のことを気にかけるきっかけを持ってくれることを願って授業をしている。だからこそ、この実践でよかったのか、どこをどう変えればいいのか、今後も考え続けていくことは大切なのだと痛感した。こうした視点を得られたことを有り難く感じている。

まだ年若い児童生徒にとって、自分とは状況の違う他者のことを自分事としてとらえ、その他者のより良い人生のために貢献するということはすぐにはピンとこない話ではある。それでも、今すぐできることだけが自分にできることではなく、将来自分が選んだ人生の先で大人になった自分が、世界をよりよくするための一つの力になれる、なりたいと希望をもってもらうことが何よりものの願いである。

【つながり & 共生】

日本×バングラデシュ ～異なる正義を持つ人々と共に生きていくためには～

【実践者】

氏 名	鬼山 彩緒利	学校名	松戸市立横須賀小学校
担当教科等	道徳・総合・国語	対象学年（人数）	6年2組（33名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年10月～11月（8時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

道徳・総合・国語

02 単元名と単元目標

単元名：日本×バングラデシュ ～異なる正義を持つ人々と共に生きていくためには～

単元目標：事象を多面的に捉え、様々な立場から見た正義を想像しながら、自分の考えを持つ。

関連する学習指導要領上の目標：

国語科（道徳・総合の観点では評価は行わない）

互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすることができる。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	話の内容が明確になるように、事実と感想、意見と区別するなど、話の構成を考えることができる。
② 思考・判断・表現	互いの立場や意図を明確にしながら話し合い、考えを広げたりまとめたりしている。
③ 主体的に学習に取り組む態度	バングラデシュの学生デモを、様々な立場に立って多角的に捉えようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈児童の実態〉

本学級には授業中に「ロシア」や「北朝鮮」「中国」などの国名が出るとマイナスイメージをつぶやく児童がいる。日々の中で形成された偏見のようなものが児童に根付いているのではないかと感じている。国単位で世界を見ており、自分の暮らしを常識として捉え、そこに暮らす一人一人の声を聞こうとしていないようにも思える。自国の当たり前、自国の正義を基準に物事を判断している児童に、異国の生活は衝撃的なものである。しかし、そこに住む一人一人の声に耳を傾け、自分の当たり前や正義をもう一度

見直す機会を持ってほしい。その人の正義は立場や環境に大きく影響を受ける。異なる正義を持つ人々とどのようにつながっていくのか、じっくり考え、答えのない問いに向かって対話を続けてほしい。

〈指導観〉

本単元では、主に3つの軸を立てて授業を行う。「総合： Bangladesh の文化や現状との出会い」「道徳：国際理解教育」「国語：哲学対話」を通じて、異なる正義、異なる価値観の中から自分の考えを形成する機会、それを発信し対話する機会を設ける。3つの軸それぞれのつながりを意識しながら授業を展開する中で、児童が考えを深化させる姿を記録にとめる。

「総合： Bangladesh の文化や現状との出会い」では、児童と Bangladesh の出会いを大切にしたい。学級には、海外の国とのつながりが全くない児童が多い。そんな児童にある種強制的に異国と出会わせる本単元では、児童が初めて受ける印象を丁寧に扱う必要がある。ともすると、マイナス感情を植え付けかねない可能性を十分に理解し、日本と異なる部分ではなく、似ている部分に焦点を当て、紹介していきたい。

「道徳：国際理解教育」では、Bangladesh を皮切りに児童が世界に目を向けるような役割を担うよう展開する。児童の見方がぼんやりとした世界の国々から、Bangladesh を通じて見た現実味のある世界の国々へと深化していくようつながりを意識させたい。

「国語：哲学対話」では、児童同士の対話の方法に焦点を当てる。答えのない問いに対して、「自分の考えをもつ」こと、さらに「相手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめること」を大切にする。児童自身が自分の考えの変化を自覚できるように、毎時間ふりかえりの時間を設け自分の考えの変化を記録させるようにする。

より良い対話のためには、誰もが安心して考えを共有できる雰囲気が必要である。そのような雰囲気を作るために、毎朝全員が話す機会をつくる。何気ない質問に対する考えを答えるだけではあるが、1日1回は自分の意見を学級の全員に発信する場を設けることに価値を置いている。これは対話の雰囲気づくりとして継続して行う。

05 単元計画（全8時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	6-2 ビンゴ	転入生とのクラスビンゴを通して、友達の気づかなかった素敵などころに気づく。	・児童が質問用紙に答える。 ・ビンゴシートに友達の名前を書く。 ・質問に対する答えから誰のことか当てる。
	資料・教材など	質問用紙・ビンゴシート	
2	Bangladesh ってどんな国？	Bangladesh の文化を通じて、文化の違いによる考え方の違いを知る。	・ Bangladesh の文化を知る。 (国の概要、言語、施設、食事、生活、考え方) ・日本と異なる食べ方について、ロールプレイを通して考えを深める。 ・ Bangladesh の学校のインタビューを視聴し、自分たちと似ていること、違うことを発表し合う。 ・授業の感想と Bangladesh についてもっと知りたいことを書く。
	資料・教材など		

	・文化を紹介するパワーポイント ・エクマツトラの子どもたちの動画		
3	バングラデシュの光と影	家事使用人を取り巻く人々の話を聞き、自分の正義を振り返る。	・家事使用人について知る。 ・自分の1日と家事使用人の1日を比較する。 ・家事使用人ワークを行う。 ・本当に悪いのは誰なのか話し合う。
資料・教材など 家事使用人ワーク・シャプラインールの講義資料			
4	その情報、本当に大丈夫！？	情報を収集し活用する際に必要なことは何か考える。	・道徳教科書掲載のコロナ禍に起きた事象を題材に情報を入手する際に気をつけるべきことを話し合う。
資料・教材など 道徳教材「あなたはどうか考える？」			
5	本当に募金で世界は救えるの？	国際協力の在り方を考える。	・道徳教科書掲載の JICA 職員岸田さんの話を読む。 ・岸田さんのすごいと思うところを話し合う。 ・岸田さんはなぜ募金ではなく、遠く離れた異国の地に通い続けたのか話し合う。
資料・教材など 道徳教材「エンザロ村のかまど」			
6	悪いことって何？	常識的な「悪い」から、状況によって、または人によって判断が分かれるものに出会い、その是非を話し合う。	・絵本「すてきなさんにんぐみ」を読む。 ・悪いことはどんなことか話し合う。 ・さんにんぐみはいい人か、悪い人か考える。 ・自分の考えを発表し合う。 ・相手の意見に質問したり答えたりする。 ・ふりかえりを書く。
資料・教材など 絵本「すてきなさんにんぐみ」			
7	暴力って、そもそも何？	様々な状況の暴力を想像したり、自分の考えを伝えたりすることで、暴力に対する考えをもつ。	・事前アンケート結果を見て、自分の経験を話す。 ・ひとをぶってもいいと思うか、という問いに対して自分の考えを持つ。 ・全体で話し合う。 ・暴力はなにかの役に立つか、という問いに対して自分の考えを持つ。 ・全体で話し合う。 ・バングラデシュの学生デモについて知る。 ・学生デモはいいことか、悪いことか自分の考えを持つ。 ・黒板にネームプレートを貼り、友達の考えを知る。
資料・教材など ・事前アンケート 「君がらんぼうになるときはどんなとき？」「あばれだしそうな自分を止められる？」 ・こども哲学「暴力って、なに？」（日本版監修：重松清）			
哲学対話の実践			

グループに分かれて「〇〇とはそもそもどういうことか」というテーマで哲学対話を行う。 話し合いをする際には自分の実体験や具体例を取り入れることを意識する。 また話し合いをしているグループを観察する場を取り入れた。話し合いがどのように進み、どのように深まっていくのかに注目させ、話し合いの方法について学んだ。			
8 本時	学生デモは、いいこと？悪いこと？	学生デモの是非を語り合い、様々な立場から見た正義を想像しながら、自分の考えを持つ。	・絵本「すてきなさんにんぐみ」を読む。 ・悪いことはどんなことか話し合う。 ・さんにんぐみはいい人か、悪い人か考える。 ・自分の考えを発表し合う。 ・相手の意見に質問したり答えたりする。 ・ふりかえりを書く。
資料・教材など ・学生デモを説明するためのパワーポイント ・学生デモ取材した映像（TBS NEWS DIG「報道特集『これは学生が導いた革命です』首相が国外逃亡、、、バングラデシュの政変、現地で何が？」）			

06 本時の展開（8時間目）

本時のねらい：

学生デモの是非を語り合い、様々な立場から見た正義を想像しながら、自分の考えを持つ。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入（7分）	1 前時の振り返り ○バングラデシュの学生デモに関するパワーポイントを見て、事象の概要をつかむ。 T：さあ改めてこれを見て、みんなはどう思うかな？ バングラデシュの学生デモはいいこと？悪いこと？ C：うわあ、難しいな。どうしよう。 2 5秒の直感で問いに対する考えを書き、自分の考えに近い場所にマグネットを置く。 T：まずは5秒の直感で、自分の考えを書いてみて。 ○自分の考えをワークシートに書き込む。 T：それでは、自分の考えに一番近い位置にネームプレートを置いてみよう。まずはこの2列からいこう。 C：えー！そこか、、、。 C：迷うけどここらへんかな。 ○黒板に「いいこと」「悪いこと」の座標軸が書かれている。自分の考えに近い場所にマグネットを置く。 （悪いことが3分の2を占めると予想する。） ○級友がどのように考えているか把握する。 3 ChatGPT が作成した、学生デモに賛成派と反対派の文章を読み、自分の意見の根拠を持つ。	・前時で触れられなかった警察の対応も補足する。 ・黒板に座標軸を書き、児童自身にマグネットを置かせる。 ・文章を読み、線を引くことに時間がかかる児童が

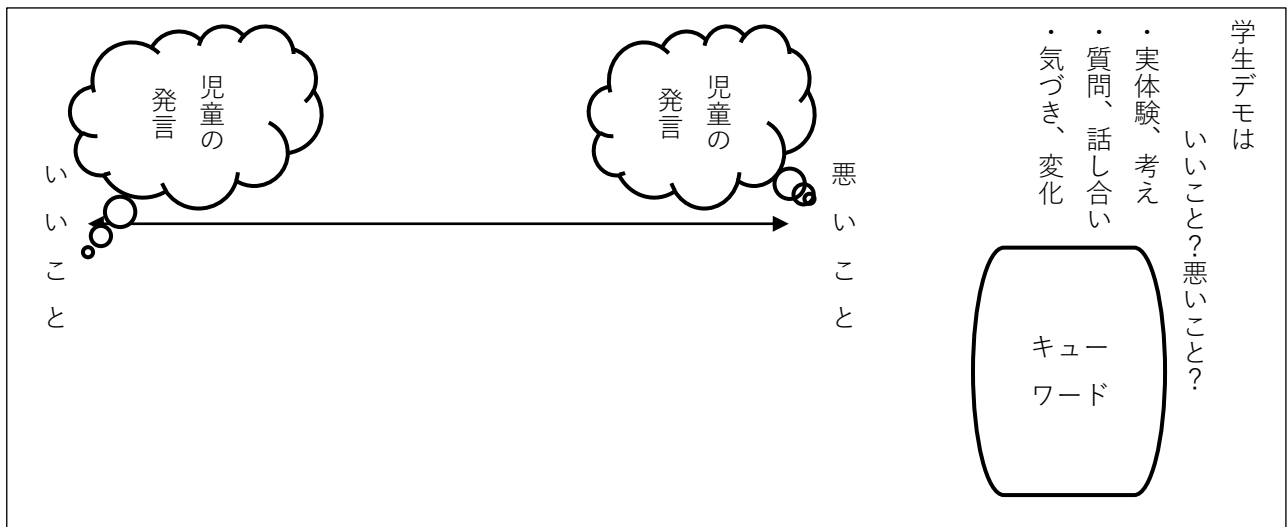
展開 (35分)	○ChatGPT の文章は教師が音読する。 ○納得・共感するところに、線を引くよう促す。 4 班で意見交換を行う。 ○班で意見を交流する。 ○話し合いを進める手順を確認する。 ① 自分の考え、具体例を話す。 ② 質問し合う。 ③ 気づきを話し合う。 ○哲学対話で使用した“キューワード”を使うように促す。 「たとえば」「本当に?」「たしかに」「だけど」「私も」「他にも」「立場を変えると」 ○立場を変える視点を提示する。 T: 班の中でいいことだと思う人? 悪いことだと思う人? もし、全員が同じ立場だったらどうするのだったけ? C: 立場を変える! T: そうそう。今回はどうやって立場を変えるの? C: いいことだと思う人と、悪いことだと思う人。 T: そうだね。そしてもう一つ、わかるかな～。みんなはどこに住んでいるの? C: 日本! C: そうか。でも今回はバングラデシュの学生デモだから。 C: バングラデシュの人の立場! 5 全体で意見を交流する。 ○班で話し合った内容、悩んだ内容を全体で共有する。 T: 班で話し合う中で、何か悩んだことある? (いいこと) C: 暴力はダメってわかっているけど、いい国にするためには仕方がなかったのかもしれないし。 C: 裁判所は権力があるから、市民がお願いしても、何もしてくれない可能性だってあるじゃん。 (悪いこと) C: 実際に関係のない人が亡くなっている。 C: もしこれが解決されたとしても、バングラデシュの今後の未来が不安だと思う。 C: 暴力で解決される社会って怖くない? (その他) C: でもどうしたらよかったのかな。 C: 暴力でなければいけなかったのかな。 6 現地の人々の声を聞く。 ○「被害者の声」「学生の声」「市民の声」をまとめた映像を見せる。 ○どんな言葉が印象に残ったか問う。	いるため、十分に時間を取る。 ・ キューワードを使っている児童を全体場で褒める。 ・ 児童の発言を板書する際には、内容を簡潔にまとめる。 ・ 考えの違いがわかるように板書する。 ・ 児童の発言を交通整理しながら、話し合いを深める問いかけをする。 「本当に他のやりかたはあったのかな」 「もし、自分が学生だったらどう感じる？」
---------------------	---	---

まとめ (3分)	C：学生ボランティア、自由、平和、交通整理、みかじめ料 C：市民は学生デモに感謝しているんだ。 C：学生だけでなく、様々な人が苦しんでいた。 C：教授まで学生デモをサポートしていたなんて。 7 現地の様々な人の声を聞いた上でもう一度自分の意見とその根拠を持つ。 ○ワークシートに考えを書く。 (いいこと) C：平等な社会でなかったら、自分も参加してしまうかもしれない。 C：自分たちが生きていくためには必要なことでもある。 (悪いこと) C：不平等な社会はだめだけど、暴力で何も解決されない。 C：言葉で話し合うのが一番いい。 C：もしこれをよいとしたら、戦争だってよいことになってしまう。 (その他) C：暴力は絶対にダメだけど、正義のためなら良いのかもしれない。 C：正義のためなら人が亡くなってもいいのかな。 8 班で意見交換を行う。 9 全体で意見を交流する。 C：暴力はダメだし、人を傷つけていることは事実。だけど、学生たちが絶対に悪い、というわけではないような気がした。 C：初めは「なんでこんなことするんだろう。」って思っていたけど、それぞれの正義があって、理由があって暴力を使っているのだと思った。 C：暴力は時と場合によって意味を持つのかもしれない。でも、今後のバングラデシュは平和になるのだろうか。 10 ふりかえりを行う。 ○ふりかえりを紹介する。 C：暴力は絶対にダメ、何の役にも立たないと考えていたが、それぞれの考えがあり、立場があることが分かった。 C：世界でも戦争やデモが起きているが、なぜそれが起きているのか考えていきたい。 C：今後のバングラデシュがどう変わっていくのか、気になった。	・理由を書くことが難しい児童には、対話を通して意見を引き出す。 ・今回話し合った事象が、バングラデシュに限ることではないこと、これから世界を様々な立場で見てほしいことを最後に伝える。
---------------------	--	---

使用する資料・教材：

- ・学生デモを説明するためのパワーポイント
- ・学生デモを取材した映像（TBS NEWS DIG「報道特集『これは学生が導いた革命です』首相が国外逃亡、、、バングラデシュの政変、現地で何が？」）
- ・ワークシート

07 板書計画



08 評価規準に基づく本時の評価方法

行動観察（授業中の発言）、ワークシート記録観察

09 学校外との連携（※該当のある場合）

特になし

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

【第1時】

今まで知らなかった一面を知ることができた、転入生のことをもっと知りたい、等の感想があった。

【第2時】

・日本とは違う文化だけど勉強があまり好きではない子や、電車がある場面では似ているところもあった。
・バングラデシュの人たちは、やさしくて人のために国をよくしたり、サッカー選手を目指している人もいたのすごいいいと思いました。

・何時間も遅れていいってことがいいなと思った。

・（R児）前から外国には少し抵抗感があったけど、意外にみんなやさしいことがわかった。

↑外国に対する抵抗感の強いR児の学びの軌跡を見つめていこうと考えた。

【第3時】

・こんなことが世界でおきているなんておどろいた。この状況を救ってあげないとかわいそう。でもどうすればいいのかと思った。

・なんでそんな制度をつくったのか気になる。他の国にも制度があるのか気になった。

・今回でいうルビナ（家事使用人として出されようとしている少女）の主張があまり出なかった気がする。その人の意見が大事だと思った。

・この家事使用人の問題を解決（完全に）するのは不可能だと思った。この問題は世界でも起こっていると思った。

・まだ世界にはバングラデシュの家事使用人のように働かされている子どもがいることが分かった。改善するには難しいけれど取り組めることはあると思う。

・日本にはそういう制度がないのが当たり前だけど、自分たちが知らないところで当たり前じゃないことが当たり前のように起きている。正直、先生がその人になりきってと言ったけど、なりたくてもなりきれなかった。一人でも多くそういう人を助けたい。

・(R児) 日本人はバングラや他の国のようなことはあまりないけど、ないからこそそういうひとたちがいると考えて、ごはんを食べれない人もいるから、なるべく残さないとか、常に生活が苦しいひとがいると考えながら、私たちも生活しなくちゃならないと思った。

【第5時】

・(R児) 今できることはあまりないし、岸田さんみたいに手助けすることはむずかしいけどごはんをなるべくのこさない、せつやく、せつでんをしっかりやりたい。(しょうじきむずかしい)

授業中の発言でも「結局これしかできない。」と、ややあきらめの感情を口にしていた。

【外国語】

本単元では、おすすめの国を紹介しようというゴールのもと、児童自身で国を選択した。児童に身近なアメリカや韓国に偏らないような工夫をしたことで、ケニア、マレーシア、タイ、ベリー、ブルガリア、カンボジアなど、児童が選んだ国は多岐にわたった。

・R児はベルギーを選択。理由はチョコレートが好きだから。その視点からベルギーの建物やお土産に着目していたが、日本と異なる文化に触れる度合いは浅かったように思える。

【第7時】

・(R児) フリーダムファイターがまた復活して不平等になったけどまだ関係のない人もいるわけだから、関係のない1000人の人がなくなってしまったから、それで殺しちゃうのはあんまよくないと思うから。

バングラデシュの学生側の立場を考えつつも、事実を見つめ自分の考えを形成している。少しずつ、両者の立場の気持ちを考えられるようになってきたように思う。

【第8時】

・全てが悪いとは決めつけてはいけない。客観的に見るのではなく内面を見る。

・暴力は暴力だが、政治を変えるため、国を変えるため、市民を守るための暴力は悪いことと目先で決めつけられるものではないと思った。

・暴力についてはまだ深められそうだし、今は一つの国の話をしているけど、国際問題は世界の中でたくさん起きているから、一人一人の意見を変えて解決したいと思いました。

・他の国のこともちゃんと考えられる人になりたいと思った。

・とりまバングラの人みんなが幸せになってほしいと思った。

・暴力はたしかに悪いこと。だけどそれをするにも深い理由がある。バングラの学生デモも1000人なくなっているから悪いけれど、そうなっちゃったのは国がフリーダムファイターを復活させたから。暴力がおこる理由も考えようと思った。

・初めはすぐに悪いことだと思っていたけど、立場を変えて、もし日本が月収が少なくて不平等なことがおきてたら、自分も学生デモに参加していたかもしれないし、むずかしいです。

・(R児) 最初は「暴力はしょうじきよくはない」と思っていたけど、それにはちゃんと暴力をしてしまった背景がきっとあるはずだから、そんな人たちとしっかり向き合えるようになりたい。

単元当初は外国に対する抵抗感を持っていたR児だが、「そんな人たちとしっかり向き合えるようになりたい。」と感想をもつようになった。R児がどのように他者に対して向き合っていくのか、今後も見守っていきたいと思う。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

- ・海を越えた国々でも人はそれほど変わらないということ
- ・当たり前から外れた事象に出会った時の考え方
- ・自分の世界のとらえ方は、必ずしも相手と同じではないということ

12 苦労した点

- ・単元構築（実際に現地を見ていないため）・他教科との関連性

13 改善点

- ・本時展開計画5の全体交流の際に、児童から「暴力ではない他のやり方で解決すべきだった。」という発言があった。この発言が嬉しかったのだが、時間の都合もあり教師から「他の方法は果たしてあったのか。」と問いかけてしまった。協議会のご指摘通り、ここは児童から出てほしい発言であった。その発言を待つ忍耐が必要であったと痛感する。
- ・学生デモと児童との出会わせ方については未だ正解がわからない。本単元では、たくさんの犠牲者が出たことの事実を先に伝え、その後に主導している学生たちや学生デモに感謝をしている市民の声を紹介した。この順番によって児童の思考や意見が構成されたといっても過言ではない。今回とは別に、被害者、学生たち、市民の声を同時に紹介していたら児童の考えはどのようになっていたのだろうか。同時に入った立場の異なる人の意見を、どのように処理していったのか気になるところである。

14 成果が出た点

- ・児童が世界の事象を多面的に見ようとしている。

バングラデシュの授業後の子ども達の感想には「今は一つの国の話をしているけど、国際問題は世界の中でたくさん起きているから、一人一人の意識を変えて解決したい。」「全てが悪いとは決めつけてはいけない。客観的に見るのではなく内面を見る」「デモを行うには必ず理由があるので、その理由を探したらいい。」「他の国のこともちゃんと考えられる人になりたい。」などの言葉があった。常識や一部の事象にとらわれずに、世界に視野を広げ今後もその背景を考え続けてほしい。

- ・児童が自分の考えを持ち、少人数の中でそれを発信できるようになった。

哲学対話や事象の是非を話し合う際には、「自分の考えを持つ」「少人数で話し合う」「全体で悩みを共有する」「自分の考えをふりかえる」という流れを意識した。瞬発的に考えを話し合うのではなく、自分の考えを持つ時間を十分に設けることで、児童は余裕をもって話し合いに参加することができた。グループのメンバーを何度も変えて話し合ったため、どんな人と同じグループになっても自分の考えを発信できるようになった。

- ・対話を通して自分の考えの変化を自覚できるようになった。

対話の後には、必ず自分の考えをもう一度振り返る時間を設けた。その結果、自分の考えの深まりや変化を自覚できるようになった。今後も自分の考えの正しさを疑い、常に再構築できるようになってほしい。

15 自由記述

児童はバングラデシュの政変から世界で行使されている暴力の意味や立場の異なる人が見る世界について多面的に考えようとしている。では、学級や自分に関する問題はどのように捉えているだろうか。自分事になったとたんに、利己的に考えていないだろうか。この問いは教師である己にも自問し続けていきたいものである。その捉え方に刺激を与えるのは、きっと対話なのだと思う。となりにいるあの子は、今何を考えていて、何を願っているのか、対話をし続けてようやく、それでも微かにわかっていくのだと思う。

異なる価値観、異なる正義を持つ他者との生活の中で起こる問題について、今後も対話を通して様々な視点から向き合い、考えを再構築できる児童を育てていきたい

【つながり & 共生】

ふれあい発見！みんななかま～グローバル編～ SDGs って何だろう？

【実践者】

氏 名	田中 利奈	学校名	伊勢崎市立赤堀南小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	4年3クラス（26,25,26名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年10月～12月（11時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合・道徳・社会

02 単元名と単元目標

単元名：ふれあい発見！みんななかま～グローバル編～ SDGs って何だろう？

単元目標：日本と他国の共通点や相違点を考えながら、他国の人々や文化に関心を持ち、多様性を尊重する態度を養うとともに、日本と他国の現状をジブンゴトとして寄り添い、「こうなったらいいな」を考えるを通して、共に生きることの大切さについて自覚するための素地を養う。

関連する学習指導要領上の目標：

- ・総合的な学習の時間：（1）探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- ・特別の教科 道徳：18 国際理解、国際親善 他国の人々や文化に親しみ、関心をもつこと。
- ・社会科：（5）イ（ア）特色ある地域の位置や自然環境、人々の活動や産業の歴史的背景、人々の協力関係などに着目して、地域の様子を捉え、それらの特色を考え、表現すること。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	絵や写真、グラフなどの具体的資料を通して、バングラデシュを例に、日本と世界の国々を比較して必要な情報を読み取り、特色や相互の関連、共通点、相違点について理解している。
② 思考・判断・表現	バングラデシュを例とした世界の国々と日本の特色や、相互の関連、共通点、相違点を考え、友達と話し合うことを通して、国際社会に見られる課題を把握し、ジブンゴトとして考えた「こうなったらいいな」をSDGsに掲げられた目標と結び付けて捉えている。
③ 主体的に学習に取り組む態度	国際社会について、他国の人々や文化に親しみ、関心を持ち、多様性を尊重するとともに、グローバルな視点でよりよい社会を考え、主体的・協働的に学習の問題を粘り強く解決しようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

本単元設定の理由は、5年生の総合的な学習の時間に行っているテーマであるSDGsについて、その素地となる学びと、国際社会についての児童の思いの蓄積を図りたいと思ったからである。今、どんなことが世界で起こっているのか、また、他国と日本との関連、共通点や相違点は何かを学習することで、日本と他国は別のものであるという認識ではなく、「つながり」を感じ、グローバルな視点で物事を見る機会を与えることができると考える。本単元では、大きく「情勢」「国民性・食文化」「災害」「子どもたち」をテーマに、日本と他国を比較しながら共通点や相違点を考えていく。その中で、異文化を認め、多様性を尊重することの大切さや、ジブンゴトとして課題解決を進めることの大切さに気づき、「かわいそう」という同情から共感する態度への変容を図っていききたい。その中で見出した地球上の課題について、「こうなったらいいな」を考えることで、世界の人々に寄り添い、一地球市民として全体の幸せを願い、SDGsに掲げられた目標を意識して生活することに繋げていきたい。

〈児童/生徒観〉

七夕の願い事に、家族や周りの幸せを願った児童が多かった。自分だけでなく、周囲の幸せを考えることもできるようになってきているので、世界の人々にも関心を向け、思いやる気持ちや、仲間意識をもつことができるであろう。しかし、まだグローバルな視点で物事を考えている児童はいないに等しい。一人一人の行動が世界の問題に繋がっていることがあることも意識していない。おそらく、世界には飢餓に苦しみ亡くなる人がいることや、十分な教育が受けられない子がいることなど、なんとなく知っている児童もいるだろう。そのなんとなくの感覚を少しでも実感として受け止め、思いを寄せることができるようにしたい。

また、学習に対してあまり意欲をもつことができない児童が数名いる。自分が「できない」ことに悲観的になってしまっている。そういった児童を含め、一人では解決できない課題や、一人では考えを広げられない課題について、友達と対話することで新たな考えや納得できる考えにたどり着けることを楽しみ、解決していく力を身に付けてほしい。

〈指導観〉

世界の国々の一つの例として、バングラデシュを主に取り扱う。児童が「もっと違う国もあるかもしれない」「他の国ではどうだろう。」という視点をもつようにして授業を進めていきたい。以下に、本単元を3つの段階に分けて示す。

「つかむ」段階では、「せかいのひとびと」という絵本を元に、世界の異文化に触れ、日本との共通点や相違点を考えていき、本単元の概要を掴む。SDGsの目標を前提に地球の課題を見出すのではなく、解決しなければならない課題があるから立てられた目標であるSDGsにたどり着くことができるように、はじめからSDGsは取り扱わない。

「追究する」段階では、「情勢」「国民性・食文化」「災害」「子どもたち」をテーマに、フォトランゲージを主な手立てとして展開する。写真の風景や人々の様子から、世界の現状について協働的に想像を膨らませ、課題を掴んでいく。災害の課題について議論する場面では知識構成型ジグソー法も用いて、児童が資料の内容をジブンゴトとして捉え、解決方法を探ることができるようにする。この段階の展開を、情勢（政治）、食文化（宗教）、災害（自然）、子どもたち（人間）の順にすることで、段々と子どもたち自身の身近なものに近づけ、他国の人々に、ジブンゴトとして寄り添い、考えることができるようにしたい。「かわいそう」という同情の気持ちが生まれることも受け入れ、さらに、その先の共感へと授業を展開していきたい。

「まとめる」段階では、児童が世界について「こうなったらいいな」と考えた課題と、SDGsの17目標を結び付けて捉えていく。各課題については、これまで各時間の振り返りとして書き留めてきた「外国」と「日本」について気付いたことのカードを用いる。

05 単元計画（全11時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
つかむ 1	世界と日本（自分）の共通点・相違点	世界の人々の様子、特徴などを知り関心を持ち、日本との共通点や相違点に気付くことができる。	・「せかいのひとびと」の読み聞かせを聞く。 ・人種、衣食住、性格、文化、言語などについて、挿絵を見たり文章を読み取ったりしたことから日本との共通点や相違点を話し合う。
	資料・教材など 絵本「せかいのひとびと」ピーター・スピアー		
追究する 2	多面的に捉えたいバングラデシュのデモ	バングラデシュで起きたデモについて、学生たちや犠牲になった人々など様々な立場から、一つのできごと「デモ」について考え、物事を多面的に捉えることの大切さに気付くことができる。	・学生たちがデモを起こした理由、バングラデシュの就職についての現状、デモがもたらした犠牲者と困難な状況を捉え、感じたことを共有する。 ・デモ後の学生たちの働きや、学生が新たな政権の一員となり貢献していこうとしている姿と、日本の若年層の投票率の低さを比較して感じたことを共有する。
	資料・教材など バングラデシュで起こったデモの情報		
3	バングラデシュと日本の関係、国民性、食文化	国によって食べ方が異なることを知り、違いを互いに認め合い、尊重して暮らしていくことの大切さに気付くことができる。	・バングラデシュと日本の関係を捉える。 ・日本で生活しているバングラデシュ人を知り、日本で暮らす外国人の人数を把握する。 ・バングラデシュ、ネパールを例にした手で食べる国と日本を比較し、互いに不快に感じるところを挙げてロールプレイをする。 ・異なる文化をもつ人同士が互いに気持ちよく生活するにはどうしたらよいか考える。
	資料・教材など ・日本で暮らすバングラデシュ人の方がお話してくださったときのスライド ・2018年度参加者 松本文美子先生の授業		
4	バングラデシュと日本の自然災害と気候変動 被害を少なくするため にどうするか	気候変動による被害を少なくするために必要な対策について考えるを通して、様々な支援・対策が必要であることに気付くことができる。	<フォトランゲージ> ・バングラデシュの洪水の様子の写真を見て、どんな様子なのか、人々の暮らしはどうなっているかなど想像する。 <ジグソー法> ・バングラデシュに必要と考えられる気候変動への4つの対策から、一番大切なものを選ぶ。 ・気候変動によるバングラデシュの被害状況を4観点に分け、それぞれについて、人々が被る困難さについて話し合う。（エキスパート活動）

			・4つの観点の被害状況から、再度一番大切な対策について考える。
	資料・教材など JICA バングラデシュ現地スタッフの話		
5	世界の子どもたちと自分	バングラデシュの子どもたちと自分の共通点や相違点を捉えたり、絵本を通して、世界の子どもたちの「今」を想像したりして、世界中に、今同じ時を生活している子どもたちがいることを意識することができる。	<フォトランゲージ> ・エクマットラの子どもたちの写真を見て、気付いたことを共有する。 ・エクマットラの子どもたちとオンラインで繋がった時の映像を見て、流行っているもの・楽しいこと・勉強の好き嫌いについて、自分と比較する。 ・「ぼくがラーメンたべてるとき」を読み、世界の子どもたちの現状を想像する。
	資料・教材など ・エクマットラとのオンライン映像 ・絵本「ぼくがラーメンたべてるとき」		
6 本時	児童労働を通して世界の子どもたちに寄り添う	フォトランゲージで想像を広げながら、世界には、児童労働に従事する子どもたちがいることを知り、彼らが仕事をしなくてもよかったら本当にしたいことは何か、自分の生活との相違点を考えながら話し合うことを通して、児童労働に従事する子どもたちの気持ちに寄り添うことができる。	<フォトランゲージ> ・ストリートチルドレン、児童労働、家事使用人を表す写真から気付いたことを共有する。 ・家事使用人ルビナさんの生活について、動画と生活時間のグラフを見て知る。 ・ルビナさんが、仕事をしなくてもよかったら一番したいことは何か考える。 ・前時で出会ったエクマットラの子たちが元ストリートチルドレンだったことを知り、次時では彼らの生活が変化した理由を探ることを意識する。
	資料・教材など ・シャプラニール 研修時スライド、ダウンロード教材、提供動画 ・エクマットラ 研修時オンライン風景		
7	エクマットラやシャプラニールの取り組み	世界の子どもたちを救うために力を尽くす人々がいることを知り、国際協力について考えることができる。	・「夢をもてない」と考えている家事使用人の子の記事を読んだ後、それでも今は夢をもっているシャプラニール支援センターの子たちや、夢を語るエクマットラの子たちの映像を見て、どうして夢をもてるようになったのか考える。 ・エクマットラとシャプラニールの取り組みを知る。 ・国際協力について考える。
	資料・教材など ・シャプラニール 研修時スライド、ダウンロード教材、提供動画 ・エクマットラ 研修時オンライン映像		
8	世界のプラス・マイナス	これまでの授業を振り返り、学んだことを、世	・これまでの授業で振り返りとして書いてきた外国と日本を比較して気付いたことをまとめ

		界のプラス・マイナスの面に仲間分けすることを通して、解決しなければならない課題があることに気付くことができる。	たカードを、プラスの面とマイナスの面に仲間分けする。
	資料・教材など		
9	世界が「こうなったらいいな」	世界が「こうなったらいいな」を考え、SDGsとの関連を意識することができる。	・前時でまとめたマイナスの面について、「こうなったらいいな」を考える。 ・その考えたことがSDGsの目標に繋がることを意識する。
	資料・教材など		
10	SDGs 17 目標	SDGs の 17 の目標が何を狙っているのか理解することができる。	・「ひろがれいろとりどり・SDGs 覚え歌」の曲の歌詞について、キーワードや想像したことを書き出す。
	資料・教材など ひろがれいろとりどり・SDGs 覚え歌		
11	世界の課題と SDGs の関連	それぞれの課題に関連する SDGs の目標を結び付けることを通して、世界で解決していることに気付くことができる。	・第8時でまとめたマイナス面と第9時で書いた「こうなったらいいな」に、SDGsの目標を結び付ける。 ・一つの課題に複数の目標が結び付くことを確認し、SDGsについて気付いたことを共有する。 ・この単元を勉強する前の自分と今の自分の違いを振り返り、自分にできることを考える。
	資料・教材など SDGs シール		

06 本時の展開（6 時間目）

本時のねらい：児童労働に従事する子どもたちが仕事をしなくてもよかったら、一番したいことは何か、自分の生活との相違点を考えながら話し合うことを通して、児童労働に従事する子どもたちの気持ちに寄り添うことができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入（15分）	○児童労働の現状を知る。 【フォトランゲージ】 ・ストリートチルドレン、児童労働、家事使用人を表す写真から気付いたことや疑問を共有する。 T:何歳？何をしている？どこにいる？この子たちの生活の様子は？家族は？写真の人や物から想像してみよう。 写真A： ストリートチルドレン（児童労働） C: 何か運んでいる。ごみかな？ C: 子どもたちしかないのかな？	・全体共有の際に、全児童が全ての写真を把握しておけるように、3種類の写真を2グループずつ分担して検討する時間と、気になる写真を見に行く時間を設ける。

	C: 貧しそう。 写真B: 家事使用人(ルビナ12才) C: 洗濯物をしている。 C: トイレ掃除をしている。 C: お手伝いかな? 写真C: 家事使用人(ショリファ9才) C: 食事を運んでいる。 C: 手伝いをしている。 T: この3枚の写真の子どもたちの共通点は何でしょう。 C: お手伝い?仕事? ○ストリートチルドレン, 児童労働, 家事使用人という言葉と, その人数を知る。	・より多くの考えを引き出したり, 想像を膨らませたりすることができるように, グループや全体で意見を出し合うときは, 問い返しをする。 ・人数の多さを実感するために, 漢数字を用いずに表示する。
展開 (5分)	めあて: 仕事をしなければならない世界の友達の気持ちを考えよう。 ○家事使用人ルビナさんについて知る。 ・ルビナさんの生活が分かる動画を視聴し, 思ったことを共有する。(ペア) ・ルビナさんの1日の過ごし方を知る。 C: 学校に行っていない。 C: こんなに長い時間働くの? T: みんなはこの生活をしたいと思う? C: したくない。大変そう。辛そう。	
10分	○ルビナさんのしたいことを考える。(個→ペア, グループ) T: ルビナさんが, 仕事をしなくてもよかったら, 一番したいことは何だと思いますか。 C: 学校に通う。勉強する。 C: 友達と遊ぶ。 C: もっと家族に会う。	・全児童が仕事の内容を把握できるように, ワークシート上で, 仕事の部分の表記を簡単な言葉にして示す。 ・ルビナさんに, より寄り添った考えをもつことができるように, 「一番」を考えて焦点化する。
まとめ (10分)	○振り返り(今日の授業で考えたこと) C: 仕事をしている子がいて大変だと思った。 C: 世界中の子どもたちが仕事をしなくて済むようになるとよい。 C: 学校に行って, 友達をたくさんつくってほしい。 ○前時で出会ったエクマットラの子たちの笑顔の写真を見る。 T: 実は, この子たちも元ストリートチルドレン。どうして笑顔でいられるのだろう。	・次時で, シャプラニール支援センターやエクマットラの取り組みを知ることにつなげることができるようにする。

使用する資料・教材:

- ・シャプラニール 研修スライド, ダウンロード教材, 提供動画
- ・エクマットラ 研修時オンライン風景
- ・児童労働ダウンロード写真

07 板書計画



08 評価規準に基づく本時の評価方法

家事使用人のルビナさんが仕事をしなくてもよかったら一番したいことは何かを考える場面において、ルビナさんの生活と自分の生活を比較し、相違点に着目しながら、ルビナさんの気持ちに寄り添い、一番したいと思うことについて考えている。

09 学校外との連携（※該当のある場合）

なし

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

★児童の振り返りより

文化について

- ・手で食べることなど、認め合うことがとてもとても大切だと思った。
- ・手で食べることを最初はきたないなと思ったけれど、私たちもパンやお菓子などを手で食べることを思いつき、バングラデシュの人も日本人も同じだと知ってびっくりした。
- ・手で食べるのがきたないと思っていたけど、バングラデシュでは普通なことに気が付いた。

世界の子どもたちについて

- ・ルビナさん（授業で扱った家事使用人をしている少女）も夢をもってほしい。バングラデシュの子どもは日本の子どもより忙しいんだなと思った。
- ・学校に行って友達をいっぱいつくってほしい。
- ・ルビナさんや、他の家事使用人として働いている人に自由をあげてほしい。
- ・お金をあげたい。仕事ばかりでかわいそう。
- ・子どもが仕事をするのがかわいそうだなと思った。学校に行けなくてかわいそう。
- ・外国では児童労働があるのが不平等だから助け合いが必要。
- ・子どもたちはお金がないから我慢して仕事をしている。大変なのになぜやめないのかな。
- ・児童労働でやりたいことのできない子どもが多く子どもはしょうがなくやっていて、ちゃんとした暮らしをしたいと思っている。

だんだんと世界に目を向けて考えるように

- ・日本は何もできないのかな。今、勉強している間にもいろんなことが起きているのかな。

- ・楽しく生きているところがあれば、今も死にそうなところもあるから、その子の分まで楽しく生きて、もしできたらその子に募金などをして助けてあげたいと思った。
- ・自分たちが平和に暮らしているとき、他の国の人は平和じゃないかもしれないと思った。
- ・自分が楽しんでいるときも誰かが苦しんでいるのかもしれない。
- ・違う国でも嬉しいこともあるし、悲しいこともある。地球は一つだから戦争をしないで助け合うことが大事だと思う。
- ・豊かな国もあれば、豊かじゃない国もある。
- ・世界で貧しい人はいっぱいいるから、みんな楽で自由な生活を一日でもいいから楽しませたい。
- ・自分がしていることは他の人は当たり前にはできない人もいるからその人の分、自分はありがたみをもってこれから生活する。
- ・できるなら世界中の子どもたちみんなを助けてあげたい。

再び自国に目を向けて考えることも

- ・もちろん外国に募金をするのも大事だけど、その他にも日本にも高齢者が困っているときにはすぐに助けるし募金をする。

世界の子どもたちを救おうと行動する日本人を知って

- ・将来できるだけ支援してあげたい。
- ・ちがう学校の友達に伝える。
- ・自分が支援してあげたり、お金を貸してあげたり、みんなで貧しい暮らしの子どもたちを国で支えたいと思った。
- ・かわいそうだからこのままではダメだと思う人が多いと思った。
- ・違う国のことを思っただけで行動できるのはすごい。
- ・渡辺さん（エクマットラ）みたいにバングラデシュやいろんな国を救う人がたくさんいてほしい。

単元を経て

- ・SDGsについてもっと知りたくなった。
- ・グローバルに興味がわいてきた。他の国の天気や生活はどうなっているのか知りたくなった。
- ・バングラデシュの大変なところを知って、もっと気になってきた。
- ・日本やバングラデシュ以外の国では、どんな災害が起きているのか知りたくなった。
- ・バングラデシュみたいに他の国の人もとても困っているから普段の生活でそのことを思い出しているくらい気を付けるようになった。
- ・今の自分は、バングラデシュのためにこんなことができるなと考えたりすることができるから、前より苦しい思いをしている子の気持ちが分かったと思う。
- ・今の自分がどれだけ幸せに暮らせているのかが分かった。
- ・もっと困っている子どもがいなくなるように施設をつくったりしてほしい。こんな勉強めったにできないので、できてよかった。
- ・募金をした方がいいなって思うようになった。他の国の人だから仲良くしないという気持ちがなくなり、外国人だからって気にしないようになった。
- ・募金をするなど、「何か力になりたい」と思った。
- ・お金を計画的に使うようになった。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

SDGs がなぜ掲げられているのか、どうして目標達成に向かう必要があるのか、世界の課題を知らない子どもたちに、バングラデシュの現状を通して、知る機会を設けたかった。そのために、特に印象に残った「デモによる情勢」「国民性」「食文化」「自然災害がもたらす人々への影響」「ストリートチルドレン」「児童労働」「家事使用人」「国際協力」を題材に授業を行った。世界の課題に目を向けるだけでなく、あたたかい人柄や、目の前の児童と同じくらいの年の子たちが同じような夢を追いかけて努力する姿を知り、どこか遠くの外国のことではなく、地球一つに一緒に住む仲間として世界を捉えるきっかけになるとよいと思った。一つの出来事、物事を多面的、多角的に捉えることの大切さ、日本人の視点から外国人の視点と転換して考えることの大切さ、災害は地球全体の問題であること、世界には仕事をしなければならない同い年の子どもたちがいること、そういった子どもたちを救う日本人がいること。これらを子どもたちに伝え、一緒に世界の人々に寄り添い考えたかった。

12 苦勞した点

- ・ どうしたら「かわいそう」だけではない気持ちをもたせることができるか。「同情」から「共感」への変容。→上記の学びの軌跡にも載せたように、単元の中の振り返りで「かわいそう」という言葉は児童から出てきてしまった。
- ・ 様々な課題があるから SDGs という目標が掲げられているという展開にもっていくために、バングラデシュのことで学んだ様々な課題を題材として単元を組んだこと。
- ・ 3クラス別々で授業を行う中で、それぞれのクラスカラーにより反応が異なり、それぞれの雰囲気によって発問の言葉を選んだり、展開の仕方を工夫したりする必要があった。(答えのない問いをする授業なだけに、児童の発言も自由でそれぞれ異なるものになるのは必然なのだと感じた。)

13 改善点

- ・ 「かわいそう」ではない捉え方を促す授業づくり。
- ・ もっと児童同士で議論するような授業づくり。
- ・ フォトランゲージは児童が主体的に考えを出し合う有効な方法だと感じたので、単元の中で多用してしまった。最も有効な用い方を見つけていきたい。
- ・ 情勢（政治）、食文化（宗教）、災害（自然）、子どもたち（人間）という順で単元を組み、だんだんと児童にとって身近なものにすることで、世界の人々に寄り添うようになってきていたが、「こわい」「危ない」「汚い」などのマイナスのイメージをずっと引きずってしまっている児童もいた。また、そもそも持っている知識として、授業では扱っていないのに「ゴミが溢れていて汚い」という印象をずっと強く抱いている児童もいた。

14 成果が出た点

- ・ 児童が世界のことに興味をもつようになった。
- ・ 他の教科の授業では見つけられない児童の一面に出会えた。
- ・ 低位の児童も積極的にグループワークに参加して活発に発言していた。
- ・ 外国籍の児童が外国籍であることを恥ずかしがらずに自己開示するようになった。

15 自由記述

自分にできることとして「募金」と考える児童が多かった。この研修を始めた頃は、募金だけが協力ではないことを伝えたい気持ちもあったが、そもそも募金をすることすら意識が薄い学校の風潮もあったので、このように児童自らの言葉として出てきた「募金」にはとても意味があると思った。それを行動に移してってくれたら嬉しい。その他にも、リサイクル、ごみ拾い、ルールを守る、犯罪を起こさない、食べ物を粗末にしない、食べ物を送る、地球のために二酸化炭素を減らす、地球温暖化を止めるために節約する、みんなで協力する、平和を増やす、みんな平等に生きられるようにする、「この人は〇〇だから」と差別しない、差別などをなくすために嫌な言葉は言わない、SDGsをしっかりとやってみんなを平等にする、SDGsの一つでもいいから自分たちでやってみる、自分の家族にこの大変さを知ってもらい家族にも協力してもらう、みんなを笑顔にする、これからも元気でいてほしいと願うなど、児童それぞれの表現の仕方で自分にできることを考えられた経験も大きな一歩だと思っている。

【つながり & 共生】

多文化共生を実現しよう

【実践者】

氏 名	中村 陽美	学校名	埼玉県立特別支援学校塙保己一学園
担当教科等	家庭科・自立活動・総合的な探究の時間	対象学年（人数）	高等部普通科 3 年 教育課程 I（9 名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024 年 9 月 ～ 10 月（5 時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合的な探究の時間

02 単元名と単元目標

単元名：多文化共生を実現しよう

単元目標：共生の視点から文化祭の出し物について意見を出し合いながら考え直し、身近なところから行動を起こせることに気づく。自分たちの力で環境をよりよく変える経験から達成感を得て、自信につながる。

関連する学習指導要領上の目標：探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	世界には多様な価値観や文化があることを理解し、共生の捉え方を広げる。
② 思考・判断・表現	多様な文化や価値観、一人一人の幸せを尊重するために、自分（たち）には何ができるかを考えられる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	課題に直面した際、自分（たち）の力で環境をよりよく変えられるよう行動を起こそうとする。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈児童/生徒観〉

本授業に参加する生徒は、弱視 5 名、全盲 3 名、読み書き障害を有する 1 名であり、それぞれ拡大文字、点字、音声を使用して学習に臨んでいる。「視覚障害は情報障害」という言葉に表されるように得られる情報が限られることや、他者から支援をしてもらうことが多く生活経験が少ないことから、知らない世界を恐れ自分の安心できる環境に留まりたいという気持ちがある。夏休み前、「将来留学を希望するか」という調査が行われたが、希望者は 0 名、希望しない理由からは、知らない世界への恐怖や海外への

興味の低さがみられた。また、障害を悲観的に捉え自分の希望があっても実現が困難な場合、解決方法を粘って考えることなく諦めてしまうことがある。和気藹々とした学年だが、話し合い活動において、意見をしない生徒や他者の意見を聞き入れない生徒などがおり、様々な人の意見を取り入れながら進めることは難しい。話し合いを円滑に進められるよう、生徒たち自身も模索しているところである。

〈指導観〉

自分たちの世界を広げ、課題に多角的に向き合って行動を起こし、自身の願いを叶えていきいきとした人生を歩んでいけるような力を育みたい。本単元では、まず知らない世界に触れて視野を広げ、共生の捉え方を広げる。そのうえで、個人単位での共生について思いを巡らせ、自分にできることは何かを考える。そして、共生の視点から文化祭の出し物について考え直す活動を行い、自分たちの力で環境をよりよく変える経験から達成感を得て自信に結びつけていってほしい。文化祭後には振り返りを行い、目標達成の楽しさ・難しさを感じることで、未来のPDCAサイクルへつなげる。将来何か困難に直面した際、自分には何ができるかを考えながら、他者と協力し行動を起こすことのできる素養を高めていきたい。

05 単元計画（全5時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	知らない世界に触れよう	知らない世界に目を向け、自分たちの当たり前を疑い、視野を広げる。	・宇宙人に地球の生活を紹介 ・パラグアイ紹介（地理、衣食住、学校事情） ・パラグアイ体験（チピータ・テレレ試食試飲）
	資料・教材など ・点字地球儀・日本が東にある世界地図・日本が真ん中にある世界地図 ・衣食住や学校事情がわかる写真・動画・音声・アオポイ、テイポイ（教員2名で着用して授業をした）・グアラニー族の民芸品（楽器、木彫り）・ニャンドゥティ・チピータ・テレレのセット		
2	「共生」の意味を考えてみよう	共生の捉え方を広げ、国際的な視点を持つ。身近な生活の中にも外国とのつながりがあることに気づき、人々の想いに触れることで多様な文化や価値観を尊重できるようになる。	・パラグアイの日系社会〈＝外国の中の日本〉を紹介 ・日本で暮らす外国人（フィリピンから移住した生徒の母へインタビュー）〈＝日本の中の外国〉について考える ・国際的な視点から、共生のために私たちができることを考える
	資料・教材など ・前時を振り返るパワーポイント・移住の歴史の紹介・エリカさんへのインタビュー記録 ・日本人会表敬の記録・ホームステイでの記録・イグアス日本語学校での動画、子どもたちとの会話・生徒の母（フィリピン出身）へのインタビュー		
3	個人単位の共生を考えよう	年齢や性別、障害、国といったジャンルだけではなく、その中の一人一人に対して自分が個人としてどう向き合っていくかという個人単位での共生の視点に立	・「友情の日」の体験 ・パラグアイ人のお金の考え方を紹介 ・自分が大切にしていることを考え、共有 ・エリカさんが通訳になった理由を紹介 ・視覚障害者（JICAパラグアイ福地さん・本校英語担当中川教諭）の仕事の工夫を紹介

		つ。一人一人の幸せを尊重することの大切さに心を向け、そのために自分ができる行動を考える。	・共生のために自分ができることを考える
	資料・教材など ・前時までを振り返るパワーポイント・「友情の日」体験のための名前の書いたくじ引き ・エリカさんへのインタビューの音声（通訳になった理由）・福地さんへのインタビューの動画（仕事の工夫）・本校英語担当中川教諭へインタビュー（仕事の工夫）		
4 本時	文化祭での共生を実現しよう	共生の視点から文化祭の出し物について意見を出し合いながら考え直し、身近なところから行動を起こせることに気づく。自分たちの力で環境をよりよく変える経験から達成感を得て、自信につなげる。	・前時までの振り返り（共生の意味の広がりを出す） ・すべての人が楽しめる文化祭の出し物をつくるための工夫を考える ・改良・発展させるための文化祭準備
	資料・教材など ・前時までを振り返るパワーポイント		
5	文化祭を振り返ろう	自分たちの気づきや来校者からの意見からフィードバックを行い、目標達成の楽しさ・難しさを感じることで、未来のPDCAサイクルへつなげる。	・文化祭の振り返り（経験・気づきの共有、来校者からのフィードバック紹介、もう一度文化祭ができるならどう臨みたいかを考える） ・共生のために私たちができることを考える
	資料・教材など ・前時までを振り返るパワーポイント・文化祭で生徒たちが共生のために工夫したものや行動の写真・来校者（教師海外研修の仲間）のフィードバックの紹介		

06 本時の展開（4 時間目）

本時のねらい：共生の視点から文化祭の出し物について意見を出し合いながら考え直し、身近なところから行動を起こせることに気づく。自分たちの力で環境をよりよく変える経験から達成感を得て、自信につなげる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (20分)	●前時までの復習をする。 ・パラグアイの衣食住や学校事情を知り、世界を広げる ・外国の中の日本、日本の中の外国を知り、国際的な視点で共生を考える ・「友情の日」体験（前時欠席者が発表） ・エリカさんが通訳になった理由 ・JICA パラグアイ福地さんの仕事の工夫	◇前時までに学習した内容を振り返り、生徒たちが気づきを思い出せるようにする。 ＊音声中心の情報を提示し、視覚情報は説明を補足する。

	・本校英語担当中川先生の仕事の工夫 ・共生のために自分にできることを考える ●本時の学習のテーマを知る。 本時の学習テーマ：すべての人が楽しめる文化祭をつくろう！	◇自分たちが近日中にできそうなことを問う。
展開 (20分)	●すべての人が楽しめる文化祭の出し物をつくるための工夫を考える。 ○「すべての人」にはどんな人がいるか挙げる。 ○すでにしている工夫を挙げる。 ・各ゲーム担当で話し合い、メモをとり（※）、全体に共有する。 ○今からできそうな工夫を考える。 ・各ゲーム担当で話し合い、メモをとり（※）、全体に共有する。 ・他のゲーム担当とアイデアやアドバイスを交わす。	◇老若男女、障害の有無など様々な来校者、ゲームの主催者の自分たちなど多くの人々のことを思い浮かべられるようにする。 ◇メモを残し、文化祭後のフィードバックで活用できるようにする。 （※時間が足りず当日は行わなかった。） ◇自分の担当以外のゲームについて考えたり意見交換したりすることで、新たな視点を得られることに気づけるようにする。
まとめ (5分)	●文化祭への意気込みを発表する。	◇共生という視点を加えて文化祭について考え直したことに触れる。

使用する資料・教材：前時までを振り返るパワーポイント

07 板書計画

PPT を使用

08 評価規準に基づく本時の評価方法

発言内容・活動中の様子

09 学校外との連携（※該当のある場合）

教師海外研修中に通訳のエリカさん・JICA 職員の福地さんへインタビューをした。

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

・夏休み前の「将来留学を希望するか」という調査で希望者は0名だったが、渡航後の初回の授業で経験を紹介すると「海外行きたい!」と話していた。国際的な視点で自分ができるところを考えた際にも「留学」と答える生徒がいた。少しずつ海外にポジティブな印象を持っていた。

・「友情の日」の体験でとてもあたたかな雰囲気になり、その日の帰りの会で生徒が「卒業式の後にもやろうよ!」と言ってくれた。それぞれが級友を思い合えるいい機会になった。

・本時の「すべての人が楽しめる文化祭」の「すべての人」にどんな人がいるかの問いに「国籍」という言葉が出てきて驚いた。

・異なる立場を想像することや立場の置き換えが苦手な生徒たちだが、どんな来校者が来るかなど様々な場合を想定して文化祭の出し物の工夫を考えられていた。

・文化祭の出し物が自分たちの工夫によって、色んな方に楽しんでもらえたことを実感していた。事前の工夫だけでなく、その場での臨機応変な対応の大切さに気づいていた（床に置いていたおぼけ釣りの桶がベビーカーから届かなかったため持ち上げたことなど）。文化祭後のフィードバックの際、当日はいらっしゃらなかったが、「音声を使った謎解きは聴覚障害のある方が来たら対応できていなかった」と悔しがっていた。想定を広げて共生について考えられるようになり、成長がみられた。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

- ・日本にとどまらず、海外にもっと目を向け、世界を広げてほしい。
- ・国際協力の大切さ。日本は日本だけの力では成り立たない。
- ・日本から離れたところに、日本に想いを馳せる人たちがいる。
- ・情報を鵜呑みにせず、物事の光と影をみつめながら多角的に考えてほしい。
- ・共に学ぶ仲間がいることで、新たな発見、考えの厚み、学びあう楽しさを得られる。

12 苦労した点

「共生のために自分に何ができるか」といった問いを単元の中で何度かしたが、現在の生活では自分と海外とのつながりが少なく、国際的な視点においては思考が止まることがあった。学習前より地球規模での視野を広げられていたが、小さなことからでも行動に移せることを実感してもらうのが難しかった。「“文化祭ですべての人に楽しんでもらうために”何ができるか」といった場面を設定した具体的な質問をすると考えが浮かびやすかった。場面を自ら設定する自由な質問と場面を与える質問どちらも入れていく必要性を感じた。

13 改善点

「苦労した点」に記載。

14 成果が出た点

- ・海外に興味を持ってくれたこと
- ・世界には多様な価値観や文化があることを理解し、共生の捉え方を広げられたこと
- ・自分たちの力で環境をよりよく変えられることに気づき、さらなる工夫を考えられたこと

15 自由記述

【研究協議会 参加者の声】

(一緒に授業に入っていた本校教諭)

・異なる立場を想像することや立場の置き換えが苦手な生徒たちだが、体験をしながら共生について学ぶことができた。いつも後ろに座る生徒も前に座っていた。

(本校教頭)

・最初、JICA 研修に参加すると聞いた時は驚いた。バイタリティーがあり、熱い思いがあるため、いい機会になったのでは。本時では復習に凝縮されていて、新たな視点を伝えたいということがよく伝わった。「友情の日」の体験は、生徒が非常に生き生きとしていてよかった。視覚障害に対する工夫に発想が向かうのは本校では当たり前のことではあるが、国際視点の入った話が出てきたのは大きな一歩。

(JICA スタッフの方々・研修の仲間)

・盲学校初めて。目が見えないけど、「友情の日」のいいところ紹介で、よく友達のことがわかっていると思った。

・福地さんのお話が大切だと思った。自分が貢献できることをやると気づいたうえの本時で、生徒が一歩進んだ。研修最終日にギリギリだったが、福地さんにインタビューできてよかった。

・普通の学校でここまで出ない。盲学校だからこそ幅広い視野で考えられるのでは。障害+国際的な視点で視野が広がった授業になっていた。

・多様性=外国人になりがちだが、子どもたちが文化祭での様々な想定を想像できていた。

・生徒が、障害や国籍、色んな人の立場に立って、共生を意識して文化祭準備に挑もうとしている姿がとても素敵。文化祭当日、どんな形になっているか楽しみ。

・文化祭の出し物を一からではなく、新たな視点を得たうえでブラッシュアップしよう、という展開がよかった。生徒がつまんだところを先生たちがフォローや声掛けすることで進んでいた。

・クラスを見て、ユニバーサルではなく、インクルーシブだと思った。

・授業の導入から学ぶことが多かった。音からダム、何色で食事など、音や色で入るのが斬新。五感で学ぶことが大事と思いつつ、資料の活用はどうしても視覚に訴えるものがほとんどだったと改めて感じた。言葉で情景をさらさら伝えていて、視覚を活用しない伝え方に驚いた。

・パラグアイで学んできた視点も入りながら、それを使って思考させるという展開がよかった。

・お茶を淹れるのを生徒同士で協力したから、テレレの体験をよく覚えていたのかな。

・「聴覚障害」をもった方のための工夫が出てきたことにびっくり。なんで意識がそこまでいったんだろう。陽美先生（授業者）が手話を勉強しているから？子どもたちにとって周りの影響は非常に大きいと思った。

・先生と生徒が対等な関係に見えたのが本当に素敵だった。

・色んな人と交流してほしい。新島と近しいのでは。

【文化祭に来てくださった研修仲間の声】

・人生で初めて盲学校に入った。廊下にはたくさんの点字と墨字の掲示物があり、ここでは目の見える私にバリアフリーとして墨字があるのだと感じた。もしかしたら目が見えないのが普通で、目が見えるのが特別なのかと思った。

・どのブースも、点字、墨字が用意されていて、私たちも不自由なく過ごせた。

・いろんな作品も見られて、先生方が生徒に与える教材、課題の工夫も感じることもできた。

・私のクラスでは、ハロウィンパーティーを企画中だったから、レベルの高い出展にアイデアをいただいた。子どもたちに紹介したい。

・ピアノ発表の最初の挨拶に英語を入れていたことは、授業あつての工夫だと思った。

・話題の射的は、結局ペットボトルの中は水になっていて、水の量によって倒れるかどうか工夫されていておもしろかった。ボールがカラカラ音がする物で、ペットボトルの音ではなくて、ボールの音で分かる工夫がされていた。

・触覚を活用する謎解きは、見えている人も、見えない工夫がされていて、誰でも楽しめる内容。視覚障害の方が得意なのかなと思ひ面白かった。こんなにもわからないものかと驚いた。手指の感覚をどれだけ活用していないか実感した。

・磁石で釣るゲームですが、お店屋さんがかなり頑張って墨字を読んでいたイメージだった。あの空間は視覚障害の方が普通、障害がない私たちが特別な空間だと感じたので、もっと店員さんがやりやすい形で良いと思った。

【つながり & 共生】

異文化理解・自国理解を深め、考える ～パラグアイについて知り、日本との繋がりを感じる～

【実践者】

氏 名	根岸 彩夏	学校名	群馬県立大間々高等学校
担当教科等	外国語（英語）	対象学年（人数）	3年2組（34名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年12月（5時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

教科：外国語（英語） 科目：論理・表現Ⅱ

02 単元名と単元目標

単元名：異文化理解・自国理解を深め、考える ～パラグアイについて知り、日本との繋がりを感じる～

単元目標：パラグアイについて知り、日本との繋がりを知ることで、自国理解・異文化理解を深め、自ら考える。

関連する学習指導要領上の目標：書くこと（思考・判断・表現）

・日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、一定の支援を活用すれば、多様な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理の構成や展開を工夫して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えることができるようにする。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	
② 思考・判断・表現	【書くこと】広い視野から国際理解を深めるため、パラグアイの特徴や現状について必要な情報を読み取り、概要や要点を捉え、手紙作成の中で自分の意見や考えを伝えている。
③ 主体的に学習に取り組む態度	

04 単元設定の理由・単元の意義

私が訪問して大好きになった魅力溢れる国「パラグアイ」を生徒たちに知ってもらいたいと願い、今回のジグソー活動を考えた。パラグアイに関する英語の記事を読み取る中で、異文化理解を深め、私の友人であるシオリさんにパラグアイをお勧めする手紙を作成する。

〈児童/生徒観〉

非常に前向きで、明るいクラスである。普段からメリハリをつけて授業に取り組むことができおり、英語が得意な生徒、苦手な生徒が混在しているものの、互いに教え合う姿がよく見られる。年度当初で行った英語に対する意識調査では、「英語が好きですか？」という質問に対し、36%の生徒が肯定的な回答をした。また、「英語を学ぶことは必要だと思いますか？」という質問に対しては、約90%の生徒が必要だと答えており、英語の重要性を感じている生徒が多い。本時では、『パラグアイ』に焦点を当てるが、生徒たちが視野を広げ、今後の生き方に繋がる機会になることを願っている。

05 単元計画（全5時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 本時	英語の記事を読み取り、パラグアイをお勧めする手紙を作成する。	異文化理解 自国理解 パラグアイと日本との繋がりを知る	・パラグアイの情報を読み取る。 ・得た情報をもとにグループで手紙を書く。
	資料・教材など	・ジグソー用の記事（A～C）・お手紙に添付する写真（A～C）	
2 ～ 3	各自で手紙の作成	異文化理解 自国理解 パラグアイと日本との繋がりを知る	・グループで書いた手紙を参考にし、自身でアレンジを加え手紙を再構築していく。
	資料・教材など	手紙の下書きワークシート	
4 ～ 5	A～Cの資料から考えたこと・分析したことを英語でまとめる。	異文化理解 自国理解 パラグアイと日本との繋がりを知る	・A～Cの記事から得た情報を整理し、各自で分析を進めていく。考えたことや提案を40語程度の英語でまとめる。
	資料・教材など	まとめのワークシート	

06 本時の展開（1時間目）

本時のねらい：

私（根岸）が訪問した『パラグアイ』を、私の友人であるシオリさんに推薦するために、与えられた資料を正しく読み取り、私になりきって、パラグアイをおすすめする手紙を英語で書くことができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (10分)	ブレスト：Describing Game ・開発途上国（発展途上国） ・親日国 ・本時の目標を確認する。	・A～Cのカードを配布 ・本時の目標を見失わないように、生徒たちにしっかりと伝える。

	・私が訪れた『パラグアイ』を、私の大学の友人であるしおりさんに推薦したい！私になりきって、シオリさんに書く手紙（写真同封）を考える！ ・友人シオリさん事情の共通理解 ・シオリさんは、大学の友人。現在30歳。 現在は、群馬で小学校の英語の先生をしている。 A 得意な英語や大学で学んでいたスペイン語を活かして、現地の学校で働きたい。 B レイチェル・カーソンの“Silent Spring”を読んでから、環境問題に強い感心を持っている。 C 将来、海外に移住し、日本との架け橋になりたい。	
展開① (10分)	・ABCグループ分け ◆エキスパート A～C各グループに分かれ、情報を読み取る。 個人ワーク▶グループワーク	・単語を調べても良いことを伝え、生徒の取り組みの様子を観察する。
展開② (20分)	◆ジグソー 課題① ABCの共有 課題② グループごとアイディアを出しながら、グループで1つサンプルの手紙を作成する。	・グループワークができているか観察し、読み取りに苦戦しているグループが作業できるように机間支援をする。
まとめ (5分)	◆クロストーク ・代表者が、手紙を読み上げる。 ・次の授業のお知らせをする。	・いくつかのグループを指名し、クラス全体で発表する。 ・次回は各自で手紙を書くことを伝える。（便せんを持っている生徒は持ってくる）

使用する資料・教材：・ジグソー用の記事（A～C）・お手紙に添付する写真（A～C）

07 板書計画

PPTを使用

08 評価規準に基づく本時の評価方法

ワークシート、手紙の作成、対話の様子

09 学校外との連携（※該当のある場合）

・友人のシオリさんには、手紙を後日読んでもらい、フィードバックをいただく予定です。

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

初めてのジグソー活動で生徒たちにとっては戸惑いも多かったと思うが、「よく分からない」という生徒が、段々と「この記事はこういうことを言っているから、シオリさんにはこうお勧めすればいいかな？」と提案できるようになっており、生徒たちの変化を感じ嬉しかった。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

『パラグアイ』の素晴らしさや日本との深い繋がりを伝えたいと思った。一方で、生徒たちにはパラグアイが抱える課題にも目を向けてほしいと思い、環境問題（森林面積が減少している）についての話題も入れることにした。

はじめは、日系人の世代間で異なる日本語継承に対する想いについて、生徒たちと考えようと思ったが、生徒たちは彼らの話を直接聞いていないため、ジブンゴトとして考えることが困難だろうと予測し、今回日系人について扱うことを断念した。しかし、今後の授業の中で日系人について必ず触れていきたいと考えている。

12 苦労した点

- ・手紙を書くことに繋がるようなデータを探すことに苦戦した。また、日本語のデータを英語に翻訳したため、生徒たちが理解できる英語で表現することを意識した。
- ・初めてのジグソー活動だったため、私自身が授業の進め方に慣れておらず、生徒の反応を推測することが難しかった。

13 改善点

- ・Today's Goal や A～C の設定は、授業中常に意識することができるよう、掲示 or 板書で固定しておく。
- ・ジグソー活動の進め方を最初に説明しておくべきだった。（エキスパートからジグソーの流れで同じ記事を持っている生徒が自分以外おらず混乱する生徒がいた。）
- ・読み取る作業、手紙作成の時間配分
- ・今回は時間の都合上プレ課題を設定することができなかったが、導入でプレ課題を入れることにも挑戦してみたい。

14 成果が出た点

- ・教師海外研修でのリアルな体験を条件や設定にすることができ、オーセンティックマテリアルの活用に成功した。生徒たちは、より実社会を意識して活動に取り組むことができた。
- ・授業後、「難しかったけど、楽しかったー！」と生徒が言ってくれ、パラグアイが少し身近な国になったのではないかと感じた。
- ・迷いながらも、助け合いながら思考する場面が見られた。
- ・パラグアイについて書かれた英語の記事を、グループの仲間と協力して読み取ろうとする姿勢が見られた。（協働的な学び）
- ・記事から読み取ったことや考えたことを手紙に書いていくことで、思考が整理され、意見の再構築をすることができた。

・あえて生徒たちの中に「モヤモヤ」とする部分を残すことができた。それを班ごとに徐々にクリアすることができるような余白を与えることができた。

15 自由記述

海外研修での学びをどのように授業に繋げていけばいいのだろうか。数カ月悩んだ。派遣前研修で授業内にジグソー活動を取り入れることの意義を知り、私も自身の英語の授業で実践してみたいと強く思い、『パラグアイ』をテーマにジグソー活動をすることに決めた。教師海外研修で共に駆け抜けてきた仲間や講義して下さった先生方にもご助言いただきながら、私の現地での学びを授業に落とし込んでいけるよう、パラグアイについて知りその情報をもとに英語で手紙を書くという目標を設定することにした。

授業当日は、生徒たちがどのような反応をするか不安な部分もあったが、グループの仲間と共に苦戦しながらも協力して資料を読み解こうとする姿、得た情報をもとに意見を出し合って手紙を書こうとする姿を見て、生徒たちの可能性を感じ、彼らの多様な枠に収まらない考えに触れることができた。教師海外研修をきっかけに、自身の授業スタイルを見直し、本気で生徒たちのために思い授業づくりをすることができた。この経験は、今後の私の教員人生を支えてくれると感じている。これからも、国際理解教育・開発教育に力を入れ、海外の実情や世界との繋がりを意識しながら物事を多面的に考えることのできる生徒を育てていきたい。

【答えのない問い】

SDGs～わたしたちにできること～

【実践者】

氏 名	夏堀 隼也	学校名	千葉市立宮崎小学校
担当教科等	教務主任	対象学年（人数）	4 年（123 名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024 年 10 月 ～ 2 月（30 時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合的な学習の時間

02 単元名と単元目標

単元名：SDGs～わたしたちにできること～

単元目標：世界や日本を多様な視点から見て、持続可能な社会を創るために自分ができていることを考える。

関連する学習指導要領上の目標：探究的な見方・考え方を働かせ、目的や根拠を明らかにしながら、課題を解決し、自己の生き方を考えることができるようにする。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	世界や日本の SDGs 的な課題や現状についての知識を身に付け、課題解決のためにできることを理解している。
② 思考・判断・表現	世界や日本の現状から、問いを見だし、情報を集め、整理・分析して、他者との協働をととして、自分の考えを更新している。
③ 主体的に学習に取り組む態度	持続可能な社会の創り手として、未来の世界を想像し、そのために今できることやこれからの生き方を考えようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

SDGs とそれらに関わる世界や身の回りの問題や現状、対策について、一人一人が課題を設定し、探究的な見方・考え方を働かせて学びを構築することができるよう、単元を設定した。

〈児童/生徒観〉

本学級の児童は、SDGs という言葉は知っているが、世界や日本の様々な課題を自分ごとと捉えることや、自分の行動がそれらとつながっている感覚をもつことができていない。また、個々に課題設定し、調べることはできるが、友達と協働することでより自分の考えが深まるよさを実感できていない。

〈指導観〉

単元の前半（1～15 時間目）は、パラグアイや身の回りの出来事と SDGs との関連に気付くことで関心をもち、すごろくづくりを進める中で知識を身に付けられるようにする。後半（16～30 時間目）は、前半で得た知識から、自ら問いをつくり、友達と協働的に探究する過程で、理想の未来のために何ができるか、自らの生き方を考えられるようにし、持続可能な社会の担い手としての資質・能力を育みたい。

05 単元計画（全 30 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 ～ 3	SDGs って	SDGs について関心をもつ。	・SDGs メガネをつけて、パラグアイを旅する。 ・SDGs メガネをつけて、身の回り（日本）を見つめる。 ・SDGs すごろく（日本パラグアイ編）を行う。
	資料・教材など パラグアイ地図、SDGs カード、パラグアイ写真、学校や地域の写真、 SGDすごろく（日本・パラグアイ編）、ワークシート		
4 ～ 15	オリジナル SDGs すごろくをつくろう	SDGs のうち、自分の関心をもったものについて情報収集、整理分析し、表現する。	・SDGs のうち関心のあるものを選ぶ。 ・SDGs の目標、問題・現状、対策などについて調べる。 ・わかったことをもとに、オリジナルすごろくを作る。 ・オリジナル SDGs すごろくをやって、わかったことやモヤモヤしたことをフィードバックする。
	資料・教材など 『共につくるわたしたちの未来（JICA）』、SDGs CLUB、NHK for school、 SDGs に関する本、タブレット（発表ノート）、すごろくの白紙マス		
16 ～ 18	SDGs について問いをつくろう	SDGs について、モヤモヤから問いをつくることができる。	・元 JICA の戸田隆夫さんの話を聞き、2050 年の世界を想像し、そのためにできることを考える。 ・これまでの学びでのモヤモヤから問いを作る。
	資料・教材など 戸田隆夫さんのスライド、問いカード、ワークシート、タブレット（発表ノート）		
19 ～ 22 本時	SDGs について対話しよう。	SDGs についての問いに対して、友達と協働で探究する。	・問いについて、友達と対話することを通して、自分の考えを更新する。
	資料・教材など 問いカード、タブレット（発表ノート）		
23 ～ 28	自分の問いをさらに探究しよう	友達との対話を経て、さらに情報収集し、整理・分析し、まとめることができる。	・自分の問いについて、さらに調べたり、整理したり発表ノートにまとめたりする。 ・戸田隆夫さんからの問いに向き合い、自分の考えを深める。
	資料・教材など タブレット（発表ノート）		

29 30	2050 年の理想の世界へ	・自分の問いや戸田さんからの問いについて、自分の考えを表現することができる。	・自分の問いについてまとめたことを、友達に発表する。 ・2050 年の世界やそのためにできることを発表する。
	資料・教材など タブレット（発表ノート）		

06 本時の展開（20 時間目）

本時のねらい：個々の問いについて、友達と話し合う協働的な活動をとおして、自分の考えを更新することができる。（思考力、判断力、表現力等）

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5分)	1 これまでの学びを振り返り、個々の問いについて、協働的に話し合うことについて見通しをもつ。	○SDGs について関心をもち、すぐろくをとおして、知見を広げ、自分の問いをつくってきたことを想起させ、称賛する。
展開 (35分)	2 3人組で、個々の問いについて話し合う。 (児童 ABC の反応例) ・A が発問者となり、話し合う。 A 世界平和が大事、戦争はしたくない、と考えられているのに、現在世界では数十の戦争・紛争があり、数十万人の子供兵士がいるとされています。戦争のない世界はおとずれるのでしょうか。 B 人間はこれまでずっと戦争を繰り返しているから、戦争がなくなることはないんじゃないかな。 C 民族や領土が分かれているから、お互いのことを理解したり尊重したりするのは難しいと思う。 A 言葉が違ってても、翻訳アプリでお互いのことを伝え合えれば理解し合えるんじゃないかな。 ・B が発問者となり、話し合う。 ・C が発問者となり、話し合う。	○問いについて友達と話し合うことで、より考えが深められるよさを示唆する。 ○問いと向き合うための前提知識に大きな差が出ないように、同じ（または近い）SDGs の番号同士でグループを編成する。 ○個々の問いカードを参考に、世界や日本の現状や問題を示してから、問いを投げかけるように促す。 ○発問者に対して、何かしら自分の考えを伝えられるようにする。 ○話し合いが行き詰まった場合には、批判的な見方（あえて違う見方）や自分事な見方（自分だったら）ができるように、見方を変えるよう助言をする。
まとめ (5分)	3 話し合いを経て、自分の考えを書いたり、さらに調べたりする。 ・B さんが過去の戦争のことを言っていたな。これまでに戦争は増えているのか減っているのか調べよう。減っているなら、そこに平和へのヒントがあるかもしれない。	●他者との協働をとおして、自分の考えを更新している。（思考・判断・表現）

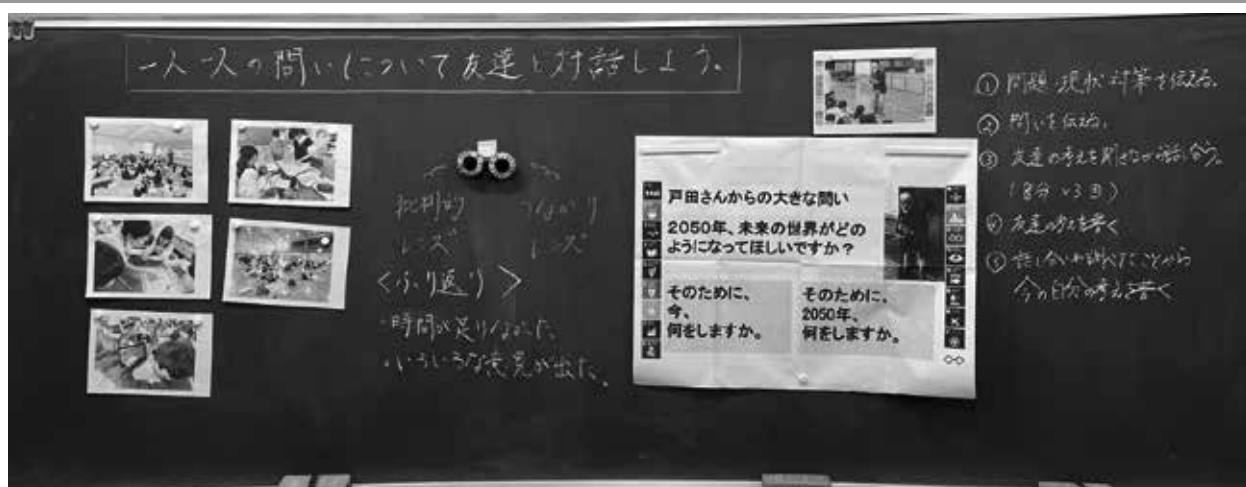
	4 学びを振り返り、共有する。 ・友達と話し合ってみて、平和を実現することが簡単ではないことに改めて気づいた。でも、少しでも失われる命や犠牲となる子供兵士を減らすために自分ができることを考えたい。	○友達と話し合うことで、自分の考え方に変化が生まれたかを振り返られるように問いかける。 ○より考えを深めることができた児童がいたら共有し、協働することのよさに気が付けるようにする。
--	--	--

使用する資料・教材：

- ・問いカード（児童が作成）
- ・タブレット（発表ノート）
- ・これまでの学びが想起できる掲示資料

（SDGs すごろく日本パラグアイ編・オリジナル SDGs すごろく、戸田隆夫さん授業の様子等）

07 板書計画



08 評価規準に基づく本時の評価方法

- 話し合う様子の観察
- 話し合い後に、問いカードに、友達の考えと自分の考えを書けているか。

09 学校外との連携（※該当のある場合）

16 時間目（12 月 11 日）元 JICA 上級審議役・現 Forum2050 代表 戸田隆夫さんの出前授業

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

1 時間目、「SDGs メガネをつけてパラグアイを旅しよう」では、パラグアイで見たことなどを紹介したが、日本と比べて「貧しい、分別ができていない、森林伐採はだめ。」などの否定的な反応が多かった。地球の裏側の国で起きていることであり、「自分には関係ない」「気になる SDGs がない」という意見も見られた。

4～15 時間目は、「SDGs オリジナルすごろくをつくろう」では、SDGs について調べたことをアウトプットする方法として、すごろくのマスを作った。問題や課題は○マス戻る、良い現状や対策は○マス進むというマスにすることで、「興味が湧いてきた。」「少しずつ気になってきた」と関心や知識が高まっていく様子が見られた。

16 時間目、元 JICA 現 FORUM2050 代表の戸田隆夫さんの授業を受けた。戸田さんが経験した世界の現実に想像力を働かせながら聞き入り、衝撃や感動があったようだ。「2050 年、どんな世界であってほしいか」「そのために何をしたいか」「未来を作るのは君たちだ」という言葉を受け、世界の問題も自分ごととして捉え始めている様子が見られた。

17 時間目から、一人一人の問いを作り始めた。すごろくを作る過程でモヤモヤしたことや戸田さんの話を聞いてモヤモヤしたことから、問いを書き出した。その中から「友達と話し合いたい問い」「答えが一つではなく、追究しがたい問い」に精選した。その段階で進んで対話を始める子もあり、問いについて話し合いたい意欲が高まっていると感じた。

19、20、21 時間目に、一人一人の問いについて友達と対話した。批判的レンズで物事を多角的に見ること、つながりレンズで統合的に見ることを推奨すると、「でもさ、こう考えることもできるんじゃない」「これとこれはつながっているんじゃない」などと対話の深まりが見られた。友達の意見を受けて、自分の問いに対する今の考え方をもち、今後さらに問いについて探究していこうとする姿勢が見られた。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

パラグアイで見た貧困、国際協力、ルーツ・アイデンティティーの問題、マイノリティーなどについて、深く感動したり考えさせられたりした。眠れなくなるほどモヤモヤしたことを、振り返りの時間やバスの移動中に仲間と対話する中で、考え方の違いを含めて大きな気づきがあった。それらをもとに自分の考えを更新する、そのような日々こそが自分にとっても最も価値のある学びだったと振り返る。そして、そのプロセスは、総合的な学習の時間における「探究のスパイラル構造」と同様であることを教わり、子どもたちが「探究モード」で学びを築き上げる姿を目指そうと考えた。

12 苦労した点

パラグアイでの自分自身の学びは、それを実際に見て聞いたからこそ生まれたものであり、子どもたちにとっては「知らない国の知らない出来事」である。「へえ。」と思うことはあっても、どうすればよいか真剣に考えるには至らなかった。すごろくづくりという活動を入れることで、楽しみながら知る、という経験はできたが、本やインターネットの情報を書くにすぎず、表面上の知識となっていたことも課題だった。そこで、戸田さんという世界を広く回った方のお話を聞くことで、本気になり「自分ごと」に近づいた瞬間が分岐点となった。

授業を進める上で一番の悩みは、「一人一人が答えのない問いをつくれるのか」「友達の問いに対して真剣に話し合えるのか」だった。すごろくで積み重ねた知識と、戸田さんから揺さぶりがあったためか、子供たちなりの問いを立て、対話が深まっていたのが印象的だった。

13 改善点

- ・感動を伴うような体験的活動を取り入れるべきであった。
- ・多様な他者（外国の方や企業の人など）との交流を取り入れるべきであった。
- ・学年の先生方と授業実践を進める上で、情報共有や協議を密にする必要がある。
- ・次年度以降も進められる「探究的な学び」を確立すべきである。

14 成果が出た点

- ・初め「他人事」だった世界の出来事や自分達の未来について、「自分ごと」となった。
- ・答えのない問いを立てることができた。
- ・友達と対話する中で、批判的に物事を見たり物事の関連性に目を向けたりすることができた。

15 自由記述

授業について、長い期間たくさんのことで悩んだ。それらを最初は相談することができなかった。学年の先生方は多くの業務を抱えており、授業について相談することが憚られたからだ。しかし、学びが始まり進むにつれて、少しずつ相談したり協議したりすることができるようになった。先生方との協議をとおして、一人で悩んでいるときには思いつかなかった進め方や考え方に気付くことができた。これら、授業作りも「答えが一つではない問い」に対話的に向き合い、自分なりの答えを更新し続けるという貴重なプロセスであったし、ものすごく充実した日々であった。

【答えのない問い】

愛と食でつながる日本とパラグアイ

【実践者】

氏 名	河上 智子	学校名	埼玉県川越市立川越第一小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	4年4組（28名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年11月～12月（6時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

社会 道徳

02 単元名と単元目標

単元名：愛と食でつながる日本とパラグアイ

単元目標：

- ・パラグアイという国について知り、日本と食で繋がっていることを知ることができる。
- ・食べ物がどこから来ているのか調べることで、世界と日本の繋がりについて知る。また、食品廃棄の現状を知り、自分たちにできることは何か考えることができる。

関連する学習指導要領上の目標：

<社会科>

社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

- 1 地域の産業や消費生活の様子、人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし、地域社会の一員としての自覚をもつようにする。
- 2 地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。
- 3 地域における社会的事象を観察、調査するとともに、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。

<道徳> 内容 C 国際理解、国際親善

他国の人々や文化に親しみ、関心を持つこと。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	パラグアイのことを知り、パラグアイに暮らす人とその人たちが大切にしている文化や価値観があることを理解している。
---------	---

② 思考・判断・表現	国際理解や多文化共生について、学習したことから自らの考えへの根拠を見いだしている。また、活動を通して学んだ自分からの思い、学びによる自己の変容等、自分の考えをまとめ表現している。
③ 主体的に学習に取り組む態度	国や地域の異なる文化や価値観を受け入れ、尊重するとともに、共通性を見いだそうとするよさを取り入れようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈児童/生徒観〉

児童は、川越の観光地のすぐ側に住んでいて登下校時に外国人観光客をよく見かける環境にいる。3年生から始まった、外国語の授業は楽しみながら言語に触れていてAETにも積極的にコミュニケーションをとる姿も見られる。しかし、他国について名前は知っていて文化や生活にとっても興味はあるが、どのような国なのかまだまだ知らないことが多い。

〈指導観〉

グローバル化が進み、各国との行き来や交流が便利になっている。また、身の回りを見てみると、他国から輸入している物も多数見られる。この単元では、パラグアイという国について、日本とパラグアイのつながり、関係を日系社会の話から入り、食でつながりがあることを知ってもらいたい。そこから、食品廃棄について知り未来の自分たちに何ができるのか考えさせたい。また、これからのグローバル化社会を生きる子ども達に日本だけでなく地球全体を一つとして見て、世界とのつながりに関心をもつ態度を育てていきたい。

05 単元計画（全6時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	海外と日本のに ている共通点を みつけよう	日本と他国の共通点を見つけることを通して他国に親しみを持とうとする態度を養う	・＜道徳「つながっている日本と外国」＞ 道徳の資料を読み、自分と外国とのつながりについて考えを深める
	資料・教材など	Gakken みんなの道徳4「つながっている日本と外国」	
2	パラグアイにつ いて知ろう	パラグアイの様子について知ることができ る。	＜パラグアイの様子について知る＞ ・パラグアイの町の様子 ・学校の様子 ・言葉 など
	資料・教材など	写真・ワークシート	
3 本時	身近な食べ物は どこから来てい る？	身近な食べ物はどこから来ているのか知り、自分たちの生活が世界と繋がっていることを知ることができる。	＜身近な食べ物はどこから来ているのか知る＞ ・朝食を例に挙げて、朝食が完成するまでのどの国の人々が関わっているのか調べる。 ・気づいたことを伝え合う
	資料・教材など	写真・ワークシート	

4	パラグアイと日本のつながりを知ろう。	日本とパラグアイの大豆とゴマを比較し、作り手の日本とのつながりを継承したいという思いに気づくことができる。	<パラグアイの農業や日系人について知る> ・大豆とゴマを見せ、日本のものと比べる ・日系人について知る。 ・作り手の願いを知る。
	資料・教材など 写真・醤油・ワークシート		
5	食品ロスや飢餓について知る。	日本や世界の食に対する課題を知ることができる。	<食品ロスや飢餓について知る> ・食品ロスや飢餓について知る ・給食の残りについて調べる ・気づいたことを伝え合う。
	資料・教材など 写真・ワークシート		
6	自分たちにできることを考えよう。	食品ロスや飢餓のために自分たちは何ができるのか考える。	<未来のために自分たちは何ができるのか考える> ・これから自分たちに何ができるのか、話し合う。 ・今までの学習のまとめ
	資料・教材など 写真・ワークシート		

06 本時の展開（3 時間目）

本時のねらい：身近な食べ物は、どこから来ているのか知り、多くのものが外国からやってきていることを知ることができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5分)	1 前時のふりかえり T:前回はどんな国について学習しましたか C:パラグアイ T:どこにありますか C:アメリカの近く、ブラジルの近く、日本から遠い T:日本と似ているところがありますか C:国旗、緑が多い、バスが走っているところ 2 パラグアイのスーパーの様子 T:この写真はパラグアイのスーパーの様子です C:野菜がそのまま置いてある、日本と売っている物が似ている 3 めあての確認 身近な食べ物は、どこから来てどんな国の人が関わっているのだろうか	○写真を見せながら、日本と同じ食べ物があることに気づかせる。 ○学習の見通しをもたせる
展開 (30分)	4 朝食が完成するまでに、どんな（国の）人が関わっているのか考える T:普段どのような朝食を食べていますか。	○同じ資料を読み合うグループを作り、資料を読む

07 板書計画

めあて	身近な食べ物は、どこから来てどんな国の人が関わっているのだろうか		
予想	各グループの考え		
・アメリカ ・中国 ・オーストラリア ・カナダ ・海外の物が多い のではないかと ・野菜は日本の物 が多いかも			
まとめ			
日本は、様々な国から食べ物を輸入している。また、様々な国の人が関わっている。			

08 評価規準に基づく本時の評価方法

ワークシート・発言・話し合い

09 学校外との連携（※該当のある場合）

なし

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

児童は当初「知っている国はありますか」という質問に対して「アメリカ」「中国」「韓国」などと積極的に国の名前を言っていた。しかし「アメリカの有名な物は知っていますか」と聞くと「わからない」「国の名前を知っているだけ」と答えていた。

そのような中で、パラグアイの場所・町の様子・学校などの写真を見せ話していくと「こんなに海外の国についてじっくり見たのは初めて」という発言があり、日本と似ているところや違うところを進んで探し始めるようになった。また、「なぜ」「どうして」という疑問も持つようになっていった。

身近な食べ物が、どのような国から来ているのかについて学習した際は、「海外に頼っている」「野菜は、日本も多いから日本の物ではないか」という予想を立てていた。資料を読み込んでいくことで具体的にどの国から来ているのか、そして日本で育てている鶏なども餌は海外の物を使っていることなどを知ることができた。また、振り返りを見てみると「他の食べ物がどの国から調べてみたい」「スーパーでどの国から来ているか見てみる」と身近な物がどこから来ているのか、知ろうとする態度も見られた。

パラグアイと日本の繋がりについて、日系社会の話をしていくと児童はパラグアイの事を知らなかったけれども、パラグアイに日本のルーツをもつ人々がいることに驚いていた。そして、自分たちは海外について名前しか知らず国のことを深く知らなかったと振り返っていた。

食品ロスや飢餓について、日本の食品ロスについて大量の食品が捨てられている動画を児童達に見せた。思っている以上に多いこと、に驚いていた。また、飢餓について世界でこのような問題があることにも驚き、「このままではよくない」「何かできることはないのか」と解決策を考えようとする姿が見られた。各自、自分たちでできることを考えていった。

最後の振り返りを見てみると「海外の事は知っている気になっていた。パラグアイのことや他の国をもっと知りたい。」「飢餓や食品ロスについて、自分たちができることは小さなことかもしれないが続けていくこと、考えることが大切」と記述していた。海外について、より深く知ろうとしましたこの先の未来について考えていく児童の変容が見られた。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

海外研修で、パラグアイで働く日本の方や日系の方の言葉や姿が印象的でした。MIDORI 工房では、主宰の立川さんが、森林伐採が問題視されている中でパロサントという端材が破棄されていることに着目して食器などの制作をしていた。自身の工房の発展だけでなく、パラグアイの地位向上のために自分たちの持っている知識や技術の普及も行っていた。萩原工業では、バルチップという製品や環境への配慮の話聞くことができた。その中で、パラグアイは「Amigo」という相手を大切にす文化を知り、萩原さん自身もパラグアイの文化を尊重し従業員の方その家族を大切にす思いを聞き、従業員の方も萩原さんを信頼し笑顔で仕事をしている姿を見ることができた。この2人の日本人の話聞き、こんなにパラグアイのことを大切にす日本人がいること。そしてなぜ大切にすのか、児童に伝えたいと思った。

また、パラグアイに長く住む日系の方は、どのような思いで生活しているのか大変興味深くなってきた。日系社会では、日系2世の大豆などの大規模農場の経営者大西ホルヘさんの話が印象に残った。収穫された大豆は、ブラジルなどへ輸出しているが日本へ輸出するために少量栽培していた。日本への輸出費や厳しい検査があるのになぜ作っているのかという疑問に対して「1世からの日本とのつながりを継承したい。また将来の日本の食料危機が来た時に備えて」と話していた。また、東日本大震災際に豆腐の支援を行っていたという。その話を聞いて、児童に、パラグアイでずっと育った日系の方が遠い日本の事を思っていることを伝え、身近な食べ物がどこから来ているのか、その食べ物を大切にしているか・世界で起きている飢餓の問題について考えさせたいと感じた。

12 苦労した点

実際に行っていない児童に、パラグアイのことをどのように伝えていくのか、びっくり体験にならないためにはどうしたらいいのか、4年生の発達段階に合わせてどのように授業を導入していくか考えることに苦労した。また、食との関連で食品ロスや飢餓について触れていったが、食料に困ったことのない児童にどのように自分事として捉え考えることができるのか、児童が自ら考えていくためのアプローチの仕方がとても難しかったと感じる。

13 改善点

・本時の授業では、児童の実態に合った資料の選定を行う必要があった。今回は、児童が習っていない漢字もあり分析に時間がかかっていた。また、各グループの発表を行う際も他のグループの意見と関連させ、児童の言葉をつないでいく必要があった。

・食品ロスや飢餓については、説明や映像で授業を進めていったが、SDGsについてももう少し詳しく学習し関連させながら考える必要があった。また、自分たちにできることについて考えていったが、家庭や学校で実践し振り返る取り組みを入れたらよかったと思う。

・栄養士、教師海外研修の同じテーマ先生のクラスとつながるなど他者を巻き込んで行うことで、児童の理解も深まったのではないかなと思う。

14 成果が出た点

- ・地図帳を見るたびに「パラグアイ見つけた!」「パラグアイの近くにはブラジルやアルゼンチンがあると話す姿が見られた。また「アメリカの学校はどんな様子だろう」「中国の町の様子を知りたいな」「この前スーパーでオーストラリアの物が売っていた」と海外のことを深く知ろうとする姿が見られた。
- ・本校は、観光地の近くにあり外国人観光客も多い。その人たちと交流して川越や日本のよさを知ってほしいという願いをもつ児童が出てきた。
- ・SDGsの他の項目について知り、自分たちにできることはもっとないのか意欲的な姿が見られた。

15 自由記述

年度当初、児童には「何かこの1年1つでもいいから挑戦しよう」と話しています。挑戦を恐れず一歩踏み出すことで、自分自身の成長や様々な感動を得ることができると自分の経験から感じているからです。今回の教師海外研修の参加は、子ども達を世界につなげる窓口になりたい。子ども達に生きた国際理解教育をしたいという挑戦からでした。

パラグアイでは、たくさんの人々との出会い、経験、話を聞くことができました。また、自分の中で出た思いやもやもやを、毎晩一緒に参加した先生方と振り返り、新たな視点や共感を得ることができました。自分の考えの変化や新たな視点は本当に、楽しくて時間があっという間にすぎ「もっと話したかったな」と感じ隙間時間を見つけては、先生方ともやもやを共有する時間をつくりました。自分の考えを言語化し他者と共有することの大切さを実感することができました。

今年の授業は終わりましたが、今年だけではなく、この先も海外研修で学んだことを児童に伝えていきたいと思います。今回このような素晴らしい研修の機会を与えていただいたJICAの皆様・一緒に参加した先生方・パラグアイの人達・本校の職員・家族に感謝しています。

【答えのない問い】

世界の人々となかよし大作戦

【実践者】

氏 名	渡邊 恋子	学校名	長岡市立大河津小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	2年1組（22名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年9月～11月（8時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

- ① 道徳・国際理解、国際親善
- ② 学活・（2）イよりよい人間関係の形成

02 単元名と単元目標

単元名：世界の人々となかよし大作戦

単元目標：食べ物を通じて、他国の人々や文化に親しみ、他国の人と関わる意欲や関心を高め、進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

関連する学習指導要領上の目標：

- ①他国の人々や文化に親しむこと
- ②学級や学校の生活において互いのよさを見付け、違いを尊重し合い、仲よくしたり信頼し合ったりして生活すること

03 単元の評価規準

① 知識・技能	世界には、さまざまな言語や生活、文化があることを知り、日本との相違点や共通点に気付くことができる。
② 思考・判断・表現	他国の人々の文化を想像したり、相手の気持ちを考えてより良い関わり方を考えたり、話を聞いたりしている。
③ 主体的に学習に取り組む態度	他国の人々に関心を持ち、進んで関わろうとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

本校児童は、1つの保育園から同じ小学校に入学し、新しい集団と交流することがない。外国にルーツを持つ児童は1名いるが、地域では他国の人を見かける機会もなく、他国に対してもマイナスなイメージをもっている。留学生と交流をすることで、他国に対するマイナスなイメージが変わり、異なる文化の

良さを感じたり、さらに他国のことを知りたい・親しみたいという気持ちを高めたりしながら本実践の取組を進めていきたい。

〈児童/生徒観〉

これまでに外国のイメージを尋ねると、戦争・ミサイル・人々が逃げる姿を想像し、言語が話せなければ、仲良くなれないと感じていたり、「なんとなくこわい」と抽象的な感想をもったりしていた。また、これまでに家族や親戚が外国に行ったことがあるかを尋ねると、約半数の児童が「わからない」と答えた。児童の発達段階からみても、まだまだ国際的な視野に立って物事を考えることは難しいと考える。

〈指導観〉

他国の人と関わるイメージをつかみやすいように、教師のパラグアイでの体験を想像して考えたり、交流会を2回行うことにより、1回目の交流での反省や改善点を、さらに次の交流や活動に生かしたりする姿を目指す。この単元の学習を通して、言葉や文化が違うからこそその関わりの難しさと、それを乗り越えて分かり合えたときの喜びを感じさせながら、よりよい関わり方という答えのない課題に対して、自分なりに考え、実際に触れ合おうとする姿勢を育みたい。

05 単元計画（全8時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 ～ 2	他国の異文化体験	他国の文化を初めて体験するときの不安な気持ちと、楽しい気持ちの両面を考える	・外国に対する不安や恐怖は何から感じるものなのかを考える ・教師のパラグアイでの体験を想像する
	資料・教材など 心の数直線（タブレット）、パラグアイで購入したもの（アサードの塩）、地球儀、ワークシート（ジグソー活動）		
3 本時	交流会を企画しよう	他国の人々に対するより良い関わり方を考える	・なぜその内容が良いのかを考える ・企画の内容を共有する
	資料・教材など ワークシート		
4	交流会をしよう①	他国の文化を知ったり、日本を知ってもらったりする喜びを知る	・講師の先生による自国の紹介 ・異文化を一緒に楽しむ
	資料・教材など スライド、ロテリア（カードゲーム）、音楽（講師の方が用意）		
5	交流会①を振り返ろう	より良い関わりについて考えたり、話し合ったりすることができる	・1回目の交流会の経験から、2回目の交流会の内容を考え直す
	資料・教材など		
6	お楽しみ会をしよう②	他国の文化を知ったり、日本を知ってもらったりする喜びを知る	・他国の文化のクイズ大会 ・日本の遊び（けん玉）を教えてあげる ・一緒に協力し、関わるあそびをする（大縄・かもつれっしゃ） ・一緒に給食を食べる

	資料・教材など クイズのスライド、大縄、けん玉		
7 ～ 8	全校のみんなに発表しよう	全校のみんなに伝えた いことを考える	・交流会の前後で外国に対するイメージの変化 を伝える ・他国のあいさつのクイズづくり
	資料・教材など 活動の様子の写真		

06 本時の展開（3 時間目）

本時のねらい：お互いのことを「知る」ためのお楽しみ会を企画することができる。

過程・ 時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・ 指導形態	指導上の留意点 (支援)
導入 (10 分)	○前時想起する T：みんなは世界の人となかよし名人！他の国の人と会ってみたいですか？ C：会ってみたい ○第 1 回交流会の留学生講師の紹介 T：アレックスさんと最初にあったら何をしたらいいと思いますか？理由も教えてください。 C：あいさつ ○本時の課題設定「第 2 回交流会のめあて」の確認 ◎10/25 お楽しみ会の内容を考えよう！～どうやったら、なかよくなれるかな？～	留学生のプロフィールを伝え、イメージを持たせる。
展開① (20 分)	1 グループで他の国の人とどんなことをしたり聞いたりしたいかを考えて話し合い、それぞれの考えを発表する。 C：相手の国のいろいろなお話を質問して聞きたい C：日本の遊び（けん玉）を教えたい C：一緒に給食を食べたい	留学生の国だけを伝える。自分たちが楽しいと思うだけにならないよう、その都度めあてを確認する。
展開② (10 分)	2 互いの意見を交流する	したい遊びとその理由について、似ている意見をまとめていく。
まとめ (5 分)	まとめ 会って話をしたり、一緒に遊んだり、なかよくなる方法はいっぱいある！	

使用する資料・教材：ワークシート

07 板書計画

なし

08 評価規準に基づく本時の評価方法

発言・ワークシート・交流の様子

09 学校外との連携（※該当のある場合）

長岡国際交流センター「世界が先生」

長岡技術科学大学 留学生

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

外国に対するイメージの変容 交流前と後のアンケートから

	交流前	交流後
A 児	なんとなくこわい	こわいものはもっていないとわかった
B 児	ミサイルがこわい	人はそれぞれ違うと思った
C 児	なんとなくこわい	外国にも優しい人がいると思う

交流後のふりかえりから

D 児 留学生と会うことができて、元気が出た。ぎゃくに留学生が僕たちを楽しませてくれたから、全員が楽しめた。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

日本とパラグアイのつながりを知り、パラグアイに住む人々の話を聞いたり、触れ合ったりすることで、その国やその人ともっと関わりたい、知りたいという思いが深まった。児童たちには無関心・無知なままではなく、相手と関わったり知ったりすることの楽しさを感じながら、様々な違いを受け入れられるようになってほしいと思った。

「日本人」⇔「パラグアイ人（外国人）」のどちらかではなく、現実のアイデンティティの多様性（日系人、日本生まれ・日本人育ちの外国籍の人）などについて、伝えていきたいと考えた。

12 苦労した点

児童は他国の人と接する機会がほとんどないため、関わる時に考慮すべきことの想像が及ばないことが多々あった。交流内容を考えるときには、「言葉の違い」や「文化の違い」を想像させたり、「自分たちが楽しい遊び」＝「（きっと）留学生も楽しめる」という考えから脱却させたりすることに難しさを感じた。

13 改善点

交流内容を考える前に、「日本の文化との共通点」と、「日本の文化との相違点」を考える授業をすることで、他国への文化の興味関心を高めていけたらよかったと思う。

交流内容を考える際に、「様々な違いがあっても、相手も自分たちも楽しめる共通点を探す。そのために相手の文化・宗教・習慣などを考慮する」という視点を持たせたうえで考えさせるとよかったのではないかなと思う。

14 成果が出た点

ドキドキ感・わくわく感を持って交流に臨むことができ、交流前と後では外国に対するアンケートの結果が大きく変容した点である。振り返りでは、友達になるためには、「自分から聞いたり話しかけたりすることが大切」と答える児童が半数を超え、ALT との授業もさらに積極的に取り組むようになった。

世界に関する本を読むようになったり、国旗やアルファベットに興味を持ち、自主学習で取り組んだりする児童が増えた。また、家庭内で交流の様子を話す子どもも多く、保護者からも「国際交流ができてよかった」との意見を多数いただいた。

15 自由記述

今回の授業実践を通して、県内にはいくつもの実践や研修がたくさんあり、見る視点を変えるだけで授業の材料になることに気付いた。自分が想像していた以上に子どもたちは外国人を受け入れることに柔軟であり、余計なフィルターの一切かかっていない素のままのうち解け方には大人以上のパワーを感じた。これからの国際理解教育が楽しみである。

本研修で得た経験を生かし、持続可能な社会の創り手を育てる授業実践を目指して、今後も授業を通して子どもたちに還元していきたい。

【経済成長の光と影】

Ethical Fashion

～ファストファッションが引き起こす環境問題～

【実践者】

氏 名	清水 紀恵	学校名	群馬県立尾瀬高等学校
担当教科等	英語	対象学年（人数）	2,3年コース別合同（14名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年7,9月（8時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

英語

02 単元名と単元目標

単元名：Ethical Fashion ～ファストファッションが引き起こす環境問題～

単元目標：ファストファッションの背後にある問題点やエシカルファッションについて考える。

関連する学習指導要領上の目標：社会的な話題について、情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりする力を養成する。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	ファストファッションの背後にある問題点やエシカルファッションについて、多様な語句や文を用いて、情報や自分の考えなどを詳しく話したり書いたりして伝える技能を身に付けている。
② 思考・判断・表現	ファストファッションの背後にある問題やエシカルファッションについて、聞いたり読んだりしたことを活用しながら、情報や自分の考えなどを詳しく話したり書いたりして伝えている。
③ 主体的に学習に取り組む態度	ファストファッションの背後にある問題やエシカルファッションについて、聞いたり読んだりしたことを活用しながら、情報や自分の考えなどを詳しく話したり書いたりして伝えようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

本校は、群馬県北部の山間に位置する全校120名に満たない小さな学校である。全国でもめずらしい自然環境科には生物や植物、山や川といった自然を愛する生徒が全国から集まっており、普通科には尾瀬国立公園をはじめとする大自然の中で育った地元の子どもの多い。普通科の生徒の中には、「ここは山しかなくてつまらない」「虫なんて好きじゃない」という意見をもっている子もいれば、「都会に比べて空気がきれい」「水がおいしい」「こんなに新鮮な野菜や果物が食べられるのはここだけ」など、郷土

愛に満ちた生徒が共存している。一人ひとりの思いは異なるにせよ、本校の生徒にとって自然はとても身近な存在であり、自分たちと自然は切っても切り離せない関係である。

そのような環境にいる生徒たちにとって、目の前に当たり前にある自然と、今や日常生活に欠かせないファストファッションという身近な2つを題材にして環境問題について考えることは意義があることだと考えた。ファッションや流行といったものにさほど興味を示さない生徒も多いが、それでも高校生にとってファストファッションは安くてすぐに手に入る便利で欠かせないものであり、身近な存在だからこそ、ファストファッションの背後にある問題をより自分事として捉えられるはずである。

また、ファストファッションの背後にある問題は環境問題だけでなく、児童労働、貧困、教育の格差、女性の社会的地位など多くの問題が複雑に絡んでいる。本単元では、「ファストファッションの問題＝環境問題」と一面的なものの捉え方をするのではなく、環境・社会・経済が複雑に絡み合い繋がっていることに気づくことで、多角的にものごとを捉えるきっかけになると考えた。さらに、本単元を通じて本校のスローガンである「人と自然との共生」の意味を考えるきっかけにしたいと思った。

〈児童/生徒観〉

クラスには、幼い頃から地元の小さなコミュニティの中で育ち、「田舎は自然しかない」「つまらない」というネガティブなイメージを持っている生徒と、自然や生き物が大好きで自然環境を学びに県内外から本校に通っている生徒が共存している。

生徒たちは自分の興味のあることは探究心をもって調べたり、発表したりすることができるが、興味の範囲が限られており、他の事象との関連性まで意識できないことが課題である。好きなことや興味のあることが、実は他のさまざまな事象と関連していることに気づくことで、視野を広げてほしい。

特に、地元出身の生徒はずっと同じコミュニティで育ってきたため郷土愛がある一方、居心地が良いのかとても保守的で外の世界へ出ていくことに後ろ向きである生徒が多い。自分が育ってきた環境とは別の世界を知ること、新しい知識を得ることの楽しさや、異なる文化に触れる経験をして自分の世界を広げてほしい。

〈指導観〉

教科書では、前半部分でファストファッションの背後にある問題点について学び、後半部分でエシカルファッションについて学ぶ流れになっている。本単元では、一つ一つの商品の裏には必ず生産者がいて、私たちが購入する商品には必ず環境と繋がりがあるということについて生徒たちに深く考えてほしい。

また、単に「ファストファッションは買わない」「高くてもエシカルファッションを買う」という考えを持つのではなく、高校生である生徒自身ができる行動は何か、将来大人になってからできることは何かについて、教科書や教師の考えを押し付けるのではなく、生徒自身で答えを導いてほしい。

05 単元計画（全8時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 ～ 2	ファストファッションがもたらす「ゴミ問題」	ファストファッションが世界でどのくらい大量生産・大量消費されているのかを知ること、ファストファッ	①自分の購買行動について振り返る Q.服を購入するときに、何を一番重視するか？ ②ファストファッションの3つの原則を知る

		ヨンが引き起こす「ゴミ問題」を理解する。	1 安く 2 早く 3 最新の流行 ③ 3つの原則が引く起こすゴミ問題を考える Q. 全世界で購入されたファストファッション製品のうち、どのくらい（何％）が1年間で捨てられているか当ててみよう。
	資料・教材など ・教科書 Power On II（東京書籍） ・自作プリント		
3 ～ 4	ファストファッションがもたらす「労働者の低賃金問題」と「環境汚染問題」	縫製工場働く人々や、綿花栽培をする農夫の生活から、ファストファッションが引き起こす「労働者の低賃金問題」と「環境汚染問題」を理解する。	① 縫製工場の賃金が低い理由を考える。 Q. そもそも低賃金とはどのくらいなのか？なぜ、そこまで低賃金になってしまうのか？ ② 農薬や化学肥料の大量散布が引き起こす環境問題について考える。 Q. 農薬を散布する男性の写真がファストファッションとどんな関係があるのか？
	資料・教材など ・教科書 Power On II（東京書籍） ・自作プリント		
5 ～ 6	エシカルファッションとは？	労働環境にも自然環境にも配慮して作られるエシカルファッションについて理解する。	① エシカルファッションが何に配慮された製品なのかを知る。 1 環境にやさしい 2 生活賃金の支払い ② 商品と環境との関係について考え、自分自身の消費行動を振り返る。
	資料・教材など ・教科書 Power On II（東京書籍） ・自作プリント ・シャプラニール クラフトリンク		
7	大量のゴミはどこへ？	ファストファッションが引き起こすゴミ問題は他人事ではなく、自分自身も関わっていることに気づく。	○「尾瀬のゴミ問題」から、ゴミが環境へ与える影響を考える。 ○NHK for School「放置しないで！捨てられた衣服の山」を視聴し、チリ（アタカマ砂漠）、ガーナ（アクラ）で起きている甚大なゴミ問題について学ぶ。 ○持参した（集めた）服のタグを確認し、身の回りにある衣類のほとんどが日本国外で生産されていることに気がつく。
	資料・教材など ・パワーポイント資料 ・ワークシート ・尾瀬のゴミ持ち帰り運動以前の尾瀬ヶ原の写真 ・NHK for School「放置しないで！捨てられた衣服の山」 ・JICA 世界地図		
8 本時	「人と自然との共生」とは？	経済・環境・社会のつながりに気づき、本校のスローガンである「人と自然との共生」の意味を考える。	○環境省 HP「サステナブルファッション」の資料から、服1着の製造工程における環境負荷を予測する。 ○ファストファッションを買うか？買わないか？について、立場の異なる4者の視点でロールプレイを行う。

		○個人振り返り
	資料・教材など ・パワーポイント資料 ・ワークシート ・環境省 HP サステナブルファッション ・NHK for School「放置しないで！捨てられた衣服の山」	

06 本時の展開（8 時間目）

本時のねらい：本校のスローガンである「人と自然との共生」の意味を考える

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入（6 分）	○前時の振り返り Do you remember the purpose of this lesson? S : To think about “Coexistence of People and Nature”. ①前時で生徒たちが推測した、ゴミが環境に与える影響を Useful Expressions として復習。（全体）[3 分] ②Word Game（ペア）[3 分] Useful Expressions が一覧になったプリントを配布。 ☆じゃんけん勝→日本語の意味をランダムで読む ☆じゃんけん負→日本語の意味に合う英語を答える 1 分以内により多くの英語を答える。勝ち負けを入れ替えて 2 回行う。	・前時から引き続き同じ目標であることを再確認してから始める。 ・生徒が前時に実際に書いた付箋を見せ関心をひく。 ・Useful Expressions が本時の活動に役立つ重要なフレーズであることを事前に伝える。
展開①（10 分）	○ゴミ問題以外の問題について考える。（全体）[2 分] You’ve learned other problems caused by fast fashion, right? S : Farmers have to use a large amount of pesticides and chemical fertilizers. ○服 1 着の製造工程（原材料調達→紡績→染色→裁断・縫製）を確認した後、各工程における環境負荷を予測する。（ペア）[5 分] What kind of negative effects do these processes have? S₁ : Use pesticides when making cotton. S₂ : Pollute water when dyeing cloth. ○前時に、身の回りにある衣類の大半がバングラデシュを含む外国産だったことを再確認し、輸送でも環境への負荷があることに気がつく。（全体）[3 分]	・農夫が綿花農場で農薬を散布する写真を提示する。 ・導入で学んだ Useful Expressions を活用させる。 ・このタイミングで、服 1 着の製造工程には輸送というもう一つの工程があることを提示する。

→ 環境汚染はどうにかしたいが、工場労働者の生活を守ることが優先だと主張していた。

ただ、国などが労働者に支援金などを支払い生活が守られるならばファストファッションを買わずに済む…と最後まで悩み続けていた生徒。

生徒 B 前 Disagree → 後 Agree

Carbon dioxide and toxic gases shouldn't be emitted for our lives.

→ 確かに労働者の生活を守ること大切だが、人間の都合で環境汚染をするのは間違っていると述べた生徒。

生徒 C 前 Disagree → 後 Disagree

If we don't buy fast fashion, it's not in the worker's profit. Also, I have no money so I can't buy expensive clothes.

→ そもそもエシカルファッションなど高い服を買うお金がないと、高校生らしい率直な意見を述べた生徒。

生徒 D 前 Disagree → 後 Disagree

After role playing, I didn't change my opinion, and I considered about it deeply. Although it is harmful for creatures and environment to produce clothes, we must protect workers' lives in developing countries. They need money to live, so I think we don't have to stop buying fast fashion. Instead, developed countries like Japan can support them by providing money, skills, technology, and so on.

I guess we can reduce environmental issues with connection between countries. Therefore, I think what we people can do is considering about background of clothes. I wonder we should remake our used clothes.

→ 最初は賛成 or 反対と一つの意見に決められないと言っていた生徒。最終的に反対で意見をまとめてくれたが、先進国が金銭面や技術面での支援をすることや、着なくなった服をリメイクするなど様々な提案をしてくれた。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

国際協力の第一歩は、相手が抱えている問題の「理解」からはじまるのだと学んだ。また、「理解」することの重要性は国際協力に限らず、授業を行う上での題材理解や生徒理解などすべてに通ずるものだった。

また、僅かではあるが物事をいろいろな角度から考えられる様になったと感じる。今回のバングラデシュの政変一つを例に挙げても、中央集権かつ脆弱な政治の在り方を問題視する先生もいれば、これほど大きなデモを起こしたバングラデシュの若者のパワーに希望を見出す先生、対して日本の民主主義の在り方に疑問を呈する先生…と多種多様な捉え方、感じ方に触れることができた。得られる情報や見る角度によって同じ事象でもガラリと見方が変わるのでと実感する日々であった。

もう一つ、児童労働問題、貧困や教育の格差といった山積みの課題に直面しながらも力強く生きているバングラデシュの人々の生活を知り、「豊かさ」とは何かを考えさせられた。同時にそれらの課題はバングラデシュだけでなく世界につながり、世界の課題は地球全体の課題につながっていることを学んだ。そして、人と人も同じようにつながっていることに気づかされた。

生徒たちには、自分たちのいる地域だけでなく、もっと広く世界を見て、知ってほしいという思いで授業実践に臨んだ。また、一つの「好き」に没頭して研究している生徒には、それが他のあらゆる物や事象と関連している（する可能性がある）ことに気づくきっかけになってほしいと思った。

12 苦労した点

ロールプレイの登場人物とそれぞれの主張を考えることにもっとも苦労した。教科書ではファストファッションの負の側面がメインで書かれているが、実際にはそれにより恩恵を受けている人々が多く存在する。表裏一体となる関係性をもっとも伝わる登場人物は誰で、どのような主張にするべきなのか、同じチームの先生方にたくさんアドバイスをいただいた。また、登場人物の選択と主張内容によっては生徒の思考を誘導しかねない。研修で学んだことを各登場人物の主張に落とし込み、できる限り事実 に即した内容になるよう努めた。

13 改善点

英語の授業としては、ロールプレイでの日本語と英語の比率が最大の改善点である。今後同じような授業を実施する際は以下の2点も英語で挑戦したい。

- ・ロールプレイにおける登場人物の主張
- ・賛成 or 反対とその理由のライティング

また、本時では賛成 or 反対を個人振り返りとしてワークシートに記入させたただけだが、さらにそこからディスカッションやディベートで考えを共有したり深めたりできると良かった。

14 成果が出た点

- ・ロールプレイを取り入れたことで、ファストファッションを生産する開発途上国の人々の立場になって考えることができた。
- ・バングラデシュが日本で暮らす自分たちとどのような関係があるのか、という視点で学ぶことができた。
- ・ロールプレイの前後で自身の考えを変えた生徒、より具体的な理由付けができた生徒がいた。

15 自由記述

本研修の最大の収穫は、他の教員でもなく、AIでもなく、自分にしかできない授業をしてみたいという思いで授業計画を立てられたことである。教科書が同じであっても、生徒の実態の理解度合いや、資料の選び方・提示の仕方・見せるタイミング、活動の仕方によって生徒に与える影響は大きく変わるのだと再確認することができた。

本研修を通して、バングラデシュについて多くの知識を得られたことはもちろんだが、すべての講義やワークで新たな視点や考え方を得ることができた。講義やインタビュー、異文化体験もとても有意義であったが、校種も教科も経験も異なる先生方と意見を交わす時間はとてもワクワクするもので、今回の研修の一番の宝だと感じている。一方、知識経験不足で講義の内容を十分に理解できず自分の考えを上手くアウトプットできない日々は終始モヤモヤしていた。しかしそれも含め、とても充実した時間を過ごすことができた。

バングラデシュで、なぜ縫製業？

【実践者】

氏 名	太田 祥子	学校名	私立駒場東邦中学校
担当教科等	地理	対象学年（人数）	2 年（1 クラス男子 40 名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024 年 11 月（50 分）× 3 時間 × 6 クラス		

実施概要

01 実践する教科・領域

世界地理（南アジア）

02 単元名と単元目標

単元名：南アジアの産業

単元目標：他者の立場から考える

関連する学習指導要領上の目標：問題解決能力、説明力、協調性

03 単元の評価規準

① 知識・技能	指定の資料をもとに考えられるか
② 思考・判断・表現	他者の立場や状況を理解して考えられるか
③ 主体的に学習に取り組む態度	問題解決について、自分の立場から発表できるか

04 単元設定の理由・単元の意義

海外に興味はあるが、日ごろのニュース程度しか知識はなく、途上国は「怖い・遅れている・日本が安全で居心地がよい」と思う生徒が多い。商品は「安ければよい」という見方しかできず、生産国の事情や安さの背景には考えが及ばない。

05 単元計画（全 3 時間）

	学習のねらい	学習活動
1	南アジアの地誌全般を学ぶ。特にバングラデシュについては、地形・人口構成・産業の現状とともに、気候変動による影響や貧困問題、政治概要について学ぶ。同時に、身近に感じてもらうために、食	バングラデシュを中心に、アジアの基礎的な知識を学ぶ。（地形、人口ボーナス、主要産業、言語や宗教など） 【研修との関連】 在日バングラデシュの方のお話や、東十条でのモスク建設やハラール店を通じて、東京からでも見られる南ア

	文化や現地の学校の様子なども紹介して、興味を促す。	ジヤやムスリムの生活習慣を紹介する。バングラデシュ以外の南アジアの宗教や文化も紹介し、南アジア内の多様性も伝える。
	資料・教材など 地理資料集（フォトグラフィア・とうほう出版）より：SDGs 紹介ページ・P156 貧困をなくそう（バングラの洪水）P164 ジェンダー平等（児童婚）、P179 つくる責任（アパレル産業）の写真など	
2	なぜ縫製産業が発達したのかについて、（生徒が答えとして既に想定している）人件費の安さ以外の要素（人口構造、外貨獲得、ジェンダー不平等）などの観点から複合的に考える。途上国での生産品が安価であることの問題点を、労働条件や安全基準や経済構造などの着眼点から思考させる。	身近な衣服を例に、ファストファッションの特徴を考えた上で、低価格の原因について考察する。 縫製ビル工場倒壊事故とアパレル産業の問題をグローバルな視点で考えるために、ドキュメンタリー「トゥルーコスト」を視聴（15分程度）し、事故の悲惨さや現地の下請け企業の厳しい現状を紹介する。事故を受けて、その後の縫製産業が衰退したのか、労働者の安全水準や賃金は向上したのかについて考えさせる。さらに、次回授業につなげるために、SDGsの目標内容について復習する。 【研修との関連】 縫製工場で、中学卒程度の女性の働き手が多い背景（学校教育の問題点、女性の社会進出の課題点など）について、具体的に補足説明する。
	資料・教材など 貿易統計、産業別のGDP、ラナプラザの事故写真や背景、映像資料「トゥルーコスト」	
3 本時	ある社会問題は、「特定の悪い人」がいるために起こるのではなく、背景には複雑な要因があり、異なる立場によって、「経済成長・豊かさ」を目指す目的や手段が異なる場合があることを、他者の立場に立って考えさせる。	各班での話し合い → 6つの班で発表 聞き手側はふりかえりシート記入 賛否そのものよりも、理由に関して、「かわいそう」などの感情ではなく、貿易や経済状況など配布資料から読み取った内容を基に、考察・発表させる。 6つの班の発表を聞いた後で、自らの振り返り（990円のTシャツを買うか否かの意見は変わったか？など）や日常生活との関連について、考えをまとめる。 【研修との関連】 ロールプレイの方法論の応用、バングラデシュの地域概要の情報（研修時に使用した資料より）
	資料・教材など バングラデシュ概要の資料プリント、ロールプレイの原稿など	

06 本時の展開（3時間目）

本時のねらい：ある社会問題は、「特定の悪い人」がいるために起こるのではなく、背景には複雑な要因があり、異なる立場によって、「経済成長・豊かさ」を目指す目的や手段が異なる場合があることを、他者の立場に立って考えさせる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (10分)	バングラデシュ概要の復習、ロールプレイの意図説明	「他者の立場に立つ」意義やSDGsの説明
展開 (30分)	6つの役割（政府の役人、下請け工場主、先進国のアパレル社長、ダッカ大学の学生、ダッカの少女、東京の大学生）の立場に立って、「賃金を上げて、安全基準を守るべきだ」という意見に、「賛成・反対か」を班で考えさせる。その際、SDGsの中で、どれを最も重視するかについても、決める。	選べない役割からの想像力の育成 貧困や社会問題を解決する難しさ
考察 (10分)	賛否そのものよりも、理由に関して、「かわいそう」などの感情ではなく、貿易や経済状況など配布資料から読み取った内容を基に、考察・発表させる。 同じ目標を目指すのでも、立場による手段の違いや対立が生じる場合があることの理解	

使用する資料・教材：バングラデシュ概要の資料プリント、ロールプレイの原稿など

07 板書計画

PPT を使用

08 評価規準に基づく本時の評価方法

発言回数の差はあったが、各班で話し合いが活発にできていた。時間が足りない中で、出た意見をまとめて発表する努力をしていた。他者の立場に立って考える難しさを実感できていた。

09 学校外との連携（※該当のある場合）

なし

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

「社長なら、利益を優先したい」「労働者なら、賃金をあげてほしい」「SDGsを目標にすると、自分のことだけを考えられないから、難しい」・・・など、消費者個人の立場からは、普段は思いつかない想像力を働かせていた。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

貧困問題や社会問題は「誰かが悪い」から起こるものではないことを、日常の消費者の立場を離れて、SDGsの視点から考えてもらいたかった。

12 苦労した点

バングラデシュ一般事情説明、ジェンダー問題、貧困と教育問題への説明が時間的に不足していた。特に女子中学生の就労状況については、想像させることが難しかった。

13 改善点

- ・事前に国情報への理解をより深める。学校教育と貧困との関係を理解させる。
- ・バングラデシュの今後の可能性について、紹介したかった。

14 成果が出た点

- ・自分の利益や都合だけではなく、貧困や環境問題など、地球全体の利益を考える視点が大切であることを伝えられた。

15 自由記述

本校生徒の課題（数字で考えがち、利他的な立場にたちにくい）などの課題が見えた。

【経済成長の光と影】

国際理解と国際協力 ～世界の産業と人々の生活～

【実践者】

氏 名	澤田 将智	学校名	埼玉県立不動岡高等学校
担当教科等	地理総合	対象学年（人数）	1年4組（39名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年11月 ～ （2時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

地理総合・工業分野

02 単元名と単元目標

単元名：国際理解と国際協力 世界の産業と人々の生活/人々の生活を支える工業の発展

単元目標：

- 工業立地について理解する。
- 労働集約的な工業立地の理由を理解する。
- 新興工業国での工業がもたらす正と負の影響とその生じる理由について理解する。

関連する学習指導要領上の目標：

「社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」

- (1) 地理に関わる諸事象に関して、世界の生活文化の多様性や、防災、地域や地球的課題への取組などを理解するとともに、地図や地理情報システムなどを用いて、調査や諸資料から地理に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との相互依存関係、空間的相互依存作用、地域などに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- (3) 地理に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の国土に対する愛情、世界の諸地域の多様な生活文化を尊重しようとするものの大切さについての自覚などを深める。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	①人々の生活文化が自然環境や社会環境に影響を受けたり、与えたりすることを理解している。 ②国内の産業構造の変化を通して世界の国々の産業構造の変化を理解している。
② 思考・判断・表現	①統計資料から産業の変化やそれに伴う生活文化の変化について考察している。 ②地図や統計資料から考察した内容を自身の文章で表現している。
③ 主体的に学習に取り組む態度	①産業や生活文化について、統計資料等から考察した内容を日常生活に当てはめ、自身の生活に生かそうとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

今年度初の授業である。テーマは「工業について考える」とし、工業立地論としての正しさと、現実にかき起こる様々な歪みについて生徒が初めて考えるきっかけづくりとした。

〈児童/生徒観〉

1 - 4 (39名)

通常授業の雰囲気は良好であり、グループワークにも男女関係なく全体で積極的に関わろうとする空気がある。一方で、討論内容については幼い部分も否めず、良い意味で高校 1 年生という様子が見られるため、討論の時間の際には教員からの助言等が必要な場面が多い印象がある。

〈指導観〉

昨年度より、知識補給とした従来型の板書による授業と、様々な手法を用いたグループワーク型の協調学習を組み合わせた授業展開を導入している。今回はその工業分野の回にあたる。

単元全体は 2 回の構成となっており、1 回目に板書により単元の基本事項を説明した。特に、A.ウェーバーの工業立地論については大学入試においても重要事項である。

05 単元計画 (全 2 時間)

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	人々の生活を支える 工業の発展	工業の概論を知る	・教科書内容の講義
	資料・教材など	教科書、資料集、地図帳、授業プリント、授業スライド等	
2 本時	人々の生活を支える 工業の発展	工業の理論上の正しさと 現実世界で起きている ことを知る	・グループワーク ・ダイヤモンドランキングの作成と発表
	資料・教材など	教科書、資料集、地図帳、授業プリント、授業スライド等	

06 本時の展開 (2 時間目)

本時のねらい：工業の理論上の正しさと現実世界で起きていることを知る

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (10分)	①話題提供 T:「私の服装がいつもと違います。」 「共通点があります。」 「Made in Bangladesh。」 T:「以前 F ホールで映画を見ました。」 「その監督メッセージをまず見てください。」 5分程度映像 T:「今日考えるテーマは、工業の立地についてです。」 ②資料配布 T:「繊維工場の労働立地は理論上正しい。」 ③本時の説明 T:「理論と現実とのはざままで君たちは考える。」 「グループはいつもの。」 「ダイヤモンドランキングのテーマは、<u>現地の人が</u>何とかなした と思う順番とは。」	この定義づけをどうするのか生徒に決めさせる
展開 (25分)	①ダイヤモンドランキングの作成 T: (開始5分後)「現地の人の定義は何か。」 「各班でネットを使いながらも考えて。」	
まとめ (15分)	①発表グループで集合 T:「現地の人をどう、定義づけしたのか。」 ②発表 T:「電子黒板に画面共有をしてください。」 ③感想記入 T:「本日の授業を経て考えたことを、思うままに記入してください。」	集合場所の指定、グループの把握を展開中に済ませておく。

使用する資料・教材：

- ・帝国書院『高等学校 新地理総合』
- ・とうほう『新編フォトグラフィア 地理図説2024』
- ・帝国書院『新詳高等地図』
- ・自作プリント

07 板書計画

なし

08 評価規準に基づく本時の評価方法

- ・知識技能…期末考査における空欄補充問題の成否
- ・思考判断表現…期末考査における記述問題の成否
- ・主体性…本時の内容をまとめた感想文の提出状況

09 学校外との連携（※該当のある場合）

なし

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

以下、生徒の感想より引用

・様々な事を招いていると思うが特に、女性の長時間労働や小さい子共の労働が深刻だと思った。学歴に関しては、1番負の連鎖を止めるのが難しいと思うから。子供が教育を受けられず、学がない人が国中増えてしまって、結果国としての発展が難しくなっているように思う。

授業を受ける前から、この問題については深刻だと思っていたが、こんなにも深刻だとは思っていなかった。（女子生徒）

・どの班も環境問題がランキングの一番最後にあり、地球温暖化が進む今の世界で、利益や経済成長を求めると後回しになりがちなのかなと思いました。労働者目線で考えると、労働環境や労働時間、低賃金労働などを改善したいが、経営者や政府の立場で考えると労働状況に目は向けない現状があると思います。全てを一度に改善することは難しいけれど、少しずつ出来るところから良くしていくことが大切だと思います。服の値段が安くなることは消費者側としては嬉しいけれど、その背景には低賃金長時間労働で空調設備もなく、室温と湿度が耐えられないほど高く、トイレからも悪臭が漂うという厳しい環境の中で働いている人がいることを知りました。誰かが幸せになると世界中の別の誰かが辛い思いをしてしまうことは本当に胸が苦しいです。世界中の人が明るい生活になるように考えていかなければならないと思います。（女子生徒）

・できるだけ低いコストでお金を儲けようと企業が思うことは全然悪くないと思うが、それを優先しすぎて労働者が身体的にも経済的にも、精神的にも苦しんで良いわけはなく、まずは労働者が気持ちよく働けるような環境を整備するべきだと思う。やはり労働者の労働環境は整うべきであると思うし、そうすることで労働者の仕事に対しての印象や熱意がよい方向に変化していき、さらに良質な商品を作っていけると思う。（男子生徒）

・私たち（先進国の人）は安価な衣類を求めている。そのため現地の人は低コストで大量生産することで利益を上げている。低コストで服を販売するには安い労働力が必要となる。安い労働力を求めるあまり労働者は劣悪な環境で長時間・低賃金で働かされざるを得なくなる。そのことを受けて私は、現地の人達がとても気の毒に思った。しかし、私たちはその人達に対して、お金を与える訳でも服を手際よく作る機械や知識を与えてあげている訳でも無い。とても複雑だが、途上国の人達がいるから私たちは安価な服を手に入ることができている。先進国は、どれだけの途上国の人たちからの恩恵を得て今の自由な暮らしができていのかを分かっていないのではないかと。「途上国は自分たちで発展していけばいい」という考えは間違っているし、「途上国で作られた安価な服を大量に買ってあげよう！」という考えは、思いやりとは正反対だと思う。先進国の人達は、安価な服を買ってあげることで、途上国の人に利益をもたらすことに繋がり、途上国を支援している と思っているのかもしれないが、それは勘違いだと思う。安価な服を買う前に、もっと支援してあげるべきことが沢山あると思う。←改善されない労働環境の解

決に向けて現地に行き現地の人話を聞いてみるという途上国に寄り添い行動を起こす事が必要だと思った。(女子生徒)

・初めは働く女性の視点で考え、違法建築物での労働が一番改善したいこと、次が労働・衛生環境と低賃金労働だった。雇っている側は安く従業員を働かせて良い暮らしを単一で送っているのだと考えていたけど、話し合っていく中で安い賃金の仕事を取るのは、労働者を思っていることではないかと考えるようになった。それは、企業側ができるだけコストを低くし、安く売り、利潤を作るかを求めて工場に依頼をする形があるからだと思う。希望の安さで依頼ができなければもっと安いところに依頼をされるから、安い依頼でも受けいれざるを得ないと思う。だから思いやりゆえだと思った。また、教育に関心のある親ではないと長子が当然のように働き始めるため、それを見た下の子供も働き始め、貧困の連鎖につながったと思った。もし上の子が下の子の学費のために働いたとしても、そうなるようでは本末転倒なので、国が金銭面の援助をするべきだと思った。しかし、国も援助できない体制であると思う。先進国に少しでも追いついていこうと工場を建て、他国からの依頼を請け負っても、低い賃金なら国にもお金が入らず、立て直そうにも国民の教養から何から着手する必要があると思えないと思う。人の営みをする上で環境は必要不可欠だけど、それ以前に住まう人の人命を優先するのが常識であるから、環境問題の解決は遠いと思う。そこまで行くには企業は、公正な価格で取引をすること、雇用者は、労働者を保護することが大切だと思う。そのためには私たち消費者は安くなったものでないものを買わなくては行けないと思った。(女子生徒)

・働いている建物が違法建築物であることがあることを初めて知りました。女性の立場で考えたので、最初は女性の地位が1番大切だと思ったけれど、話し合っていくうちに女性の地位よりも先に解決しなければいけないことや、それを解決することで自ずと他の問題も解決されるから優先してほしいと現地の人々が考えるであろう問題があることに気づくことができました。しかし、考えても考えても疑問や、少し考え方を変えただけで同じ女性の立場からでも優劣が大きく変わってしまうなと感じました。また、やはりどうしても日本人の立場から見た考えが入ってしまうので本当に難しかったです。だから解決されない問題がまだまだ沢山あるのだろうと改めて思いました。1つの立場に立って考えようとしてもこれほど難しいのだから、様々な人の立場に立って考えるのはやはり難しいので、企業や政府が求められていることは、とても大事である上にとても難しいのだと実感しました。(女子生徒)

・今まで服が安くすぐ買えることに何も疑問を感じていなかったが、今回の授業を通して服に対する印象がガラッと変わった。中国やベトナム、バングラデシュでたくさんの服が作られていることは以前から知っていたが、そこでどんな人たちが服を作ってくれているのかまで考えたことはなかった。私は服に限らず、海外進出する企業には現地の労働者の生活を保証する義務があると思った。会社としての利益を追求するだけでなく仕事場の整備、賃金の改善が重要だと思った。(男子生徒)

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

立場の差異で、意見が変わる。日本の目線での援助が失敗に終わるということがある、ということから、ものの見方・視点を変えて考える必要性。

自分たちが思っている以上に、現地の利害関係は複雑であり、単純化できないということ。

12 苦労した点

・どこまで討論の結果をもやもやで終わらすことができるのか。

13 改善点

- ・情報を盛り込みすぎているため、生徒の情報処理が大変であった。
- ・条件が複雑であるため、どの立場に立つのかを想定することが難しい。
- ・授業のゴールがどこにあるのかイメージしづらい。
- ・生徒に事前に考えさせた条件設定でもよかった。

14 成果が出た点

- ・事前の仕込み（映画視聴や各種グループワーク）が効果的に作用し、生徒たちはよく議論というものに抵抗なく授業に参加していた。
- ・情報学習室の ICT をふんだんに活用することができた。

15 自由記述

生徒の感想文は美辞麗句ばかりであるが、新たな気づきや視点の発見につながったことは確かなのではないかと考えている。地理総合は開発教育の宝庫であるからして、今年度は現地に行けなかったけれども授業実践の計画に支障をあまり感じることはなかったように思う。次年度以降では、逆にどこか現地に行くことでリアルな視座に立った完成される授業実践が生まれると思うと、今後の教育活動に希望が見える 1 年間であったように考える。

話そう、子どもの権利

【実践者】

氏 名	高橋 絵理	学校名	白百合学園小学校
担当教科等	外国語科(英語科)	対象学年(人数)	6 年校組(39 名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2024 年 10 月～11 月(全 5 時間)		

実施概要

01 実践する教科・領域

総合的な学習の時間 × 英語

02 単元名と単元目標

単元名：話そう、子どもの権利

単元目標：児童労働の問題から、子どもの学ぶ権利が尊重されない社会があることを知る。そして、自分の人生を選択していく上で自らが大切にしたい権利について思考する。

関連する学習指導要領上の目標：

〈総合的な学習の時間〉

探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

〈外国語科〉

聞くこと：ウ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、短い話の概要を捉えることができるようにする。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	・児童労働ワークを体験することで、児童労働の問題が引き起こす社会的葛藤に気付く。 ・児童労働の問題から、子どもの学ぶ権利が尊重されない社会があることを知る。
② 思考・判断・表現	・児童労働ワークに出てくる登場人物それぞれの思いに気づき、課題を自分事としてとらえ、意見を表現することができる。 ・子どもの権利条約と自分たちの生活を結びつけ、友達とともに大切にしたい権利を考えることができる。
③ 主体的に学習に取り組む態度	・児童労働ワークやシャプラニールの講義、子どもの権利条約ワークを経て、自分が社会で生きていく上で大切にしたい権利や守りたい価値観を構築している。

04 単元設定の理由・単元の意義

本校はカトリックのミッションスクールであり、「自他を大切にする愛の心」の育成を重視しているが、児童は自己や他者のことをどれほど大切にできているのか、ふと疑問に思うことがある。毎日の学校生活は祈りから始まるが、子どもたちの祈りの中には「世界の苦しんでいる人たち」「貧しい子どもたち」という言葉が散見される。本単元は「児童労働」の学習を主な軸として進めるが、児童労働の問題は本校の児童にとっては決して身近な存在ではないであろう。しかし、働く子どもたちの現状や葛藤を知ることを通して、日々の祈りの言葉が少しでも具体性をもったものとなり、想像力を働かせて祈りを唱える児童の姿を期待する。

本単元において、“シャプラニール＝市民による海外協力の会”の提供する児童労働ワークの一部を学習に取り入れることで、児童労働の問題を少しでも自分事として捉え、同じ1人の子どもとして想像してほしい。人権が当たり前に保障されない複雑な状況を疑似体験することで、子どもにとっての本当の幸せとは何なのか考えを巡らせ、結果的に自分が社会で生きていく上で大切にしたい価値観や正義を構築する一助となることを願う。また、身近な存在である友達や教員とともに「人権」をテーマに話し合うことは、今後社会の一員として自他を大切にすることにつながり、社会を変える力になると期待する。

〈児童/生徒観〉

私立小学校に通う女子のみのクラス。比較的裕福な家庭で育つ児童が在籍するが、社会が多様化し、家庭環境や個々の児童にも自ずと多様性が見られるようになった。また、外国語としてフランス語と英語の二言語を学習しており、語学学習を通して他国に関心を寄せる児童が多い。外国語に高い関心を示す集団であるため、英語・フランス語以外の言語にも興味をもち、朝礼や終礼時に様々な言語での挨拶をすることもあった。

5学年時には、JICAの教師国内研修で出会った日本在住の難民の若者をゲストに迎え、実際の経験や困難等を児童に話していただく機会を得た。その際には、進んでゲストに質問を投げかけたり、ゲストの母語で積極的に挨拶をしたりしていた。翌日には、日直のスピーチのテーマに「難民」を選んだり、難民について自主的に調べたりする児童もあった。児童の中に芽生えつつある国際社会に対する関心が、本授業を通してさらに育まれることを願う。指導者自身、バングラデシュに渡航する機会を逃し、授業にどれほどのリアリティをもたせられるか不安感がぬぐえないが、児童労働ワークを導入したり外部と連携したりすることで足りない知識や経験を捕捉したい。

〈指導観〉

第1時：児童労働を言葉としてではなく体験的に学ぶことを通して、働きに出る少女とその家族にとっての幸せを本気で考える姿を望む。本時では、シャプラニール作成の児童労働ワークを参考に、ラジュ(兄)、父、母による3人の家族会議を展開する(児童労働ワーク①)。それぞれの登場人物の意見を踏まえて、「アリア(少女)を働きに出すことに賛成か、反対か」と問いについてグループで考えるが、アリアがなぜ働きに出る必要があるのか、その裏にある複雑な事情を想像する発言があると良い。また、本校は女子校であるからこそ、「子ども」「女性」であることが社会的弱者になり得る社会があることに気づいてほしい。グループワークで出た疑問や違和感が第2時のゲストの講話に繋がることを期待する。全体共有の際には、紅白帽子で自分の意見を表せるような場を設けることで、児童一人ひとりの意見を紅

白帽子の色を通して視覚化したい。また、議論中はいつでも色を変えてよいという条件を与えることで、友達の意見を受けて柔軟に自分の意見を変えられるような仕掛けとしたい。

第2時：前時の流れを汲んだうえで、児童労働の現状や問題の背景に迫りたい。第1時では、子どもたちにも馴染みのある「家政婦」という言葉を使うに留めるが、第2時では「家事使用人」と出合う。家事使用人の1日のルーティンや働きに出るまでの経緯を知ること、前時での自分の意見を捉え直し、更新してくれることを願う。

第3時：第1時と第2時を踏まえたうえで、児童労働ワーク②に取り組む。児童労働ワーク①の登場人物にはアリアを含めなかったため、児童からは「アリアの意見を聞きたい」という声が聞かれた。本時の児童労働ワーク②は、アリアとアリアの友達、父、母を登場人物とする。アリアの台詞は、シャプラニールの高階さんのご助言と書籍「わたし8歳、職業、家事使用人。」を参考に作成した。児童は、アリアの意思と家族の想い、そして、前時までに学んだことや考えたことを踏まえて、「アリアの友達」の立場にたち台詞を考えることとなる。小学校段階での知識と想像力には限りがあるかもしれないが、第2時までに学んだことを十分に生かして、アリアと家族に対して精一杯の提案をしてほしいと願う。

第4時：児童労働ワークを通してアリアを働きに出すか結論を出すまでに、児童は金銭的な実情と子どもの保証されるべき権利の間を何度も行ったり来たりするだろう。実際に、第3時までに「子どもの権利」という言葉が多く聞かれると予測する。第4時からは、子どもの権利に焦点を置き、自分たちも含め子どもにはどんな権利が保障されているのか知ることを通して、児童労働を権利の問題から見つめ直すと同時に、自分自身のことを大切にすることを育てたい。本時では、書籍“*For Every Child, A Better World*”のイラストから出発して、本の中で多用される“*Every child needs...*”の言葉の続きを考える活動を行う。ここで出てくる児童の自由な意見を踏まえたうえで、次時の「子どもの権利条約」に学習を移行していきたい。

第5時：本時では、前時で出た“*Every child needs...*”の言葉を、テキストマイニングを用いて集約し、集団として大切にしたい「子どもに必要なもの」を視覚化する。そのうえで、子どもの権利条約を提示し、自分たちの意見が全40条のうちどの権利に位置づけられるのか確認したい。また、児童労働の問題が損なう子どもの権利は何かについても考えたい。授業の後半には、生きていく上で最も大切にしたい子どもの権利5つを精選するグループワークを行う。5つ選ぶことが目的ではなく、友達との対話の中で、なぜその権利が大切だと思うのか、なぜその権利が存在するのか、多方面に考えを巡らせてほしい。

着目児 A： どの教科においても発言力もあり、学習に前向きに取り組む児童である。正義感が強く、自分の良心に従い学校生活を過ごしている印象だ。児童労働ワークにおいては、アリアの心に寄り添い、アリアがどうしたら学校に通うことができるか真剣に考えるだろう。児童労働の現状を知り、シャプラニールによる講義を受けることで、教育は大切である一方で優先されない現状に葛藤してほしいと願うとともに、子どもの権利条約を学ぶことを通して、自分の正義感を更新してほしい。

着目児 B： お金に関心を示し魅力を感じている児童である。学習に対しては意欲的になり切れない部分もあり、児童労働ワークでどのような意見を出すか気になる児童である。児童労働ワークでは、グループ活動を乱すような発言を期待するとともに、シャプラニールの講義や子どもの権利条約を学ぶことが、人権に目を向け、自分自身の人生を大切に過ごす心を育むきっかけとなってほしい。

05 単元計画（全 5 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1 本時 総合	家族会議をのぞいてみよう！	・児童労働ワークを行うことで、児童労働問題が引き起こす葛藤に気付く。 ・話し合いを通して、子どもにとっての幸せとは何か考えてほしい。	【児童労働ワーク①】 ・家族会議の設定に関する文章を読み、家族の状況を理解する。 ・父、母、ラジュのロールプレイ。アリアを働きに出すことに賛成かどうか話し合う。 ・全体で意見を共有する。 ・動画を見て、児童労働の現状を知る。
	資料・教材など ・パワーポイントスライド・ワークシート ・日本ユニセフ協会 UNICEFJapanNatCom. (2015 年 4 月 16 日). 「私たちが学校に通えないのはなぜ？/ユニセフ協会」[Video]. YouTube. https://youtu.be/HjgKHselDh0?si=aa0dafMFV-Go0bIW ・シャプラニール児童労働ワーク（教材作成のための参考資料） ・日本ユニセフ協会. (2022). 「ユニセフの主な活動分野 子どもの保護」. UNICEF. https://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_act04_02.html (参照 2024-10-01)		
2 総合	児童労働を知ろう！	・シャプラニールの高階悠輔さんより、児童労働や家事使用人の話を具体的に聞き、理解を深める。	・シャプラニールの高階さんよりお話を伺う。 ・高階さんから学んだことや感想、気づきをロイロノートに記録する。
	資料・教材など ・シャプラニール作成のパワーポイントスライド ・日下部尚徳, 特定非営利活動法人シャプラニール＝市民による海外協力の会 藤崎文子・京井杏奈・藤岡恵美子（執筆協力）. (2018). 『わたし 8 歳、職業、家事使用人。』. 合同出版.		
3 総合	アリアの家族に声をかけてみよう！	・第 2 時までに学んだことを活かし、アリアと家族に解決策を提案する。	【児童労働ワーク②】 ・シャプラニールの方のお話の振り返り ・アリアの台詞を配る。自分が家族会議に参加するとしたら、家族に対してどんな声をかけるか考える。（グループ活動） ・クラス全体に家族会議を発表する。
	資料・教材など ・パワーポイントスライド・ワークシート ・シャプラニール作成の児童労働ワーク（教材作成のための参考資料）		
4 総合 英語	“For Every Child, A Better World”	・子どもが幸せに生きるために必要なものは何か考える。	・“For Every Child, A Better World”より 3 つのイラストを見て、それぞれどういう状況かグループで考える。 ・それぞれのイラストに添えられた英文を読み、状況をさらに推察する。

			・自分を含めた子どもたちが幸せに生きるためには何が必要か。”Every child needs…”の後に続く言葉をグループで考える。
	資料・教材など ・パワーポイントスライド ・Kermit the Frog , & Louise Gikow . (1993). For Every Child, A Better World. Goldencrest.		
5 総合 英語	子どもの権利条約を知ろう！	・子どもの権利条約と自分たちの生活を結びつけ、友達とともに大切にしたい権利を考える。	・前時に考えた “Every child needs…”をテキストマイニング化し、クラスとしての価値観を共有する。 ・コルチャック先生と子どもの権利条約を紹介する。 ・子どもの権利条約ワークに取り組み、子どもが幸せに過ごしていくために必要だと思う権利を5個選び、理由を書く。 →全体で共有 ・実際に子どもの権利条約を守るために活動している若者や子どもでも参加できる活動を知る。(No Youth, No Japan, Dream Builders, フリー・ザ・チルドレン・ジャパン etc)
	資料・教材など ・パワーポイントスライド ・トメク・ボガツキ . (2011). 『コルチャック先生 子どもの権利条約の父』 . 講談社. ・ユニセフ作成「カードで学ぼう！子どもの権利条約」 ・日本ユニセフ協会. (2024). 「子どもの権利条約」. UNICEF. https://www.unicef.or.jp/crc/card/ , (参照 2024-9-01)		

06 本時の展開（1 時間目）

本時のねらい：○児童労働ワークを通して、児童労働の問題が引き起こす葛藤に気付く。

○話し合いの中で、子どもにとっての幸せとは何か考えることができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5分)	① 家族会議の設定に関する文章を読み、家族の状況を理解する。 T: だれかこの文章を読んでもくれる方はいますか？	
展開 (30分)	② 児童労働ワークを3人グループで行う。 ・父、母、ラジュによる家族会議について考え、アリアを学校に行かせるか、働きに行かせるか話し合う。 A: 子どもは学校に行く権利があるから、どんな理由でも行くべきだよ。 B: お金がないなら学校には行けないよ。働いた方がいいんじゃない？ C: アリアが自分で選ぶってことはできないのかな。 C: 今はお金を稼いで、後から学校に行けばよいと思う。	☆机間指導を行い、だれがどんな意見を出しているか把握しておく。

まとめ (10分)	C: 11歳の年齢で働くのはおかしいよ。 C: 家事が好きとはいえ遠くには行きたくないんじゃないかな。 ③自分の意見をワークシートに記録する。 ④意見の共有 (1)紅白帽子で、自分の意見を表明する。 賛成…赤、反対…白、迷っている…赤白 T: あなただったら、アリアを働きに出すことに賛成ですか？ C: 賛成です。今はお金がないことが問題。アリアちゃんはしばらく働きに行って家族を助けるべきだと思います。 C: でも、学校に行くって大事だし、子どもの権利だと思います。だから私は反対です。 C: じゃあアリアを学校に行かせるお金はどこから出るの？ (2)子ども同士で指名し合い、話し合いを行う。 ⑤SDGs 項目8や児童労働についての現状を知る。 ⑥アリアを働きに出すことに賛成かどうかを再度個人で考え、ワークシートに記す。	☆途中で帽子の色を変えてよいことを伝える。 ☆子ども同士に任せきりにせず、必要に応じて教師からも指名する。 ☆白の方が多いと予想するが、働きに出すという意見が多い場合は校長先生を登場させ、もう一度意見を問う。
----------------------	---	---

07 板書計画

アリアを働きに出すことに賛成？反対？

賛成

- ・今はお金をかせくことが優先。
- ・アリアは家事が好きでやってるし、ひたすら頑張る？
- ・学校へ行くことが全然大丈夫。

うーん

反対

- ・子どもには学ぶ権利があるはず！
- ・11才で働くのはおかしい！
- ・働くために家族と離れるのはおかしい。
- ・子どもは働くべきじゃない！
- ・将来の選択肢が少なくなる。

アリアは自分で
えらべるの？

勉強は入ってこれる？
お金はどこから借りるの？

お兄ちゃんとは話し合ってる？

支援してくれる団体はあるの？

08 評価規準に基づく本時の評価方法

- ワークシート上に、自分の意見を具体的に記録している。
- 自分の意見を伝えたり、相手の意見を聞いたりして、話し合いに積極的に参加している。
- 話し合いを通して自分の考えを見直し、必要に応じて更新している。

09 学校外との連携（※該当のある場合）

特定非営利活動法人 シャプラニール＝市民による海外協力の会

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

○第1時の記録

「アリアを働きに出すことに賛成ですか？反対ですか？」の問いに対して考えるグループワークでは、「アリアの意見を尊重したい」「兄が学校に行けるのに妹はそうではないなんて不平等だ」「お金がないと何もできないからまずは働きに出たらどうか」「どうして母親は家にいるしかないんだ」という声が聞かれた。

- ・ 着目兎 A のワークシート

同じグループの友達と活発に意見を交わしながらアリアに心を寄せて本気で考える姿を窺うことができた。

あなたは、アリアを働きに出すことに賛成しますか？
 (賛成・反対・まよっている)

理由 アリアは学校に行かないで、この仕事のために自分の勉強をやめている。早く休めと
 言って、家で寝てばかりする態度をして、アリスも助かる。でもお金にあげたくていろいろ仕事をやらせ
 たりして、まだ仕事ができるからいいから、許しているから、許さないと断った。

あなたは、アリアを働きに出すことに賛成しますか？
 (賛成・反対・まよっている)

理由 家族は彼が強いけれど、アリアは黙っているしアリアが辛抱をすることを知らない。お金の
 見返りを聞いたり、仕事を聞いたり、知っているのと、子供会や学校の先生からの意見、あきら
 めた。

6 / 5 (

- ・着目兎 B のワークシート

予測した本児童の姿や発言とは大きくずれアリアの学ぶ機会や健やかに生きる権利について記述していた。

あなたは、アリアを働きに出すことに賛成しますか？
(賛成・反対) まよっている)

理由 お父さんもお母さんもラジも働けるのに家族の誰一人
もいりアリアに働かせるのはアリアの学びの機会を失う。

あなたは、アリアを働きに出すことに賛成しますか？
(賛成・反対) まよっている)

理由 アリアの幸せはアリア自身の決めることで、11さいで
知らない人の所はきけないから。

65 ()

○第2時の記録

シャプラニールさんのお話を伺い、児童労働の問題を生み出す複雑な社会状況があることを知った。児童の感想から、小学生にはやや難しく、内容を咀嚼きれない児童も多かったように思える。しかし、実際に児童労働の問題解決に向けて動く大人をゲストに迎えて、生の声を通して現状を知る良い時間となった。

- ・ 着目児 A の記述 ・ 着目児 B の記述

高橋さんのお話を聞いて、いつも私たちが何処に立っている生活は当たり前ではないということに改めて気づきました。

見せていただいた動画の中で、シャプラニールが通算している教育施設の中で子供が働き先から呼び出しを受けて、帰っている動画があって、衝撃を受けました。

子供にとって、教育はすごく大切なものであり、呼び出しを受けた女の子も、「学びたい」という気持ちがあるから施設に通っていると思うのですが、それを大人たちの都合で遮られ、学びたくても学ぶことができない女の子の手や子どもたちがさんいるのを見て驚きました。

もちろん、児童労働が世界的に多いということは知っていましたが、今まで関係ないと思ってしまっていました。

でも、今日高橋さんのお話を聞いて、まずは世界の現状を知ることから始め、フェアトレードの商品を扱うなど、自分にできることを探し実行できたら良いな、と思いました。

今日は、本当にありがとうございました。

バンラデッシュでの児童労働の話聞き、私達が学校に通えることが当たり前ではないということが再確認することができました。バンラデッシュでは、家の事情で私と同じくらいの子や私よりも小さい子が現在で1億人以上もいて知らない所でそれ以上にいるかもしれないという事を知って、2025年までに児童労働をなくすことはできるのだろうかと思った、それでも児童労働を少しでも減らすために私にできる事をして児童労働を減らせたらいなと思いました。

- ・ 着目児 A の記述 ・ 着目児 B の記述

高橋さんのお話を聞いて、いつも私たちが何処に立っている生活は当たり前ではないということに改めて気づきました。

見せていただいた動画の中で、シャプラニールが通算している教育施設の中で子供が働き先から呼び出しを受けて、帰っている動画があって、衝撃を受けました。

子供にとって、教育はすごく大切なものであり、呼び出しを受けた女の子も、「学びたい」という気持ちがあるから施設に通っていると思うのですが、それを大人たちの都合で遮られ、学びたくても学ぶことができない女の子の手や子どもたちがさんいるのを見て驚きました。

もちろん、児童労働が世界的に多いということは知っていましたが、今まで関係ないと思ってしまっていました。

でも、今日高橋さんのお話を聞いて、まずは世界の現状を知ることから始め、フェアトレードの商品を扱うなど、自分にできることを探し実行できたら良いな、と思いました。

今日は、本当にありがとうございました。

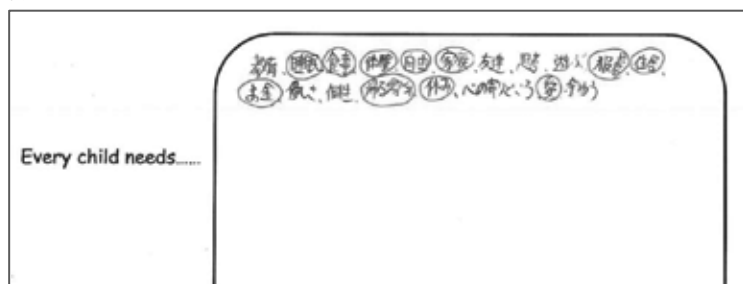
バンラデッシュでの児童労働の話聞き、私達が学校に通えることが当たり前ではないということが再確認することができました。バンラデッシュでは、家の事情で私と同じくらいの子や私よりも小さい子が現在で1億人以上もいて知らない所でそれ以上にいるかもしれないという事を知って、2025年までに児童労働をなくすことはできるのだろうかと思った、それでも児童労働を少しでも減らすために私にできる事をして児童労働を減らせたらいなと思いました。

高階さんのお話を受けて、自分がアリアの友達だったという状況を設定し、アリアにどんな言葉をかけるかグループで話し合いを設けた（児童労働ワーク②）。小学生の知識・経験から、アリアとアリアの家族を救うための最善の提案を精一杯に考えていた印象だが、学校に行くことが当たり前となっている児童にとっては、自分事として考えるには少々難しかったようだ。

- [illegible]



・着目児 A の所属するグループの記述

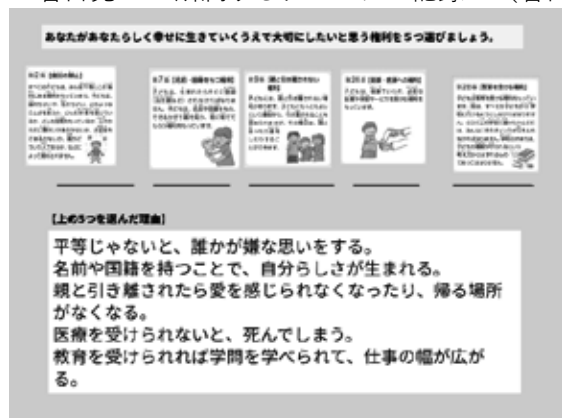


- Every child needs.....
- | | | |
|----|--------|----|
| 遊ぶ | 学 | 夢 |
| 知る | 解放感 | 名前 |
| 食事 | 衣服 | 習技 |
| 自由 | 外との関わり | 体験 |
| 学校 | 友達 | 衛生 |
| 平等 | 未来 | |
| 情報 | 平和 | |
| 家 | 水 | |
| お金 | 休み | |
| 家族 | 健康 | |
| | 幸せ | |

○第5時の記録

働く子どもたちの存在やその裏にある課題を知ったうえで、自分がどう生きていくか児童には考えてほしいと願い、子どもの権利条約ワークを取り入れ、最も大切にしたい5つの権利を考えてもらった。

・着目児 B の所属するグループの記録（着目児 A は欠席）



11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

バングラデシュの発展には女性の教育・社会進出が必須であると考えていたが、教育を受けることが幸せになるための選択肢として捉えられない社会構造を改めて認識させられた。児童労働ワークを通じて、家庭の厳しい経済状況や家父長制、固定観念化された女性としての生き方が理由となって、女性が教育を受けることが必ずしも良い選択肢として受け入れられない状況があることを痛感した。女性であるからこそその危険性があること、周囲から気づかれにくい状況にあることも学んだ。本校の児童にも、性別や年齢によって社会的弱者の立場に立たされてしまう状況について、同じ女性として考えてほしいと感じた。また、募金やボランティアが特効薬とはならず、この問題の根底には様々な問題が深く絡み合っている。解決策を1つ考えたとしてもそれが必ず最善の手段とは限らない。解のない問題が社会には存在し、私たちはなおも向き合いながら生きていく必要があるということを、この授業を通して少しでも気づいてほしい。

12 苦労した点

2022年度のJICA教師国内研修後に実施した授業は、自分の専門教科である英語で授業を行った。英語だからこそできることは確かにあるが、今回の研修で学んだことを本校の児童に還元するには、英語の授業のみでは難しいと考えた。結果的に、全5時間のうち3時間を総合的な学習の時間と名付けて実施することが叶ったが、教科担任制を取り入れる本校では、自分の専門教科以外の時数の確保に苦労した。

シャプラニールの児童労働ワークは、“父、母、少女、雇い主、仲介人、村の校長”を登場人物としていたが、“雇い主”や“仲介人”という言葉を知らないうえに、複数のキャラクターの台詞を読み取ったうえでワークを進めていくことは難しいと予測したため、本校の児童に合った形にワークを再考し、授業で実施するに至った。ワーク作成者であるシャプラニール(高階さん)と教育環境デザイン研究所の畑文子先生にご助言をいただいたうえで、登場人物の精選と台詞の再作成の作業を行った。しかし、実際に授業を行ってみると、JICA研修中に自分が体験した児童労働ワークとは異なる流れを踏むグループが多くあったことから、登場人物やその言葉遣いがグループワークの行方に大きな影響を及ぼすことを学んだ。次回同じ授業を行うなら、登場人物の登場のタイミングや台詞の内容を再考したい。

また、児童労働の問題の社会的背景まで伝えたいと思いつつ、扱いきれなかった。第2時に、高階さんより家事使用人とバングラデシュの社会課題の関連についてお話を伺ったが、児童の振り返りを見ると、理解しきれていないようなコメントがあった。高階さんにご講話いただく前に、児童労働が生じてしまう原因に気づけるような活動を組み込んだ授業を1つでも行っておくとよかったと感じている。また、児童労働ワーク①②を通して、「学校に行かなくても勉強はできるんじゃない?」「学校に行けないなら、(アリアの友達として)私の家がアリアを家事使用人として引き取り、勉強も時間をとって教えてあげる」というように、この問題を自分事として考えきれていないような発言があったことから、本単元をさらに改良する必要があると捉えている。

13 改善点

上記の「苦労した点」に記載したことに加えて、授業を実施する時期についても検討する必要があると感じている。第6学年の3学期には、社会科の「世界の中の日本」という単元で、地球規模の課題の解決と国際協力について学習を進める。本授業の流れを作るうえで、社会科の教員には、たくさんの協力と助言をいただけたので、次回この授業を実施する可能性があれば、社会科と連携して進めたい。

14 成果が出た点

個々の変容の見取りは難しかったものの、日々の祈りの中に今回の学習内容を生かしたり、学年に対してシャプラニールへの募金を呼び掛けたりする児童がいた。全員で何かアクションを起こすことはなかったものの、この授業をきっかけに自ら行動する姿を少しでも見せてくれたことは成果の1つだと捉えている。

また、前回の難民に関する授業と同様に、国際理解教育に関心のある先生方が授業を参観してくれたり、授業づくりに携わってくれたりしたことから、本校の国際理解教育の幅が少し広がったように感じる。教科関係なく、複数の教員と授業について議論できたことは私自身にとって大きな学びとなった。

15 自由記述

本授業は、児童の変容がなかなか見えにくいものとなってしまった。エクマツトラの渡辺大樹さんからは「相手と本気で向き合い行動する」ことの大切さを学んだが、今回の授業では「知る」「学ぶ」過程はあったが、「行動」に焦点を当てることができなかった。環境活動家であるセヴァン・スズキさんは、「今、若い人たちにのしかかっている大きな不安を、いくらかでも軽減できる唯一の方法は、行動することだ。」(BS 世界のドキュメンタリー「私は子どもを持つべきか?～気候危機世代のためらい～」より)と述べているが、先の見えない未来を生きる私たち大人にとっても、子どもにとっても、「行動」が生きる糧になり得る。社会課題に出合い、知るだけの授業ではなく、私たちはどのように行動できるのか、具体的に示せる責任ある教育者でありたい。

8

授業実践報告会

参加者の各都県で実施された国際理解セミナーやグローバルセミナーにおいて、地域の方々に教師海外研修の経験を生かした授業実践についての報告を行いました。

■ 新潟県

イベント名 第45回 RING セミナー

「出会おう！わたしと世界の新たなつながり」

日時 2025年2月1日（土）13:00～16:30

場所 ほんぼーと新潟市立中央図書館

主催 にいがた NGO ネットワーク国際教育研究会 RING 共催：JICA 東京

プログラム （第1部）教師海外研修報告会（教育行政コース、一般コース）
（第2部）体験型学習教材ワークショップ、JICA 教材紹介



■ 千葉県

イベント名 令和6年度国際理解セミナー

日時 2025年2月2日（日）13:30～15:50

場所 千葉市文化センター

主催 （公財）ちば国際コンベンションビューロー、JICA 東京

プログラム （第1部）講演「ルワンダってどんな国？」永遠瑠マリールイズさん
（第2部）教師海外研修 授業実践報告会



■ 群馬県

イベント名 ぐんまグローバルセミナー 2024

日時 2025年2月8日（土）13:00～16:30

場所 群馬県生涯学習センター

主催 JICA 東京、群馬国際理解教育研究会、（公財）群馬県観光物産国際協会

プログラム （第1部）教師海外研修及び授業実践報告会
（第2部）群馬国際理解教育研究会 日本人学校帰国教師実践報告会



■ 長野県

イベント名 海外研修報告会「探究する先生」

日時 2025年2月14日（金）14:00～17:30

場所 信州大学教育学部（※オンラインあり）

主催 探究する先生実行委員会

プログラム 海外研修参加者、インドネシア日本語学校教員による発表、グループディスカッション



■ 富山県・石川県・福井県

イベント名 2024年度教師海外研修報告会および
開発教育指導者研修

日時 2025年2月1日（土）10:00～17:00

場所 JICA 北陸4階会議室 **主催** JICA 北陸

プログラム （第1部）開発教育指導者研修
（第2部）教師海外研修報告会（教育行政コース、一般コース）



共有→考察・整理→次年度へのヒント

時 刻

プログラム

● 10:00

開会挨拶・プログラム説明

● 10:05

総括研修のゴールに対するプレ課題及び
午前中のラウンドテーブルの進め方について
国立教育政策研究所 白水 始先生

今日の目的は、「持続可能な社会の創り手となる児童・生徒の育成」のための授業づくりの原則（デザイン原則）を創り出すこと。

国立教育政策研究所の白水先生、教育環境デザイン研究所（CoREF）の畑先生ファシリテーションのもと、協議を重ねました。



● 10:20

【ラウンドテーブル】授業実践の振り返り ●

● 国、校種別に分かれて代表者の
授業実践振り返り

国立教育政策研究所 白水 始先生

教育環境デザイン研究所 畑 文子先生

学びの予想は…？

こういう学びにつながることを予想して授業を試みたけど…。「ここが上手いかなかった」「ここは予想以上の学びがあった」の事例を集めます。



● 11:30

午後のねらいと進め方説明

国立教育政策研究所 白水 始先生

● 11:40

【グループワーク①】

小学校 / 高校・特支に分かれて自身の実践振り返り

自身の実践を振り返って

ラウンドテーブルを受け、自分の授業ではどうだったのか。上手いところ、いかなかったところなどを箇条書きで書き出し、グループ内で共有しました。



● 13:20

【クロストーク①+グループワーク②】 ●

授業を作る際のデザイン原則を
チームごとに考える

こんなことが言えるのかも…！

それぞれの結果を自分のチームに持ち寄り、授業をデザインするうえでの原則を導き出しました。

● 14:40

【クロストーク②】

出来上がったデザイン原則を
全体に向けて発表+質疑応答



● 15:20

研修振り返り

東京都市大学教授 佐藤 真久先生

● 16:05

休憩

● 16:15

終了証書授与、諸連絡、個人・チーム・全体写真

みなさんが導き出した授業デザインはこちら！

ジブンゴトチーム

具体的な学びのエピソード

- 女性の立場や病気の人の立場、外国の人の立場に立って、お互いに話し合う（家事使用人ワーク）ことで、自分とは違う立場の人の考えを疑似体験できた。
- ゲストティーチャーのワークショップ、身近な人や知ってる人、地元の人との体験談、フィールドワーク、食文化に触れる体験をしたことで、児童生徒がより親近感を感じていたようだった。
- 「生きる」「幸せ」「暴力」「ウェルビーイング」とは何か、時間をかけてゆっくり考えて、話し合うことで、人によって考えが違いうけど、それぞれの考えに価値があることを学んだ。

これらのエピソードから 言えそうな授業デザイン原則

- 自分ごととして捉えるために・・・
- 身近な問題を疑似体験する（小学校○ 高校◎）
 - 本物（実際に体験した人の話、五感で感じられるもの、自分が経験すること）に触れる（共に△）
 - 本質（「ウェルビーイングとは」「暴力」とは）を時間をかけて考える（小学校◎ 高校△）

つながり&共生チーム

具体的な学びのエピソード（資料編）

資料提示の順番

〈バングラデシュ学生デモの是非について〉

- 死者 1000 人以上、首相の国外逃亡
→デモに参加した学生のボランティア活動、市民の声
資料の提示の順番によって子どもの考えは変わっていくのではないかな。
（同時に提示していたら？ 順番を逆に提示していたら？）

資料の内容・難易度

〈バングラデシュのファストファッション〉

- バングラデシュと日本の縫製業を比較するための資料であったが、バングラデシュの資料にはマイナスイメージが多かった。（低賃金、厳しい労働環境）
→「こんなにづらい思いをするならバングラデシュの洋服買わない。」
この予想外の発言に対応できなかった。

資料の角度

〈バングラデシュ学生デモの是非について〉

- 「いいこと？ 悪いこと？」という問いでは、事象を俯瞰して捉えてしまい他人事のような感覚。
上から見るのではなく、その人に寄り添った横から見るためには？

具体的な学びのエピソード（余白編）

モヤモヤ残し

- ジグソー活動をしている最中に、読み取った資料と最後の活動が繋がらず、生徒たちがモヤモヤと悩む場面が多かった。そのまま授業は終わり…。これでいいの！？

子どもからの問いでつないでいく授業（授業、家庭、未来）

- 児童労働の内容を扱ったら、なぜ子どもに働かせて大人が働かないのかという問いが生まれた。
その問いについて何もなかったがよかったのか…。

これらのエピソードから 言えそうな授業デザイン原則

教師のねらいから逆算した資料の順番、内容・難易度、角度を十分によく考える。
子どもの考えをできるかぎり予測する。

教師の心構え＝正解を求めません。整理もしません。でも無責任ではありません。
全てを教師が解決するのではなく、子どもに返したり、子どもの未来に託したり、共に考えていくという姿勢。

経済成長の光と影チーム

具体的な学びのエピソード

- 答えを1つにまとめた生徒。授業を参観した教員から「難しい問題は難しいままでよい」という意見をいただいた。
- 授業の感想がきれいにまとまりがち。→本音と建て前シート。
- ロールプレイやジグソー法で役割を与えると、その立場を真剣に考え、責任をもって意見を表明できた。
→ロールプレイという非日常を設定することで、普段は考えないことに想像力を巡らせ、生徒たちの新しい発見を一瞬でも導けた。
- 外部講師を招聘しての授業。問題の全容をほぼすべて話してくださったが、対象に応じて話していただきたいポイントをしばって依頼すべきだった。
- 扱う話題が大きすぎても回答が同じようなもの、一般的なものになりがち。
- 扱いたい問題を壮大にしすぎると、授業の意図とずれることがある。子どもの意見がきれいごと・一般的なものになってしまう。
- 教科担任制だと、教員間の連携が難しく、教科横断的な学びが生まれにくく、思考に深みがない。授業の継続性も失われてしまう。
- 校長や教頭、栄養士、保護者を巻きこみ、いろいろな場面に授業が波及した。

これらのエピソードから 言えそうな授業デザイン原則

必ずしも答えを導くのではなく、知る・考えるプロセスを大切に授業をする。

問題を扱うにも、どこに注目するかをきちんと整理して授業する。

取り扱う課題を身近な事柄に落とし込む。

一人ではなく、周りの教員を巻き込んだ授業づくりをする。

多文化共生チーム

具体的な学びのエピソード

- 授業のねらいなどを情報共有することで、ゲストティーチャーの保護者や当該児童が安心してその時間を過ごせるようにした。
- ネパールの児童とバングラデシュの児童とペアで授業をしているときに、ネパールの神様の話が出て、イスラム系の子が、ネパールの子に、「神様は一人だけだよ」と言っていた。「それぞれの神様がいるね」とふわっと流した。
- 自分とつながりのある国の好きなものを紹介するときに、フィリピンの子がお祝い料理として豚の丸焼きを紹介しようとしていた。イスラム圏の子がそれをどう捉えるのか、迷った。
- SDGsの話をしたときに、進学校の男子校の生徒たちは、女性や働く人の立場を理解・共感できない実態があった。
- 画一的な環境に置かれていると、フィリピンやバングラデシュの現状を他人事として捉えていた。
ジェンダーギャップ指数を示すことで、日本の女性が置かれている状態を客観的に捉えさせた。
ジブンゴトとして実感させるためには段階をふんでいく必要がある。
- 高校で日本語教育について紹介し、指導案をつくる実践を行った。日本語教育に興味をもつ生徒がいたが、単元がそこで終わってしまったので、生徒の関心をその先へつなげてあげることができなかった。
- 写真で余計な情報が入っていたため、期待した反応が得られなかった。
- 子どもたちだけで話し合いが進められるような、写真を用意することで、多様な意見が出た。

これらのエピソードから 言えそうな授業デザイン原則

子どもたちの文化的背景や家庭環境等に配慮して授業を計画する。心配なことは事前に確認したり、関係者に了承をとったりするなど、入念な準備が必要。

ゴールや生徒の反応を見通して、段階をふめるような計画を立てる。最初のスタートを、ある程度そろえていく。(例：先入観に気付かせる、予備知識を入れる)

写真や資料の精選が必要。複数の目で確認したい。

多文化共生 (2) チーム

具体的な学びのエピソード

本物と出会う

- パラグアイの大豆
- マテ茶の試飲
- 先生が写っている写真
- つながりのある人

資料の選定と提示の仕方

- 提示する順番
- 内容
- 量
- 板書計画
- 提示の仕方
- ゴールの共有
- 学年・教科・学校での共有
過程が違っても、同じゴールを共有することで、子どもの実態に応じて柔軟に授業することができる。

これらのエピソードから 言えそうな授業デザイン原則

本物を使ったり、資料の精選・提示の仕方・順序・内容を工夫したり、職員間のゴールを設定したりすると、ジブンゴトとして考えることにつながり、学びが深まる。

答えのない問いチーム

具体的な学びのエピソード

- ホルヘさんから「友情の大豆」をエリカさんを通じてもらった。実物に触れる際、ストーリー性があった。大豆をツールに、授業単発で終わらず、次の活動にもつながっていく。
- チパ、マテ茶などの食べ物、飲み物を体験することで子供に残る。五感を伴ったものだといふ。
- 台湾の小学生との交流
国際感覚が一生涯残るだろう。ビデオよりオンライン、オンラインよりも対面で人に会うことが大事。
- 調理員さん、外部の人々など、いろいろな人を巻き込むことで、学びは無限の可能性がある。◎
- ゲストティーチャーを呼ぶときは、書籍を読んだり動画を見たり、対面で打合せをしたりして、ねらいや単元での位置付け、話して具体的なエピソードなどを、綿密に打ち合わせたことで、子供に響いた。◎
- ゲストティーチャーとの打合せが足りなかったことで、難易度が高く子供からすると他人事になってしまった。▲
- 子供→先生→国際交流センター→留学生と、間に人が入れば入るほど、熱量や意図に差が出てしまう。▲

これらのエピソードから 言えそうな授業デザイン原則

子供の興味・関心が高まるだけでなく、持続させるためには、実物を見る触る食べる、ストーリー性のあるもの、対面での体験をしかけることが大事。

ただ人をつなげるだけでなく、綿密な打合せを行うことで、子供の発達段階や、単元のねらいに合った、価値のある授業とすることができる。

国際理解セミナー@ JICA 東京 「知る」「体験する」 1日

時 刻

プログラム

- 10:00 挨拶、教師海外研修とは
- 10:10 教師海外研修 教育行政コース報告
- 10:30 教師海外研修 一般コース実践報告

校種ごとの部屋に分かれて実践発表

- 小学校_低学年 ● 小学校_中学年 ● 小学校_高学年
- 高校_英語 ● 高校_社・国・特支

第1部【知る】教師海外研修報告会

今年、教師海外研修に参加した23名(教育行政コース2名・一般コース21名)の先生達が、研修の様子やその後の実践について報告をしました。教師海外研修・国際理解教育に関心のある方などが参加くださり、1年間に渡る研修や授業実践に耳を傾けていました。



- 12:10 研修を終えて
東京都市大学教授 佐藤 真久先生
- 12:30 休憩
- 13:30 ワークショップの団体紹介
● 朝日新聞社 ● 光の子どもたちの会
● Forum2050 ● 教海研 OGOB 会
- 13:45 ワークショップ①

第2部

【体験する】ワークショップ体験

4つの団体にご協力いただき、授業にいかせるワークショップをしていただきました。

SDGs、平和、多文化共生、写真の活用方法など、異なるジャンルでのワークショップは、明日からの授業のヒントにつながりました!



- 14:45 休憩・移動
- 15:00 ワークショップ②
- 16:00 閉会、写真撮影

子ども達に伝えたい!!

バングラデシュチーム



井土 恵美里



「遠い外国での多様性・多文化共生」だけでなく「日本国内での多様性・多文化共生」を考えてみましょう。異なる価値観を持つ他者とどのように関われば良いでしょうか。「対話」による相互理解を意識してほしいです。

加藤 瑞穂

私たちの身の回りには様々なもので溢れています。そのものたちがどうやって作られたか考えたことはありますか。

名前も知らない外国の貧しい子供がつくったものもあるかもしれません。

私たちの生活は色々な人たちの苦労の上に成り立っていることを知り、感謝をもって生活していきましょう！

鬼山 彩緒利

ニュースでよく見る世界の出来事。少し立ち止まって見つめてみよう。同じ地球で起きている問題があることを知ること、そして「こうあってほしい」という願いを語り合うことから始めてみませんか？

太田 祥子

知らない世界を知るとは楽しい。何気なく過ぎる風景も、みんなで考えると新しい発見がある。



澤田 将智

現実をみよう。自分たちの視野の狭さを知り、立場を超えて考えよう。自分たちがみているものは世界のほんの一部でしかない。無難な話し合いからは、真の解決策は生まれない。

執行 稜

自分の世界を広げるためには、いかにたくさんのお出会いと経験をするか。自分の目で見て、心で感じてほしいです。知らない世界、新しい世界は意外と身近にあったりします。そこから自分の可能性を探していきましょう。世界は広い!!

清水 紀恵



たくさんの方に挑戦し、たくさんの方に出会い、たくさんの方の価値観に触れてほしい！

そこでの学びが、いつか、どこかで、何かのきっかけになるかもしれない。

高橋 絵理

自分の今ある価値観を、他者と出会い、対話重ねることで更新させていくことの大切さ。自分の選択や行動が社会に小さな変化を生む力となること。そして、誰かと繋がり行動することでそれは大きな変化になり得ること。

田中 慧

自分たちとは違う所で生きている人たちに少しでも目を向けてみましょう。「知る」ことで、自分たちの行動や選択が少し変わるかもしれません。その変化が世界の抱える課題の解決に繋がるかもしれません。

田中 利奈

夢や目的をもって学ぶことは素敵なこと。困難な状況でも、夢を諦めない子どもたちが、世界にはたくさんいます。いつかその子どもたちと同じ夢を叶えて、一緒に仕事をしている未来があるかもしれません。



パラグアイチーム



岩田 徳子

私たちの生活は密接に海外と繋がっており、むしろ日本は海外を頼らざるを得ません。

世界に目を向け、海外で起きていることが「他人事」ではなく、「地球人」の一人として「自分事」のように考えてみてほしいと思います。

城島 愛

世界はとても大きくて広いこと。日本には日本の魅力、世界には世界の魅力がたくさんあること。まだ知らないことがたくさんあること。物事を多角的にみて考えること。友達に思いやりをもち、仲間と協力すること。世界の問題を自分ごとと捉え、じぶんなりの考えを持つこと。



河上 智子

今まで知らなかった世界の暮らしや文化に触れると、新たな発見があります。その一方で、課題も見えてきます。同じ地球に生きる“地球人”として、未来のために何ができるのか一緒に考え・行動していきましょう！

中村 陽美

自分たちの当たり前は小さな世界。知らない・未経験・今は違和感のあることにももっと触れて、自分たちが思いを馳せられる世界を広げていってほしいです。仲間と学ぶ楽しさも忘れずに！

根岸 彩夏

世界は広いということ。そして、世界と繋がる体験をしてほしい。今はまだ点と点の知識でも、いつかそれが線になって繋がる。その一部分を授業で体感してほしいです。



夏堀 隼也

世界は広い。そして、知らないことやわからないことであふれています。そこに足を踏み入れてみることで、新しい物事の見え方や新しい感性の自分に出会えるかもしれません。世界へ飛び出す一歩を。

蓮尾 志津加

自分自身や隣の人を大切にすることは、国際理解や世界平和につながる。イメージで物事を捉えないでほしい。好奇心をもって行動し、聞いたり、見たり、感じたり。これが本当の学びとなる。想像力をもって共生できる人になろう。

渡邊 千尋

自分の興味がある所へ実際に足を運び、いろいろな人に出会い、学びを体感し続けてほしい。

点と点で学んだことがある日突然線になり、怒涛の伏線回収がおこり、つながる日が来る。
(私たちの海外研修での体験から)



早川 千恵子

「地球のみんなが国際人」帰国後の授業実践を通して小学1年生がつぶやいた言葉です。世界の国や人とのつながりを大切にする中で、自分にできることを身近なところから見つけられると素敵な未来につながると思います。

渡邊 恋子

世界で起きていることは、自分とは関係のない遠い国の話かもしれないけれど、私たちの生活とつながっています。答えのない問いを考え続けるのはエネルギーが必要ですが、先生達も考え続けます。

吉田 彩子

日本の当たり前が世界の当たり前ではないということ。「違う」ことは「面白い」ことなので、自分とは異なる文化、習慣や異なる価値観をもつ人に関心をもったり、寄り添ったりできると、自分自身の生活がもっと楽しくなると思います。



先生達に伝えたい!!

バングラデシュチーム



井土 恵美里

国際理解教育や異文化理解は、「限られた教科・教員だけ」「興味のある生徒だけ」でなく、教科横断的に様々な視点から学ぶ必要があると感じました。各科目の専門的な視点からご教授いただき、授業を展開したいです。

鬼山 彩緒利

どうしたらよいかわからなくなった時に、自分の見方に自信がなくなった時に救われたのが、共に参加した先生の存在です。教育について話し合える仲間の存在が私にとって貴重な学びとなりました。そのような輪を一緒に広げていけたら幸いです。

澤田 将智

餅は餅屋という言葉通り、開発教育は JICA のエッセンスを受け入れるところから始めてみてはいかがでしょうか。教師海外研修には授業実践のアイデア、授業案が盛りだくさんです。



清水 紀恵

知識を教えることは AI が取って代わり、部活動は地域移行が進み、多くの技術はロボットが代行し…一体、教員の役目とは何なのか？
研修を通して、ずっと抱えていたこの疑問から解放されました。教育こそが未来をつくる！

田中 慧

様々な先生方と出会い、同じ志のもとに語り合って授業を作れたことは、とても刺激的で貴重な経験でした。全ての人にとってより良い世界を作るために教育の力で何ができるのか、深く考えることのできた研修です。

加藤 瑞穂

教育のあり方が大きく変化していく中で、自分軸をもって子どもたちと関わっていくことが大切だと思います。私は、教師自身が学び続ける姿を子どもたちに示していくことが第一歩だと考えます。

より良い教育について、一緒に考えていきましょう！



太田 祥子

子どもらしい、新鮮な疑問や発想力を大切に、考える材料を提示したい。

執行 稜

教材として教えるのではなく、経験として伝える。そのためには僕ら教員が多様な経験と考え方を更新し続けること。まずは自分にしか語れない武器をたくさん作っていきましょう。

高橋 絵理

教師も子どもも“解”のない問について他者と話し、自由に意見を交わせる場が必要だということ。その経験の積み重ねが、人として社会に生きていく上での価値観の構築につながるのではないかと感じる。



田中 利奈

未来を生きる子どもたちに、種を蒔いていきましょう！少しの授業の工夫で、正解のない問いについて、子どもたちが一生懸命考えます。国際理解教育は、その考えている時間を大切にできればよいのではないのでしょうか。

パラグアイチーム



岩田 徳子

この研修で出会った皆さんと関われたことは人生の宝物です。多くの学びと刺激を頂き、挑戦し続けることの大切さとやりがいを実感しました。

一步を踏み出し、一緒に日本の未来、世界の未来を考えていきましょう！



河上 智子

デジタル化の進む世界で、私達に届いてない情報はまだまだたくさんあります。現地で出会い・感じてみる。そして、答えのない問いを、熱量を持った仲間と一緒に考えていく時間は素晴らしい財産になります。

中村 陽美

先生の引き出しの多様さ・懐の深さが、子どもたちの未来を広げると思います。この研修に参加させていただいたように、今後さらに学びのチャンスを掴み、子どもたちに魅力的なプレゼントを渡せるようにしたいです。



城島 愛

国際理解教育はいくらでも展開できる。案外同じ志を持つ先生は多くいる。教師自身が興味関心を持つことから始めたい。

夏堀 隼也

子ども自身が問いを立てられるか、友達との対話が深まるか不安でしたが、子どもたちは見事に不安を裏切ってくれました。子どもたちの想像力・創造力をもっと信じていきたいと思っています。

蓮尾 志津加

自分自身が学び、変化し続けることの大切さを実感しました。教育は「これで、いい」ということはないのですから。新しい自分に出会うことで子どもたちに還元できることも必ず増えていきます。



根岸 彩夏

子どもたちに伝えられることは『無限』にある。研修の中で、先生方ととことん授業について話し考えた時間は、気づきと刺激に溢れていました。この時間を自分の職場でも作っていききたい。そう強く思います。

早川 千恵子

一步踏み出したことで自分が知らなかったたくさんのことに会うことができました。また他県の先生方と研修を通して考えを深め合えたことで、たくさん学ぶ機会にもなり、人生でかけがえのない時間となりました。

渡邊 千尋

現状を変えたいなら、周りを変えるより自分が変わるほうが簡単。

自分が動いてみたら、意外と生徒も先生も本研修の成果に興味を持っていた。

隣の席の先生に声をかけたら、新しい学びの可能性が広がるかも。

吉田 彩子

訪問先の国の文化や生活、社会的課題などを知るだけでなく、日本についても外から見つめ、客観的に捉える良い機会になりました。他の国のことを理解するには、自分の国についてよく知ることも大切だと思いました。

渡邊 恋子

〇〇してみたいと自分から発信していく中で、少しずつ形になっていきました。この研修だけで1度に全てをやりたいと思わずに、これから先ずっと、取り組んでいくつもりで実践していきたいと思っています。



私はここが変わった!

バングラデシュチーム



井土 恵美里

他県、他校種の先生とも交流できたことで視野が広がりました。多くの先生のお力をお借りすることで授業を深められると再認識しています。教員としての存在意義を考える契機にもなり、意欲の向上にも繋がりました。

鬼山 彩緒利

「バングラの人みんなが幸せになってほしい」

ある子が授業の最後に書いた言葉です。多文化共生や多文化理解など難しい言葉ばかりですが、その根源には、この「他者の幸せを願う思い」があるのだと子どもから学ばせてもらいました。



澤田 将智

進学校での協調学習、開発教育は不安がつきものです(大学受験もあるので)。ですが、今では自信をもって授業できるようになりました。まわりに同じ志を持った先生方がいることが分かり、安心しました。

清水 紀恵

- 1 自分自身の、「もっと知りたい。もっと学びたい。」が増えたこと。
- 2 授業どうしよう… から、こんな授業をしてみたい! に、よくわかんないからやめよう… から、とりあえずやってみよう! に変わったこと。



田中 慧

渡航は叶いませんでしたが、日本からバングラデシュという国を見つめられたからこそその気づきがありました。共に手を取り合いたい方々はどこにいるのか、どんな思いでいるのか、もっとアンテナを張っていきたいです。

加藤 瑞穂

この研修を受けて、国際理解教育についての先生方の熱い想いや広い視野に触れることができました。

また、自分の知らないことがたくさんあることを改めて感じ、学び続けることの重要性を感じました。今後も絶えず自分をアップデートしていかなければと思えるきっかけになりました。

太田 祥子

他の人と話し合いながら、授業案を作り上げていく楽しさを知った。

執行 稜

現状維持から最適解の更新へシフトチェンジできたこと。教員人生をかけて取り組んでいきたい課題と



思いを持つことが出来たのは、大きな変容です。どの題材にも「ジブンゴト」をテーマに、児童の思いや可能性を広げられるような教材開発を続けていきます!

高橋 絵理

世の中は、想定通りに進まない物事、うまくいかないことだらけ。そのモヤモヤの連続が自分のものの見方・考え方を何度も変容させた。

田中 利奈

私には何ができるか。「教師として子どもたちに伝え続けること」だと今は思っています。子どもたちにも具体的な行動を求めるより、世界の「誰か」のことを知ったり考えたりすることを続けてほしいと願っています。

パラグアイチーム



岩田 徳子

「国際協力」＝「～してあげる」という考えがあった。知ることや一緒になって身近なことからできることを実践することも協力が繋がると気が付いた。

“地球市民として一緒に考える”この言葉を常に意識していきたい。

城島 愛

開発途上国や JICA の取り組みについて詳しく学ぶことができた。モヤモヤを持ってその問いに対して自分なりの答えを持つ癖がついた。今年度の教師海外研修に参加した同志（先生方）のお陰で、一緒に切磋琢磨して学びを深めることができた。

夏堀 隼也

パラグアイでのモヤモヤと問い、仲間との対話が、何より価値のある研修でした。学校でも、日常生活でも、モヤモヤすることにワクワクし、異なる考えをもつ方に敬意をもつようになりました。



蓮尾 志津加

自分の考えと仲間の考えを交流させることで、視野が大きく広がった。対話することでしか気づけない価値観に触れることができる。自分の殻に閉じこもらず、心を開いて話せるような関係性を築いていきたいと思った。

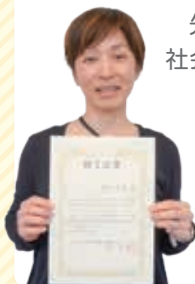
渡邊 千尋

様々な先生に出会った。

特に、小学校の先生の子どもへの接し方は私には全くない視点・心づかいだった。私の物事を捉えるレンズは超ワイド・超マクロモードも充実し、さらに多角的レンズに磨きがかかっている。

吉田 彩子

先住民族や伝統文化の継承についての社会状況を学ぶことで、多様な考え方や生き方を尊重するということの難しさを実感した。自分が考える「良い」は、相手にとっての「良い」ではないこともあることに気付き、自分と人や社会との関わりを見直したいと思った。



河上 智子

今までの、自分の考え方や見方の狭さを実感しました。様々な立場の人・考え方があること。それを一人だけで考えるのではなく、仲間と共有してより多面的に考えていきたいとワクワクしている自分に出会えました。



中村 陽美

文化の違いに触れ、自分の幸せを押しつけることのないようにしたいと肝に銘じました。また、明快な授業だけでなく、完結せず心の中に残って考え続けられるような授業をつくっていきたいと思うようになりました。

根岸 彩夏

授業への向き合い方が完全に変わりました。自身の授業スタイルを一から見直せたことは、この研修のおかげだと思っています。『変わる』ことへの恐怖を乗り越えて、これからもたくさんのことに挑戦していきます！

早川 千恵子

パラグアイで日本を大切に思っ暮らしている人たちと出会い、その思いをたくさんの人たちに伝えたいと願い、单元すべての授業を「授業 zoomer」としてオンライン配信し、世界中の大勢の人とつながれたこと。



渡邊 恋子

「答えのない問い」の答えを出すことよりも、考え続けたり、答えが変わったりしてもいいと思うようになりました。一方的でなく、お互いの思いや願いによるつながりが大切だと思いました。



佐藤 真久 | 東京都市大学教授 (JICA 東京 教師海外研修アドバイザー) |

「正解のない問いは解くのではなく、問いを抱えながら状況を見続け、自分の考えを検証し続け、他の人たちとコミュニケーションし続け、時々最適解を更新し続けることが求められます。」という言葉の意味を、1年の研修プログラムへの参加を通して理解を深めたことと思います。関わる仲間を異質な他者として認識し、活かし合うことができれば、正解のない状況を愉しみ、自分の正解にこだわることから生じる分断を乗り越えることにつながるでしょう。これからもアンテナとコミュニケーションを大切に、VUCA 社会に向き合っていっていただきたいです。



白水 始 | 国立教育政策研究所 初等中等教育研究部 副部長・総括研究官 |

研修に参加された先生方の学びが最近毎年充実してきているように感じます。これは先生方のご努力はもちろんのこと、研修プログラムの充実にも影響されているのかもしれませんが。以前に比べ、プログラムはなるべく先生方の授業づくりに直結しやすくする、先生方が話し合いながら考えるチャンスを増やす、一泊二日など自然に生まれる「余白の時間」をなるべく作って学びの副産物を創り出す、という三点を心がけてきました。それが功を奏しているのなら嬉しい限りです。

さて、そう書くと、自画自賛にも見えますが、これは子供の学びにも当てはまる、というのが実はお伝えしたかったことでした。子供が深く学んだなと感じたとき、それは子供の頑張りだけでなく、先生が用意した授業のお陰かもしれません。次は先生方の番です。

これからも子供が深く学べる授業づくりに励んでください。その証拠は、「あ、わたし今日ちょっといいことできたかも。明日も頑張ろう」と思える手応えにあります。またいい話を聞かせてください。



畑 文子 | 教育環境デザイン研究所 研究員 |

歌や絵が国境を越えて広がっていくように、先生方の心の中に湧きあがった思いもきっと、この先たくさんの子供たちの心を通して、どんどん広がっていくんですね。

音楽はメロディーやハーモニー、絵画は色彩やタッチが共鳴の仕掛け。ならば、さしずめ授業のアイテムは「問い」と「閃き」。

応援します！海外研修発、みんなでいい授業を作りつづけましょう。

JICA 開発教育教材一覧

子どもたちが世界の現状や課題、国際協力などについて知り、考え、自分たちにできることを探するために役立つ開発教育・国際理解教育のための JICA 教材をご紹介します。HP からダウンロードしたり、ものによってはご提供するなど、無料で活用いただけます。詳しくは、各ホームページをご覧ください。

地球ひろば

<https://www.jica.go.jp/cooperation/learn/material/index.html>



SDGs（持続可能な開発目標）を学べる教材



カード、すごろく、実践集など、授業に活用できる教材やヒントがたくさん！



SDGsを学ぼう、SDGsで学ぼう！



JICA地球ひろば作成のSDGs関連教材を1冊にまとめた教材ガイドブック（DVD付）。



授業で使えるショート映像集



授業でそのまま活用できるアクティブラーニング用の映像教材です。



「共につくる 私たちの未来」



SDGsの基本を、日本の国際協力や各国の子どもたちの紹介も交えて学べます。



つながる世界と日本



途上国と日本とのつながり、世界共通の目標「SDGs」や国際協力について、クイズを交えながら分かりやすく紹介しています。



JICAで学ぶ世界の課題－JICA広報誌を活用して－



「水」「栄養」「DX」の3テーマについて、JICA広報誌を授業でも活用しやすいパワーポイント教材にまとめました。活用の手引きもあります。



国際理解教育実践資料集



学習のポイントや内容等を分かりやすく解説する員用ページと、コピーして配れる生徒向けページがあります。SDGsワークも複数掲載しています。



学校に行きたい！



学校に行きたいけど行けない開発途上国の子どもたちの問題を知り、国際協力について考えることができるパンフレットです。



ぼくら地球調査隊（漫画で学ぶ、地球規模の課題）



16,000校の小・中学校で掲載された「産経ペイドパブリシティ（通称：壁新聞）」をマンガ教材にしました。環境、教育、食料、水、保健医療の5テーマあります。



集まれ！地球の教室



世界の様々な地域や課題について、クイズやワークシートを使って子どもたちにも分かりやすく説明しています。



JICAの仕事



中学生や高校生向けに、JICA／国際協力の仕事内容を分かりやすく紹介しているパンフレットです。



栄養ワークショップ教材 買い物ゲームで学ぶ



世界の栄養問題に対する意識を高めていただけるよう、楽しみながら世界の栄養問題が学べる「買い物ゲーム教材」です。



JICA 東京センター オリジナル教材

JICA は全国に 15 の拠点をもち、国際理解に関わる教員研修や、途上国からの研修員受入れ、市民の皆さまが国際協力を知り、一歩近づくためのプログラム等実施していますが、東京センターは東京・埼玉・千葉・群馬・新潟・長野を管轄する国内最大の拠点です。皆さまに国際協力を伝える活動の一つに、国際協力関係者の協力を得て作成したオリジナル教材があります。

その中でも特に人気の四つを紹介します。他のものは以下サイトをご覧ください。

明日の授業に使えるネタに出会えるかも！？

<https://www.jica.go.jp/Resource/tokyo/enterprise/kaihatsu/material/index.html>



総合的な学習（探究）の時間のアイデア集



総合の時間で、国際理解教育／開発教育／ESDをどう進められるか、学習指導案・ポイントをまとめたアイデア集です。



世界の教室から



JICA海外協力隊として世界中のさまざまな「教室」で活動してきた隊員の皆さんから寄せられた写真とメッセージが掲載されています。



逆さ地図（※）



見慣れている世界地図、いつもと違う視点で逆さから見てみると、何か新しい発見があるかも...

モノはどこからきているの？カードゲーム（※）

途上国との相互依存を楽しく実感できる教材です。（貸し出しのみとなります。）



※ダウンロード可能なデータがないため、ご希望の場合は下記HP内「送付・貸し出しを希望する場合」をご一読の上、メールにてお申込みください。（その他教材も掲載しています）

おわりに

2024年度は、初めて JICA 東京と JICA 北陸の合同開催となり、1都7県から多くの志高い現職教師とともに、パラグアイ国、バングラデシュ国（※国内代替研修に変更）への派遣研修を組み入れた1年間のプログラムを実施することができました。

グローバル感染症やロシアによるウクライナ侵攻、バングラデシュ国への本年度研修における渡航中止は、私たちに大きな経験と学びをもたらしました。グローバル感染症、ロシアによるウクライナ侵攻、気候変動、高齢化、エネルギー問題などに共通して言えることは、多くの要因が複雑にからまった“複雑な問題”であるということです。そして、地球環境問題、貧困・社会的排除問題、人間居住、グローバルな経済、健康、地政リスク、技術リスクなどの多くの問題が相互に作用しながら深刻化してきており、先進国と途上国の相互作用も深まりつつ、国の文脈を超えたグローバルな視座・視点で捉えることがますます重要となってきました。

このような状況のなかで、本年度は、グローバルな視座・視点を養うために、地域、校種、派遣国を超えた参加教員の議論を通して、[多文化共生]、[ジブンゴト（自分ごと化）]、[つながり&共生]、[答えのない問い]、[経済成長の光と影]を横断的テーマとした混成チームを編成しました。さらには、持続可能な開発のための教育（ESD）で指摘されている4つのレンズを通して、さまざまな課題・資源・時間・空間・人をつなげる統合的レンズ（つながり・かかわり）、身近な文脈（歴史や地域）で深め、世界の文脈に広げる文脈的レンズ（広がり・ふかまり）、課題の再設定や捉え直し、意味づけ、問いを重視する批判的レンズ（捉え直し、意味づけ）、社会が変わる・変える、個人が変わることを連関させた変容的レンズ（個人の変容、社会の変容）を活かすことにより、今日までの教育実践を新たな次元で捉え直すものでした。

幸いにも、今年度実施された、パラグアイ国、バングラデシュ国（※国内代替研修に変更）への派遣経験もさることながら、関係する団体や学校の協力を受けることができただけでなく、これまでに増して相互に議論をする時間を増やしたことにより、大変充実した研修となりました。地域・校種・派遣国を超えた横断的テーマに基づく混成チームは、帰国後や代替研修実施後の授業づくりについても議論をし合い、授業実践にも互いに参加することを通して、学び合いを継続しました。新学習指導要領では、「持続可能な社会」という用語が多々明記されているだけでなく、「何ができるか」や「知っていること・できることをどう使うか」といった資質・能力の重視、主体的・対話的で深い学びやカリキュラム・マネジメント、社会に開かれた教育課程について強調がなされています。近年のグローバル化の時代、これからの地球市民性と混成文化の時代、VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の時代において、本研修プログラムに参画された教員自身がこの経験を活かし、想い先行・びっくり体験報告に終わらない取組として、同僚の教員らや地域の方々とともに、新たな次元で、学校教育活動の充実に役立てていただけることを切に願う次第です。

2024年度教師海外研修アドバイザー

東京都市大学大学院 環境情報学研究科
研究教授 佐藤 真久

